

「静岡県の授業づくり指針」の活用に係る研究(24・25年度)まとめ

授業づくり支援課授業支援 班
授業づくり支援課授業支援 班
東 部 支 援 班

主題設定の理由

1 研究の背景

平成 23 年度末、総合教育センターでは、学校における魅力ある授業づくりを支援するため、9教科・10冊の「静岡県の授業づくり指針」を作成し、各学校に配布した。「静岡県の授業づくり指針」は、平成 16 年に作成、配布した「静岡県版カリキュラム」の趣旨を継承しながら、静岡県の子どもの実態を踏まえ、新しい学習指導要領の趣旨を具体化したものであり、主に次の四つの内容で構成している。

(1) 確実に身に付けさせたい内容

(2) 発展的な内容

(3) 「静岡県ならではの」を生かした内容

(4) 小学校、中学校、高等学校の指導内容を体系的・系統的に捉えた内容

これらの内容に加え、各教科版の作成においては、新しい学習指導要領の趣旨を反映した授業づくりを進めるため、次のような工夫を行った。

(1) 国語

今、求められている国語の能力を身に付けさせる重要な鍵「言語活動の充実」に焦点を当て、理論及び全領域の具体的な単元計画を示した。

(2) 社会

「身に付けさせたい力」が明確になるよう、学習指導要領の文章を再構成するとともに、「手立ての例」を充実させた。

(3) 算数/数学

単元を通して意識したい事柄を「核となることから」として、「算数的活動」「数学的活動」を具体的な事例で示した。

(4) 理科

単元の学習内容の構造を図示した「単元構想図(例)」、問題解決的な学習や探求的な学習活動のための学習過程などを示した。

(5) 外国語活動/外国語

コミュニケーション能力の育成を目標とした授業づくり、単元構想、言語活動設定の仕方などを段階的に示した。

(6) 体育/保健体育

多様な学習活動例や単元計画例、小・中・高の系統などを、豊富なイラストや一覧表を用いて分かりやすく示した。

(7) 技術・家庭(技術分野)

具体的な学習内容や活動例を安全教育に焦点を絞って示した。

(8) 家庭/技術・家庭(家庭分野)

小・中の体系化を柱とした具体的な授業展開例や、授業で活用できる資料などを紹介し、専門外の教員にも使い易いものとした。

(9) 音楽

設定した指導事項に対応した具体的な学習活動や評価規準等の具体例を示し、目標や学習活動との関連を明確にした。

(10) 図画工作/美術

静岡県ならではの題材・材料例や授業展開例、美術館との連携情報など、写真・イラスト・図を用いて分かりやすく示した。

総合教育センターでは「静岡県の授業づくり指針」をセンター主催の悉皆研修、希望研修における研修資料として利用することや、学校訪問において指導・助言の根拠として示すことで、学校での活用を進めることを目指した。しかし、各学校に1セットのみの配布という現状では、全ての教員の授業改善への取組を支援するには不十分であると考えた。そこで、総合教育センターホームページに掲載したweb版を含めた「静岡県の授業づくり指針」を多くの学校や教員に活用してもらうため、よりよい活用の方法や新たな実践事例等についての研究を行うこととした。

2 研究の目的

本研究は、「静岡県の授業づくり指針」が、各学校にとって「確かな学力」の育成に向けた魅力ある授業づくりに取り組むための「指針」となるよう、一層の普及を図るとともに、効果的な運用のための啓発を目指すことを目的とする。併せて、言語活動や評価など新たに国から示された内容について、補足資料を作成したり、先進的な事例を提案したりすることを目指す。

研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針」を用いて学習指導要領の主旨、小・中・高の系統性を理解することで、授業改善や教員の資質向上を図ることができる。

本研究では、上記を教科共通仮説とし、各教科の実態に応じてより具体化したものを教科の仮説としてそれぞれ設定する。

研究の期間及び方法

1 研究期間

平成24年度・25年度・26年度（3年間）

2 研究方法

(1) 研究体制

ア 研究委員会

- | | | | |
|---------|---|----|---------------------|
| (ア) 指導者 | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 江口 尚純氏（国語） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 塩川 亮氏（社会）（24年度） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 磯山 恭子氏（社会）（25・26年度） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 國宗 進氏（算数/数学） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 丹沢 哲郎氏（理科） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 白畑 知彦氏（外国語活動/外国語） |
| | 常葉大学教育学部 | 教授 | 伊藤 宏氏（体育/保健体育） |
| | 静岡県立大学食品栄養科学部 | 教授 | 新井 映子氏（家庭/技術・家庭） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 紅林 秀治氏（技術・家庭） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 北山 敦康氏（音楽） |
| | 国立大学法人静岡大学教育学部 | 教授 | 登坂 秀雄氏（図画工作/美術） |
| (イ) 委員長 | 静岡県総合教育センター学校支援担当参事兼授業づくり支援課長 | | |
| (ウ) 委員 | 静岡県総合教育センター東部支援担当参事、授業づくり支援課授業支援 班長、授業支援 班長、東部支援班長、及び、静岡県総合教育センター指導主事 | | |

(2) 研究方法

ア 訪問指導における活用と活用方法の提案

授業支援訪問や要請訪問の際に、「静岡県の授業づくり指針」を用いて授業者や教科担当、学校全体への指導・助言を行ったり、授業改善に効果的な活用方法を提案したりする。その後、学校における活用状況等を調査し、その効果を検証する。

イ 悉皆研修、希望研修、学校等支援研修における活用及び活用方法の提案

さまざまな研修の際に、「静岡県の授業づくり指針」を用いて講義を行ったり、授業改善に効果的な

活用方法を提案したりする。その後、学校における活用状況等を調査し、その効果を検証する。

ウ 教科等指導リーダーと共同での効果的な活用事例の開発及び提案

教科等指導リーダーに「静岡県の授業づくり指針」の内容を生かした授業を実践してもらい、その効果を検証する。また、共同で新たな教材を開発する。

エ 高等学校教育課程研究委員と共同での効果的な活用事例の開発及び提案

高等学校教育課程研究委員に「静岡県の授業づくり指針」の内容を生かした授業を実践してもらい、その効果を検証する。また、共同で新たな教材を開発する。

オ 大学における活用方法の検討及び活用

教科指導者が所属する大学において、教職を目指す大学生を対象に「静岡県の授業づくり指針」を用いた授業を行うなど、教員養成の視点での活用の可能性を探る。

本研究では、上記研究の方法から、各教科の実態に応じて適切なものを選択し、実践することとした。以下にその一覧を示す。

	ア 訪問指導における活用と 活用方法の提案	イ 悉皆研修、希望研修、学校 等支援研修における活用 及び活用方法の提案	ウ 教科等指導リーダーと共 同での効果的な活用事例 の開発及び提案	エ 高等学校教育課程研究委 員と共同での効果的な活 用事例の開発及び提案	オ 大学における活用方法の 検討及び活用
国 語	○	○	○		○
社 会	○	○	○		○
算数 / 数学	○	○			
理 科	○	○	○	○	
外国語		○	○		
音楽		○	○		○
図画工作 / 美術		○			○
体育 / 保健体育		○			
技術 / 家庭 (技術)		○	○		
技術 / 家庭 (家庭)		○			

研究の内容

1 国語科

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 国語」(以下、「指針」)を用いて「言語活動を通して指導事項を指導する」ことの意義を理解することで、授業改善や教員の資質向上を図ることができる。

(2) 研究の方法

ア 研究の進め方

(ア) 訪問指導における活用

学校の実態に即して「指針」の適切なページを選択して配布し、解説することにより、理解を図る。

(イ) 悉皆研修、希望研修、学校等支援研修における活用

集合研修において必携とし、授業づくりに当たり特に重視したい内容について解説するとともに、「指針」の形式に基づいた指導計画の作成や具体的な言語活動の構想・体験・交流等の演習を行い、理解を図る。また、補足・追加資料を作成・活用し、その効果を検証する。

(ロ) 教科等指導リーダー等との共同による効果的な活用事例の開発

教科等指導リーダーや地区教科指導員等に活用や授業実践を依頼し、その効果を把握する。

(ハ) 大学における活用

静岡大学教育学部3年生に対し、「国語科教科内容指導論」において「指針」を活用した講義・演習を行い、国語科授業づくりに関する基礎的な知識の習得について効果を把握する。

イ 検証の方法

(ア) 該当する学校等

研修主任や校長等に聞き取り調査を行い、仮説を検証する。また、訪問報告書や学校等支援研修アンケートの記述を分析し、仮説を検証する。

(イ) 5年経験者

指針活用アンケートを実施し、仮説を検証する。また、抽出した研修員について、学習指導案等を分析し、仮説を検証する。

(ロ) 10年経験者・教科等指導リーダー・希望研修参加者

指針活用アンケートを実施し、仮説を検証する。

(ハ) 静岡大学教育学部3年生(「国語科教科内容指導論」受講者)

アンケートを実施するとともに大学教員に聞き取り調査を行い、仮説を検証する。

(3) 研究の内容

ア 訪問指導における活用

(ア) 訪問指導における活用の実際(取組)

国語科においては、「言語活動を通して指導事項を指導する」ことが求められている。このことについて、学校の理解がどの程度進んでいるのかを訪問前に把握しておく必要がある。そこで、事前に届いた学習指導案を分析し、国語科指導における学校の実態を把握するようにしている。その上で、学校の実態に応じて「指針」の適切なページを増刷りして配布、解説する。例えば、国語の授業づくり全般について理解が十分でないと判断した場合には、「国語科の授業づくりのポイント」(p.14～15)【資料1】を用いて、指導事項を基に身に付けさせたい力を確定し、単元を組み立てていく手順について解説する。授業づくりにおけるPDCAサイクルについて理解を促す場合には、「授業づくり規準(国語科)」(p.152～153)を用いる。また、単元を貫く言語活動を位置付けた指導過程について具体

的なイメージが描けていないと判断した場合には、「指導計画例」(p.36～105)を用いる。その際、児童生徒が行う言語活動についてもイメージが持てるように、ワークシート等の具体物【資料2】を作成し、「指導計画例」と併せて解説している。

(イ) 学校の実践状況(成果)

訪問後、学校からは研修主任が取りまとめた「振り返り」(報告書)が送付される。指導助言をどのように受け止めたのか、その記述を分析した。その結果、全ての「振り返り」に、身に付けさせたい力を明確にすること、単元を貫く言語活動を位置付けること、実生活に生きる国語を指向していくことなど、国語科における授業づくりのポイントについての記述が見られた。【資料3】このことから、指導助言の場面における「指針」の活用が、各学校の国語科授業改善に寄与していることが分かる。

また、要請訪問を通して、指導助言に基づいた単元を構想することの必要性を実感したA小学校では、研修主任がまず、学習指導案(略案)の形式を変更することに取り組んだ。「指針」の指導計画のつくりを参考に必要項目を絞って記載するとともに、1時間を切り取ったものではなく単元全体が見えるものにした。また、「指針」の各指導計画例で示しているように、単元名の表し方を「言語活動～身に付けさせたい力～」とし、指導事項を身に付けさせるために具体的な言語活動を位置付けていることを常に意識できるようにした。その上で、3か月後の2度目の訪問指導時には、全学級担任が新しい学習指導案の形式にのっとり単元を貫く言語活動を設定した指導計画を立て、授業を公開した。研修主任は、再び中心授業を行った。事後の協議会では、身に付けさせたい力が付いているのか、本時1時間のみではなく単元全体で検証するという視点で研修ができた。このような取組について、同校校長は、「今の課題に即したものを研修主任が校内に提供し、他の教員が納得して授業改善に取り組めた。研修主任は、2回の中心授業で得た手応えによって、主任としても自身を持って話ができ

(6) 国語科の授業づくりのポイント

ア 年間指導計画を立てる(年度当初に行う)

身に付けさせたい言語能力を年度の中で確実に指導するために、時期、領域の指導事項、(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)、言語活動例、教材を一覧できる年間指導計画を立てます。系統性に配慮しながら、全ての指導事項と言語活動例を、年間でバランスよく配置します。

・各単元では、扱う領域や重点的に扱う指導事項を絞り込み、身に付けさせたい力を焦点化します。単元によっては、一つの指導事項を分割し、更に絞り込みます。

・[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]を、領域の指導事項と関連させ、全ての単元に位置付けます。

・身に付けさせたい力に適した言語活動例を選択します。その際、目標と同じ領域から選択することを基本としますが、適したものがない場合は、他領域や他学年から取り上げたり、他のものを設定したりすることもできます。

・身に付けさせたい力の系統性を考え、意図的に教材を配列します。

【小学校4年生「書くこと」における年間指導計画 例】

月	時	指導事項					伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	言語活動例					教材名
		ア	イ	ウ	エ	オ		ア	イ	ウ	エ	オ	
5	11			◎			(ア)		○				学校新聞を作ろう
7	10	◎				○	(イ)			○			見学したことを報告しよう
9	9	◎				○	(ウ)	○					物語の作り方をくふうしよう

※指導事項：言語活動例の項目については、学習指導要領、または、(5)学習内容の系統(p.20～29)を参照すること。

イ 児童生徒の実態を把握する

指導事項に照らし合わせて、児童生徒が身に付けてきた言語能力の実態を把握します。

(例) ①時間的な順序、事柄の順序にしたがって、文章を書く。

◆段落相互の関係を意識しながら、目的に応じて中心となる内容の事例を挙げて説明する。

※○は身に付けた力、◆は課題が見られる力を表しています。

ウ 指導事項(身に付けさせたい力)、言語活動例、教材を再確認する

児童生徒の実態を踏まえて指導事項(身に付けさせたい力)を確認し、次にそれを身に付けるのに適した言語活動例と教材を再確認します。変更する場合は、年間指導計画と照らし合わせながら、年間で全ての指導事項や言語活動例を扱えるよう留意します。

エ 選択した教材について特長を明確にする

身に付けさせたい力や言語活動に留意しながら選択した教材を分析し、特長を明らかにするとともに、必要に応じて一部分を用いたり、他の教材と組み合わせたりします。

(例) 中心となる内容を明確にし、段落相互を関係付けながら書く力を付ける上で適している。

オ 単元目標を設定する

※「静岡県授業づくり指針 国語」では、「単元」を「単元目標」の実現を図る授業展開のまとまりとして捉えています。(参照：「3 小学校・中学校における学習(授業計画例)」)

例【単元目標】

- ①関心を持った出来事が伝わるように、構成等を工夫しながら新聞記事を書くこと。(国語への関心・意欲・態度)
- ②書くこととすることの中心を明確にし、事実が的確に伝わるよう理由や事例を挙げながら書く。(「書くこと」ウ)
- ③句読点を適切に打ち、また、段落の始めについては行を改めて書く。(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ウ))

- 14 -

【資料1】指針「授業づくりのポイント」(抜粋)



【資料2】指導計画例に合わせた具体物

- ・単元構想の考え方や単元を貫く言語活動の考え方のポイントが分かった。
- ・単元を貫いた言語活動の展開例や様々な言語活動例をお話していただき、これからの授業実践に向けて大変参考になった。
- ・実生活に生きる国語教育とはどういうものか、どのような考え方で、どのように手立てを組んでいたらよいか、十分とはいえないが理解できた。
- ・教材を研究するためには、まず単元を通した「付けたい力」を明確にすることが大切であることが分かった。

【資料3】「要請訪問振り返り」の記述

るようになり、周りからの信頼を得ることにつながった。」と述べている。このことから、「指針」が授業改善の方向性や具体を示す道標となり研修主任の意欲を喚起したこと、ひいては校内研修の質の向上にも寄与したことが分かる。

イ 悉皆研修、希望研修、学校等支援研修における活用

(ア) 各研修における活用の実際（取組）

国語科の授業づくりにおいて特に重視したい点について「指針」を用いて解説し、まず理論面の理解を図った。併用する資料には「指針」の該当ページを示し【資料4】研修後も確認できるようにした。併せて『静岡県授業づくり指針 国語』の活用の仕方（例）【資料5】を配布し、「指針」には多様な使い方があることにについても紹介した。

続いて、単元の組立て方について、「指針」の指導計画例を基に解説した。ここでは、とりわけ、単元目標の設定の仕方について具体的に扱った。それは、訪問指導等の際に目にする学習指導案の目標が指導事項に基づくものでなかったり、目標と手立てとの区別が曖昧であったりする場合が見受けられるためである。

理論と単元の組立て方についておおよその理解を図った後、演習を行った。最初は、「指針」の指導計画に設定された言語活動を実際に体験するというものである。多く用いたものは、「読むこと〔小学校低学年〕」（p.66～67）のペープサート劇である。研修員の中には、ペープサート劇がどのようなものなのか理解が曖昧な者がいる。また、劇をすることはできても、どのような学習活動が遂行されれば設定した目標を実現することになるのか、イメージできていない者もいる。そこで、児童になったつもりでワークシートに考えを書き、実際に演じてみたり、劇を見せ合ったりする演習を行うとともに、どのようなところに身に付けさせたい力が表れていたのか協議することで、理論と実際の授業とを結び付け、具体的な理解を図るようにした。

【資料6】

その上で、別教材を用いて指導計画を作成する演習を行った。これまでの講義・演習を基に、グループで協議しながら指導計画を作成していくことで、手順や留意すべきことについて理解を深められるようにした。作成後は、グループ同士の交流を行い、指導事項（身に付けさせたい力）と言語活動とのつながりは適切であるか、児童生徒が取り組めるものであるか等について協議した。【資料7】

10年経験者研修・希望研修では、グループで作成した指導計画を基に、言語活動の具体物等を作成する演習まで行った。【資料8】グループ交流も行い、指導上のポイントを把握

なぜ、言語活動の充実か？

指針 p.7

知識基盤社会・グローバル化

- 社会の変化に対応する能力や資質
- PISA調査等の各種の調査から
 - 「**思考力・判断力・表現力等**」に課題
 - 学習意欲が低い
- 改正学校教育法「学力の重要な3つの要素」の規定

付けたいけれど付いていない力

【資料4】併用する資料の例

『静岡県の授業づくり指針 国語』の活用の仕方（例）

- ・ 国語科における「言語活動の充実」について知りたいとき→p.7～
- ・ 授業づくりのポイントを知りたいとき→p.14～15 + p.152～153（授業づくり規準）
- ・ 年間指導計画を考えたいとき→p.30～33、148～151
- ・ 単元を貫く言語活動を位置付けた指導計画を知りたいとき→p.36～83
- ・ 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の具体的な指導計画例を知りたいとき→p.84～105
- ・ 全国学力・学習状況調査の生かし方を知りたいとき→p.107～109
- ・ 資料「郷土ゆかりの文学」を用いて指導計画を立てたいとき→p.118～125

【資料5】活用の仕方の紹介資料



【資料6】言語活動を体験する演習

したり、身に付けさせたい力が具体物に反映されているか等について確認したりするようにした。【資料 9】実際に作成することによって、身に付けさせたい力が十分に反映されていないかったり、難易度が児童生徒の実態に合わなかったりすることが明らかになり、言語活動として適切でないという判断をせざるを得ない場合もある。したがって、研修員には「作ってみるからこそ分かる」ことの重要性を説き、単元の開始前に教師が試行することを推奨した。



【資料 7】指導計画の交流



【資料 8】演習で作成した
具体物（本の帯）



【資料 9】具体物等の交流

(イ) 補足・追加資料の作成・活用（取組）

「C読むこと」は、授業改善上、最も課題の多い領域だといわれる。それは、児童生徒にとって読みの目的や見通しが不明確なまま、授業が展開されていることも少なくないためである。そこで、単元を貫く言語活動を指導過程に位置付け、何のために読むのか、どのように読むのか、教師と児童生徒とが共有しながら学習を進めていくことが望まれている。一方、教師側からは、「単元を貫く言語活動の意義は概ね理解できるものの、実際にどのような言語活動を取り入れればよいのか具体が分からない。」という声を聞く。また、「本時の指導はどのように変わるのか。」という声もある。こうした現状への対応として、補足・追加資料を作成することとした。

補足・追加資料の第 1 は、「指針」の指導計画「C読むこと〔小学校低学年〕」(p.66～67) に注釈を加えた「指導計画作成のための参考資料」である。言語活動を具体化していく際の留意点や、活動主義にならないための評価の在り方等について、解説している。【資料 10】

補足・追加資料の第 2 は、「C読むこと〔小学校低学年〕」(p.66～67) の 1 単位時間の学習指導案（本時案）である。単元を貫く言語活動を位置付けた指導過程では、文章を読むことと言語活動を行うことを同時進行で行うことが望まれる。「読んでから言語活動」ではない。本資料では、単元全体と本時とのつながりが明確になるように配慮している。

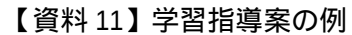
補足・追加資料の第 3 は、「指針」の指導計画を学習指導案（細案）の形式に仕立て直したものである。小・中学校においては、各校独自の学習指導案の形式があるため、国語科として盛り込むべき事柄が十分ではない場合もある。そこで、国語科学習指導案に必要な

時	評価規準	評価方法	学習活動
1			「ふたりはともだち」所収の作品の読み聞かせを聞き、がまくん、かえるくんシリーズの物語に興味を持つ
2			・面白いところ、好きなところを述べ合う。 学習のめあて「大好きなお話をペープサート劇にしよう」を知る
3	②お気に入りの場面について、登場人物の行動や会話に着目し、想像を広げて読んでいる。 （読む能力）ウ	ワークシート	・教師が作ったペープサート劇を見て、ペープサート劇が自分の想像した登場人物の動きやセリフを付け足して物語を語っていくものであることを理解する。 ・「登場人物・場面設定・事件」等のペープサート劇に必要な要素を確認する。
4	③会話文にはかぎ（「」）が使われていることを理解して、お気に入りの場面を視写している。 （国語についての知識・理解・技能）イ		・がまくん、かえるくんシリーズについて、大好きな物語やお気に入りの場面を見付けながら並行読書することを考える。（学校図書館や地域との連携）
5			「お手紙」のお気に入りの場面を見付けながら読む
6			・役割読みなどをしながら繰り返し音読し、挿絵も参考にして登場人物の様子や物語の展開をつかむ。
7			・お気に入りの場面を見付け、登場人物、場面設定、事件等を捉える。
8			・なぜそこがお気に入りの場面なのか、場面の様子、登場人物の行動や会話、シリーズの他の作品との関わり、挿絵などを基に話し合う。
9			・お気に入りの場面の中で最も好きな部分を、かぎ（「」）の使い方に注意しながら視写する。
10			お気に入りの場面をペープサートで演じる
11			・視写した部分を中心にしたペープサート劇をグループで見せ合い、どのような言葉で場面の様子や登場人物の会話を表現しているか、なぜそのような動きやセリフにしたのかを交流する。
12			大好きな物語のお気に入りの場面をペープサートで演じる
			・並行読書してきた物語から好きな作品を選び、好きな理由を明らかにしてお気に入りの場面を決める。
			・お気に入りの場面を中心に物語を繰り返し読み、場面の様子や登場人物のセリフなど想像したことをワークシートにまとめる。
			「ペープサート劇発表会」を行う
			・発表を聞いた感想を伝え合う。

【資料 10】指導計画作成のための
参考資料（抜粋）

補足・追加資料の第五は、言語活動例の系統表である。国語科は、言語活動の充実において基盤となる教科である。国語科の各学年・各領域で経験する言語活動と、児童生徒の発達の段階に配慮すべき点（文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集」平成 23 年 10 月）について、小学校・中学校・高等学校（国語総合）の系統表を作成した。

これら補足・追加資料は、訪問指導や各研修等において既に活用している。また、研修員や学校の感想・要望を参考に、改良を重ねているものもある。

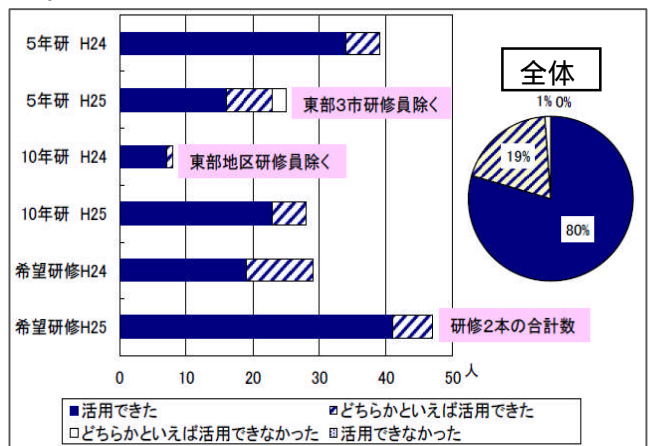


【資料 12】作成した言語活動の具体物等の例

(ウ) 研修員へのアンケート調査等から（成果）

研修後、各研修員に対してアンケート調査を行った。(注：5年経験者は授業実践の後に実施。10年経験者は2回目の教科別研修終了時に実施。希望研修は研修終了時に実施。)その結果は、「活用できた」と「どちらかといえば活用できた」を合わせて99%という極めて高い活用率であった。【資料13】

また、「特に参考になったところ」としては、「指導計画例」(p.36～105)が突出して多かった。各研修に共通する感想として、「『指針』の手順に沿って単



【資料 13】研修員の「指針」活用状況

元を構想していくことで学習指導要領を基にした学習指導案を作成することができる。」

「具体的な指導計画例が自分の学習指導案作成に参考になった。」という声が挙げられた。「指針」が示す国語科の授業づくりのポイントや指導計画例が、教員の経験段階によらず有効であることが分かる。

また、「『指針』に基づく演習により具体的な指導計画の組立て方を理解することができた。」「実際に言語活動の具体物等を作成することで力になった。」「言語活動の具体物が用意されていたので、イメージが分かってとても参考になった。」との声もあった。各演習及び言語活動の具体物等が手掛かりとなり、研修員は何をすればよいのかが一層明確になったといえる。これらのことから、演習の効果や補足・追加資料の有効性についても確認できた。【資料 14】

なお、研修受講後、研修員が自校教員にどのような働き掛けをしたのか、追跡調査（抽出：アンケートまたは聞き取り）を行った。校内研修における研修内容の伝達が最も多く、その他、「『指針』に沿って指導計画を作成する演習を行った。」「『指針』の指導計画の形式をアレンジして自校用の学習指導案の形式にした。」「研修主任として校内研修を推進する際の根拠資料として『指針』を示した。」「各研修に参加した者同士が自発的に集まり、国語科の授業づくりについて語り合う校内自主研修が始まった。」などの報告があった。このことから、「指針」が校内研修の活性化の一助となったことが分かる。

(I) 5 年経験者の授業実践から（成果）

B 研修員は、小学校第 6 学年の担任である。年間を通して、言語活動を軸にした単元構想の工夫を自身の研究テーマに据えて取り組んだ。B 研修員は、「C 読むこと〔小学校高学年〕」(p.70～71)を読み込み、今求められている授業のイメージをつかんだ。そして、授業実践 では、「心に残った場面について本の帯を作って 5 年生に紹介しよう」という言語活動を設定した。自身が作成したモデルを単元の導入時に示し、学習の見通しを持たせるとともに、児童に持参させた本の帯の内容の比較を通して、どのようなことを帯に書くとよいのかを理解させた。相手意識・目的意識の明確なこの言語活動は、児童の興味・関心にも合致しており、単元を通して学習意欲を持続させることができた。授業実践 の前には再度「C 読むこと〔小学校高学年〕」(p.70～71)を読み込み、「心に響いた人物をリーフレットで紹介しよう」という言語活動を設定し、教科書教材だけでなく複数の伝記を並行して読むことを単元に位置付けた。単元の導入時にモデルを示し、学習の見通しを持たせる工夫を本単元においても実施した。また、B 研修員は、児童個々の思考や学習状況を把握し、身に付けさせたい力の定着に向けて個に応じた支援を行った。これらのことにより、児童は紹介したい偉人を積極的に決め、本や文章を読んで抱いた思いを基に意欲的にリーフレット作りに取り組むことができた。

C 研修員は、中学校第 2 学年の担任である。目指す授業を「表現することの楽しさを実感できる授業」として、授業実践に取り組んだ。授業実践 では、「メディアとの付き合い方について考え、『私の提言』をする」という言語活動を設定した。生徒は、教材文の筆者

・今までのやり方では無駄があり、複雑になってしまうが、「指針」を参考にするとは分かりやすく筋も通っていて、簡潔に指導案を作成することができた。

・指導計画例を活用しながら実際に指導案を作成する演習があったので、指導案の書き方がよく分かった。

・今まで不安に思っていた目標設定のことがよく分かった。

・言語活動の設定の際、多くの事例の中から考えることができた。

・「指針」の読み方についても説明を受けたので、一層活用できるようになった。

・指導案作りはもちろん、普段の授業のポイントチェックにも「指針」を使った。

・言語活動の具体物（資料）を見てなるほどと思い、是非実践してみたいと思った。

【資料 14】研修員の感想

の主張と実際のテレビ番組、新聞記事、地域のニュース等とを結び付けながら、自分の考えを持った。その上で、自分とは考えの異なる友達と交流し、そのことを参考にしながら各自が提言をまとめた。授業実践 では、二つの文学作品を読み『『家族のきずな』を語り合う』という言語活動を設定した。生徒は、作品に共通する家族のきずなについて仮のキーワードを設定し、それに沿って読み深めた。その上で、意図的に編制された、考えが異なる者同士、または考えは同じだが根拠が異なる者同士のグループで意見を交流した。生徒は交流により更に考えを深め、自信を持って書きまとめていた。C 研修員はいずれの授業実践においても、補足・追加資料の第三である「指針」の指導計画を学習指導案（細案）の形式に仕立て直したものを使用し、「指針」の「国語科の授業づくりのポイント」（p.14～15）の手順に沿って単元を構想した。このことにより、身に付けさせたい力が明確になり、単元を通じてぶれることなく指導がなされた。

他の5年経験者からは、「研修以前は1時間1時間を組み合わせていくように考えていたので、その単元でどのような力を付けたいのかが明確ではなかった。単元構想の仕方を学べたことは、授業改善につながる。」「指導事項を絞ったことで身に付けさせたい力や指導内容、評価がはっきりした授業を行うことができた。」といった声が挙げられた。「指針」に基づき単元を構想することが、研修員の授業を変容させることにつながったといえる。

(オ) 学校等支援研修から（取組と成果）

国語科が担当学校等支援研修は、年間約30件である。内容は、授業づくりに関する講義、公開授業への指導助言等であるが、訪問指導や各研修と同様に、「指針」の「国語科の授業づくりのポイント」（p.14～15）や指導計画例を活用しながら対応した。

授業づくりに関する講義を実施した学校へのアンケート調査からは、「今後の実践に役立った」と「どちらかといえば役立った」を合わせて100%近い評価を得た。身に付けさせたい力を明確にすることの重要性や、単元を貫く言語活動を位置付けた指導過程を構想することの意義等を「指針」の指導計画例等を基に具体的に捉え、授業改善への意欲を高めていることが分かった。補足・追加資料である言語活動の具体物等を提示し解説したことも、教員が言語活動の具体像をイメージし、実践への手掛かりをつかむ上で効果的だったといえる。【資料15】また、特別支援学校からは、「初年度講義を受け、言語活動を意識して取り入れた。成果は見えにくかったが、教員が意識を持ち継続して実践することで、子どもたちも学習体制に慣れて定着するのではないかと思った。」という声もあった。同校は3年間にわたり学校等支援研修を活用している。本研修を、単元を貫く言語活動を位置付けた指導計画の組立て方等、国語科としての基本的な事柄について教員が共通理解する場と捉え、児童生徒の実態に合わせた実践につなげている。

学校等支援研修を実施した学校（抽出校）

・身に付けさせたい力を押さえる、3点セット（注：「指針」で示す単元目標設定の際のキーワード）で考える、言語活動の試行をするなど、9月から授業に向けてやってみたいと思った。国語は苦手という意識がずっとあったが、今回の研修で「楽しそう。やってみよう。」と思った。【小学校】

・教具の実物（注：言語活動の具体物等）を見せていただけたことで、講義の内容を具体的に理解することができた。次の単元ではこういう方法で構想しようというイメージがわいた。【小学校】

・最近の通常小学校の国語科の指導について知ることができ、よかった。国語の授業計画を立てる上で参考になった。【特別支援学校】

【資料15】学校等支援研修アンケートの感想

・学校等支援研修後、校内の研究授業が大きく変わった。教師が単元の導入でゴール（自動車図鑑作り）を示すことにより、第二次で教材文を読むときも子ども自身が「このことは使えそうだ」と意識していた。【小学校教頭】

・指導主事による講義を受け、時間はかかったが、全教員が言語活動を位置付けた単元を構想することに前向きになった。指導案や授業そのものが以前より向上したと感じる。

【小学校研修主任】

【資料16】学校等支援研修聞き取りの結果

に、およそ半年後、聞き取り調査を行った。対象は、教頭または研修主任である。その結果、「教員が単元を貫く言語活動を意識して授業を構想するようになり授業が大きく変わった。」「児童の学習ぶりが受け身ではなくなり授業に手応えを感じるようになった。」といった声をいずれの学校からも聞くことができた。【資料 16】

授業改善が進めば、児童生徒の意識や学習状況にも変化が生まれる。D校の「とみこさんの技をショーウィンドウで紹介しよう～心情や場面の様子について優れた叙述を根拠に自分の考えをまとめる～」教材「川とノリオ」(小学校第6学年)という単元について、学習指導案作成段階から関わった。「指針」の「国語科の授業づくりのポイント」(p.14～15)や指導計画例の説明を受けた授業者は、身に付けさせたい力を焦点化し、児童一人一人が確実に読みの目的を持って読み進められるよう、単元を貫く言語活動として本のショーウィンドウ作りを設定した。ショーウィンドウのモデルの提示や物語を読む視点の共有化、児童一人一人の実態に応じた支援の工夫等、多くの手立てを用意した本実践は、授業改善に富むものである。学習後の振り返りからは、授業者の意図を児童が的確に捉え、身に付ける力を意識しながら学習に向かっていたことが分かる。【資料 17】なお、本実践のおよそ5か月後に、授業者に聞き取り調査を行った。引き続き言語活動を位置付けた単元を構想し実践する中で、「児童の『分からない』『何を書けばいいの』『できない』という声がなくなった。自分も児童も楽しんで取り組めている。本や文章を読む際の新たな目の付けどころが児童に身に付いたと感じる。」との回答があった。

これらのことから、「指針」が授業改善への意識を向上させること、そして、「指針」に基づいた授業づくりの積み上げが児童の変容を生むことが分かる。

ウ 教科等指導リーダー等との共同による効果的な活用事例(取組と成果)

教科等指導リーダーや地域の教科指導員には、「指針」の積極的な活用を依頼している。具体的な活用の仕方は各人に委ねているが、アンケート調査からは、自身の授業実践及び主として若手教員への指導の際に活用したという回答が多い。

教科等指導リーダーのE教諭は、『お話わくわくボックス』を作って、お気に入りの作品を紹介しよう～想像を広げながら読む～教材「お手紙」「ふたりはともだち」シリーズという単元を実践した。単元の導入では、自身が作成した「お話わくわくボックス」【資料 18】を提示しながらシリーズの作品を紹介し、児童に教材を読む目的や並行読書の目的を示すことによって学習の見通しを持たせている。学習指導案作成段階から指導主事が関わった本実践は、地域の研修会で公開され、授業改善の具体像を示すことにつながった。



【資料 18】リーダーの実践

地域の教科指導員であるF教諭は、地域や校内の若手教員に「指針」の活用を呼び掛けた。若手教員の「国語でどのような力が付いてい

るのか、本当に児童に力が付いているのか分からない。」という悩みに応えるべく、「指針」を用いて授業づくりのポイントを解説した。指導を受けた若手教員は、「指針」の指導計画「C読むこと〔小学校低学年〕」(p.66～67)を参考に、教材「かさこじぞう」において、単元を貫く言語活動として音読劇を設定した。本単元のねらいは、場面の様子を想像しながら音読として表現していくことであり、「指針」の考え方が生かされた授業になった。若手教員によれば、今後は本単元で身に付けた力が次単元で活用できるのかを調査するという。

これらのことから、「指針」がリーダー自身の授業改善や他者への指導に機能していることが分かる。【資料19】

教科等指導リーダーのG教諭は、「読むことの言語活動例」という資料を自作し、自校や地域教員への指導の際に使用した。同資料は、「C読むこと」の言語活動の具体が分からないという教員の声に対応したものである。平成24年度第3回教科等指導リーダー研修会(1月開催)にて紹介された同資料の有効性に着目し、事例及び対応する指導事項等を追加して修正案を作成した。【資料20】修正案は、平成25年度第1回教科等指導リーダー研修会(5月開催)や各研修等で既に活用しているほか、G教諭だけでなく他のリーダーも、地域等の研修会における助言時に活用している。修正案は、研修員や学校から極めて高い評価を得ている。このことから、教科等指導リーダーとセンターとが共同で開発したことにより、教員のニーズに即した質の高い資料を生むことができたといえる。なお、修正案は、研修員の感想や要望を参考に改良を重ね、現在はA3判両面に「C読むこと」の言語活動の一覧及び具体物等の写真を配置したものとなっている。

エ 大学における活用(取組と成果)

静岡大学教育学部3年生を対象に、「国語教科内容指導論」において「指針」を活用した2回の講義・演習を行った。

初回は、言語活動の充実の意義や単元の組立て方等、基本的な事柄について講義をした後、「指針」の指導計画「C読むこと〔小学校低学年〕」(p.66～67)を用いて演習を行った。今求められている、単元を貫く言語活動を位置付けた国語の授業がどのようなものであるのかを具体的にイメージできるように、児童になったつもりでワークシートに考えを書き、ペープサート劇を体験する場を設定した。なお、「指針」の形式による指導計画作成(教材「大造

<授業づくりに関して>

- ・「指針」に沿って授業を作り、よさを感じた。児童も教師も力が付いたことを感じた。
- ・授業(学習指導案)を作る際に押さえるべきことや手順が明確になった。
- ・形式も取り入れながら学習指導案を作成した。
- ・自分では思いつかないこともたくさんあり「こんなアイデアもあるんだ」と参考にした。
- ・授業を構想する際、困ったり分からなかったりしたら「指針」を頼りにした。若手教員にも「指針」を薦めた。

<若手教員等への指導に関して>

- ・市内の研修会の際、「言語活動の充実」や「単元目標・評価規準」について資料を活用し、共通理解した。
- ・校種の異なる授業を参観するときも役立った。
- ・他教科の教員にも国語科の言語活動について説明し、理解を得るために用いた。

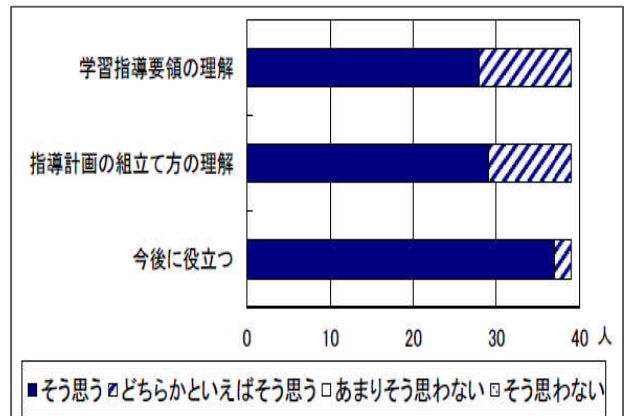
【資料19】教科等指導リーダーの感想

「C読むこと」における、様式を持った言語活動の例		静岡県総合教育センター(国語科)	
言語活動	特長	指針の参考ページ	対応する指導事項の例
			小学校 中学校
音読発表会	想像を広げながら読み、思ったことや考えたことを音読を通して交流する。音読する部分を選んだ理由やそのように音読する理由も伝える。	p118～119	(小)1・2年アウオ (小)3・4年アウオ (小)5・6年アエオ (中)1年ウオ (中)2年イエ (中)3年イエ
音読劇 朗読劇	役割を決め、物語を音読したり朗読したりする。登場人物の行動に着目しながら考えたことを基に、声の大きさ、速さ、間の取り方、表情、簡単な身振りなどを工夫する。動作や表情で表せるところは省いたり、セリフを付け足したりしてもよい。読み方やそのように読む理由を書き込むシートを用いるとよい。		(小)1・2年アウ (小)3・4年アウ (小)5・6年アエ (中)1年ウオ (中)2年イエ (中)3年イエ
劇	物語の展開に即して、登場人物になって動いたりセリフを言ったりする。登場人物になりきって話したり動いたりすることで、心情を想像しやすい。		(小)1・2年アウオ (小)3・4年アウオ (小)5・6年アエオ
ペープサート	人形劇の一種。棒の先に付けた紙人形を動かしたり会話させたたりすることによって演じていく。動きがあるため、登場人物の行動を想像しやすい。	p66～67	(小)1・2年アウオ (小)3・4年アウオ
紙芝居	場面の様子について想像したことを絵と文で表す。数枚構成にして、文章の構成や展開を確かめることができる。		(小)1・2年ウエ (小)3・4年ウエ (小)5・6年エ (中)1年ウエオ (中)2年イウエ (中)3年イウエ
しおり	お気に入りの1冊を選び、「好きな場面やその理由」「想像したこと」など指導事項に照らし合わせた項目について絵と文章でしおりを作成し、その場面のページに挟む。交流の場面では、しおりを挟んだページを互に見せあう。		(小)1・2年ウエオカ (小)3・4年ウエオカ (小)5・6年エオカ (中)1年ウエオカ (中)2年イウエオ (中)3年イウエオ
本の帯	本の表紙に書いてある紙のこと。表紙、背表紙、裏表紙にキョウゴロ、あらすり、巻頭文、引用文などを指導事項に照らし合わせて位置付け、作品の魅力を伝える。		(小)1・2年ウエオ (小)3・4年ウエオカ (小)5・6年エオカ
本の小箱	物語を紹介するのに大切だと感じるものをかいた絵カードと、物語の一場面や場面とその理由を思い浮かべた絵カードを小箱に入れる。絵カードを示しながら本の紹介をすることもできる。		(小)1・2年ウエオ
	お菓子の空き箱等を利用し、箱の各面に書き、作者名、引用		(中)1年ウエオカ

【資料20】リーダーと共同で開発した修正案(抜粋)

じいさんとガン」)を次回までの課題とした。

第2回は、持ち寄った指導計画の交流・協議を中心的な内容とした。「指針」の形式を用いて単元を組み立てることは初の機会だったと思われるが、質のよい指導計画が寄せられた。協議では、検討の五つの視点（身に付けさせたい力の明確化、身に付けさせたい力と目標との一貫性、学習の見通しを持たせる場、身に付けさせたい力と学習活動の整合性及び評価、表出する活動の設定）に沿ってペア同士で指導計画を検討した。身に付けさせたい力や単元を貫く言語活動について各自が深く考えてきているため、熱のこもった協議となった。



事後、学生に対してアンケート調査を実施したところ、「指針」を活用した講義・演習が、学生の基礎的な知識等の習得に効果を発揮したことが分かった。【資料21】また、大学教員に聞き取り調査を行ったところ、「理論では分かっているが具体が伴わなかったことについて、実感として理解できたことに学生は喜びを感じている。学校における実践と教員指導の両方の経験がある指導主事から話を聞くことは、学校現場の方向性を理解する上でも有意義だった。」などの回答を得た。これらのことから、「指針」を活用した講義・演習は、教員養成課程の学生にとって国語科の授業づくりの基礎を理解する上で有効であり、同時に学生の意欲を喚起するものであったと考えられる。

- ・大学の講義や実習先で、様々な授業の作り方があることを学んできたが、単元全体の構成については詳しく扱ったことがなく、今回の「指針」に基づく単元計画の組立て方はとても勉強になった。
- ・実習のときには、単元を貫く言語活動の設定ができず、目標の達成も曖昧になってしまった。しかし、今回の講義で単元計画の立て方や目標と言語活動の関わり、一貫した言語活動での学習アウトプットなどを理解することができ、指導案を書くのが楽しくなった。
- ・ペーパースートをを用いた言語活動で授業を作ったことがあったが、今回の演習のような形が理想であると強く感じた。単に言語活動を単元に付け加えるのではいけないことがよく分かった。目標を達成するための言語活動という点を強く意識しなければならぬと思う。

【資料21】大学生の「指針」に関する感想

(4) 研究のまとめ

ア 研究の成果

- 「指針」を用いた解説及び「指針」の形式に基づいた指導計画等を作成する演習は、「言語活動を通して指導事項を指導する」ことへの理解を図り、教員や学校の授業改善への意識や意欲の向上に寄与することを確認できた。
- 「指針」の考え方に基づく補足・追加資料が、国語科における言語活動を具体的に理解することに寄与することを確認できた。
- 各研修等で「指針」の有用感を実感した教員が軸となり、校内で伝達講習をしたり演習を行ったりするなど、校内研修への広まりがみられた。
- 「指針」が、教員養成課程における国語科の授業づくりに関する基礎的な知識の習得にも有効であることを確認できた。

イ 今後の課題

アンケート等から、指導計画の組立て方への理解は図られてきていると考える。今後は、国語科の授業づくりのポイントを押さえた授業を行うことによる児童生徒の変容について、更に検証していく必要がある。また、評価について不安を感じている教員も多い。実際の指導計画に基づいた評価に関する具体的な情報を提案していく必要がある。

2 社会科

(1) 研究の仮説

「静岡県授業づくり指針社会」(以下「指針」)は、学習指導要領の改訂の趣旨や基礎学力定着状況調査の結果を踏まえ、各小学校・中学校での社会科の学習活動における「確かな学力」の育成のための授業づくりに役立つよう、次のような趣旨を念頭において編集した。

- 学習指導要領及び学習指導要領解説の内容を分かりやすく示し、社会科の学習において確実に身に付けさせたい内容(付けたい力)を明確にすること。
- 小学校・中学校及び高等学校での社会科、地理歴史科、公民科の目標や内容の関連を示し、社会科の学習で育てたい「生きる力」を明確にすること。
- 小学校から高等学校までの学習内容全体の見通しや、各単元の学習内容の、それ以前あるいはそれ以後の学習内容との関連について示し、小学校から高等学校までの体系的・系統的な指導に役立つものとする。
- 調べ学習の進め方を踏まえ、社会科の目指したい授業について示すとともに、地図や各種資料についての指導事例や留意点を示し、問題解決的な学習を基盤とした社会科の授業づくりに役立つものとする。
- 地域素材などを示し、『静岡県ならでは』の授業づくりに役立つものとする。

編集された「指針」は、学校の先生方にとって「学習指導要領解説の解説」のような役割となることを願い、平成24年3月に各小・中学校に1冊ずつ配布し、ダウンロード版も公開した。

「指針」の配布後、各学校や各教師による活用が期待されるが、学校訪問では「授業の実態として付けたい力の押さえが不十分であること」が浮き彫りとなった。また、平成24年度に社会科の5年経験者研修対象者に行ったアンケートでは、『指針』に示された8項目の内、50%以上の研修員が授業づくりで活用したと答えた項目は1項目(目標と内容)のみであった。

以上のような現状を踏まえ、社会科では以下のように研究仮説を設定し、検証することとした。

<研究仮説>

「静岡県の授業づくり指針社会」を用いて付けたい力を押さえ、授業を構想、実践することで、授業改善や教員の資質向上を図ることができる。

(2) 研究の方法

ア 研究の進め方

(7) 訪問指導における活用

学校の実態に即して適切なページを選択し、指導資料として配布し、具体物等も示しながら解説することにより、「指針」への理解と活用を図る。

(イ) 悉皆・希望研修における活用

教科研修において必携とし、指導計画の作成や具体的な授業構想等の演習を行って「指針」への理解を図るとともに、授業改善につなげる。

(ウ) 大学における活用方法の検討

大学教員が「指針」を活用して指導に当たることによる効果を検証する。特に、教員養成課程における教材研究に対する効果に重点を置く。

イ 検証方法

(7) 5年経験者研修対象者

活用状況の結果を平成24年度と平成25年度、平成25年度授業実践(5～9月)と(10～2月)とで比較し、仮説を検証する。(H24年度36人、H2537人)

(イ) 初任者研修対象者、10年経験者研修対象者、教科等指導リーダー研修対象者、研修主任

活用状況の結果から仮説を検証する。(H25年度初13人、10年27人、リ17人、主18人)

(ウ) 大学の教員養成課程における「指針」活用の実践

大学教員に事後の聞き取り調査を行い、仮説を検証する。(H25年度)

(3) 研究の内容

ア 「指針」の構成

「指針」では、社会科、地理歴史科、公民科で育てたい「生きる力」を『「この社会の中で、わたしはどのように生きていくか」という問いを主体的に追究し、実現する力』と定め、この生きる力の育成に向けた授業づくりの「指針」となるよう構造的にまとめている。

前半に学習の系統を踏まえ資料活用や地図活用、問題解決的な学習のステップなど、授業づくりの基礎的な技能を示し、後半に学習指導要領解説の内容や授業づくりのPDCAを「授業づくり規準」として示すなど、具体的な内容を示している。【資料1】

学習指導要領解説の内容の項は、小中別に記載し、内容のつながり、主な学習内容、配慮が必要な事項（下線）捉え（考え）させたいこと（ ）学習の仕方、学習の手立ての例を併記している。学習の手立ての例では授業場面を想定し、内容項目を押さえた手立て例（・）のほかに、発展的な学習例（ ）と静岡県ならではの事例（ ）を示した。【資料2】

イ 訪問指導における活用

(ア) 協議会における活用

学校訪問では、指導資料として「指針」を活用している。目的は「指針」を授業者だけでなく研修主任にも事前研修や事後研修に役立ててもらうことにある。具体的には、中心授業の内容に関わる内容の項（例【資料2】）を教員に配布し付けたい力や配慮が必要な事項を確認したり、学習の手立てを提案したりしている。また、1時間の授業だけでなく、確かな学力の育成に向けて、単元レベルで問題解決的な学習を仕組み、子どもの主体的な学習を実現させるために、単元計画例【資料3】を作成・提示している。単元計画例では「指針」のどこを参考にすればよいかを具体的に提示することで、単元全体を見通してそれぞれの授業を位置付けたり、「指針」の具体的な活用方法を提起したりすることにつなげている。

- 1 趣旨と内容
- 2 社会科の学習で育てたい「生きる力」
- 3 社会科の学習の系統
- 4 資料活用のポイント
- 5 地図活用のステップ
- 6 問題解決的な学習のステップ
- 7 小学校
- 8 中学校
- 9 授業づくり規準（社会科）

【資料1】「指針」の内容構成

イ 国土の地形や気候の概要、自然条件から見て特色ある地域の人々の生活		
(内容の取扱い)		
(1)イ イの「自然条件から見て特色ある地域」については、事例地を選択して取り上げ、自然環境に適応しながら生活している人々の工夫を具体的に扱うこと。		
主な学習内容		
小3,4社会(6)イ → 県全体の地形や主な産業の概要、交通網の様子や主な都市の位置 「国土の地形や気候の概要」を調べる ・国土の主な山地や山脈、平野、川などの地形や地域による気温と降水量の違いなどの気候の概要を取り上げ、 ・我が国の地形を全体としてみると山がちで大きな平野が少ないこと ・我が国の気候については四季の変化が見られること ・国土の南と北、太平洋側と日本海側では気候が異なること - など、国土全体の地形や気候の大まかな様子や特色を調べる 「自然条件から見て特色ある地域の人々の生活」を調べる ・地形条件や気候条件から見て特色ある地域を取り上げ、自然環境に適応しながら生活している人々の工夫を具体的に調べること 例) ・地形や気候に合わせた住まいや学校生活などの日常生活の様子 ・地形や気候の特色を生かした野菜や果物、花卉の栽培、酪農、観光などの産業 ※事例地の選定に当たっては、 ・自分たちの住んでいる地域の自然条件に配慮する ・例えば山地や低地などの特色ある地形条件をもつ地域と、温暖多雨や寒冷多雪などの特色のある気候条件をもつ地域の中からそれぞれ一つ取り上げる ◇地図帳や地球儀の活用・資料の活用 ・国土の地形や気候の概要については地図帳、立体模型を活用して調べ、白地図にまとめるなどの作業的な学習を取り入れる ・自然条件から見て特色ある地域の人々の生活の様子については、事例地を選択して取り上げ、自然環境に適応しながら生活している人々の工夫を具体的に調べる ※その際、現地に問い合わせて収集した資料などを活用する ◎国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることを考えることができるようにする		→中地理(2)イ ・世界と比べた日本の地域的特色 (7) 自然環境 →中地理(2)ウ ・日本の諸地域 (7) 自然環境を中核とした考察
学習の手立ての例		
・日本の主な山地や山脈、平野、川などを白地図にまとめ日本の地形の概要を捉える ・3D画像や空中写真において地形の違いを捉える ・同じ月における違った地域の写真を提示し、日本における気候の地域差を捉える ・山地または低地、温暖多雨または寒冷多雪のそれぞれ一つを選択し、自分の住む地域の人々の生活との違いを比べる ★外国人観光客のために、パンフレットを作成し、日本の自然環境の特色を紹介する ★テーマ別日本地図を作成する ◇川の上流と下流に住む人々の生活を比較する（天竜川、大井川、安倍川、富士川、狩野川 など） ◇静岡県と日本海側の県（新潟県など）の人々の生活の違いを調べる		

【資料2】「指針」の内容の項

単元を貫く課題の設定と予想、学習計画		
「なぜ、天皇や貴族に代わり武士による政治が始まったのか」		
捉え(考え)させたいこと		
追究1	「なぜ、源氏は平氏を滅ぼしたのか」	
追究2	「なぜ、源頼朝は京ではなく鎌倉に幕府を開いたのか」	
追究3	「天皇や将軍でもないのに、北条時宗は、なぜ日本のリーダーとなって元の攻撃を退けることができたか」	
主な学習内容	資料活用	手立ての例
考察(個人→交流→深化)		
「単元課題に対する自分の考えをまとめよう」		
問題解決的な学習のステップ		
まとめ		
「単元での学習をまとめよう」		
捉え(考え)させたいこと		

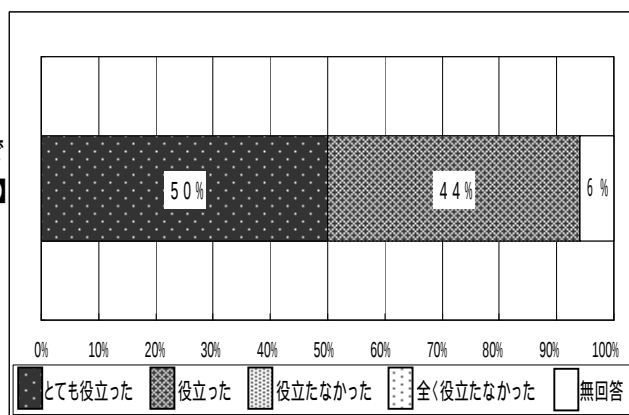
【資料3】単元計画例(は「指針」の項目)

(イ) 研修主任へのアンケート調査から

学校訪問後、研修主任に対してアンケート調査を行った。その結果、役立ち感については「とても役立った」が50%で「役立った」が44%であった。【資料4】このことから、研修主任が「指針」の有効性を実感していることが分かる。

「役立った理由」については、学習指導案検討時においては、付けたい力や学習の手立てが分かりやすく具体的であること問題解決的な学習の構想に役立ったことが挙げられた。また、授業後の指導助言の活用場面で、基本的なことが分かりやすく使いやすい、学習課題を考えやすいなどの理由が挙げられた。以上のことから、研修主任にとって「指針」は、それを活用して付けたい力を押さえたり具体的な学習方法を考えたりすることに役立ち、授業者への指導助言を通して、校内研修の質的な向上に寄与していることが分かる。

そのほかに「一人1冊あるとよい」といった意見があった。「指針」は冊子版以外に、ダウンロード版を公開しているが、学校現場では活用しにくい現状にあることが分かった。



< 役立った理由と意見 >

学習指導案検討時の活用

- ・各学年だけでなく各単元で付けたい力、学習の手立てが分かりやすく具体的で授業づくりに役立った。
- ・単元計画を作るときに、どのように問題解決的な学習を進めていけばよいかが具体的に示されており、イメージしやすかった。

授業後の指導助言での活用

- ・授業づくりにおいて、常に基本的なこととして押さえていけることを分かりやすくまとめているので使いやすい。
- ・子どもに何を身に付けなければならないかが示されているので、単元を貫く学習課題例を考える上で役立った。

その他

- ・一人に1冊あるとよい。

【資料4】「指針」の役立ち感(H25 研修主任)

イ 悉皆・希望研修における活用

(ア) 授業づくり演習における活用

平成25年度の研修では「指針」を活用して、単元から本時までを構想する授業づくりの演習を行った。目的は「指針」を授業改善につなげることにある。

研修員には「社会科授業づくりPDCA」を配布する。【資料5】目的は、授業の計画から評価までを見通した授業づくりに役立てること、授業づくり全体を見通しながら「指針」を幅広く活用してもらうことにある。

この資料は、社会科の授業づくりの手順と規準を示した「授業づくり規準」に、「指針」などの参考となる資料名と項目を加えるとともに、振り返りにも

P 構想		授業づくり規準(社会科)		静岡県教育委員会作成資料		その他	
要素	資料	学習指導力 (姿勢や指導方法等、各教科等共通の授業づくりの力)	教科指導力 (社会科の内容に関わる授業づくりの力)	学習指導要領づくり(別添)社会科 学習指導要領の内容を具体化した資料 ※ふじいゆふでつむいでために 静岡県総合教育センターＨＰ 静岡県版の授業づくりデータベース	静岡県教育委員会作成資料 各学年の目標及び内容 学習指導要領の内容を具体化した資料 ※ふじいゆふでつむいでために 静岡県総合教育センターＨＰ 静岡県版の授業づくりデータベース	評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 言語活動の充実に関する指導事例集 教科書、地図帳、副読本、地域教材等	
	児童生徒の実態把握	児童生徒の発達段階を踏まえた上で、生活体験や学習経験は児童生徒によって異なることを意識している。 学習の方法や理解の仕方は児童生徒によって異なることを意識している。 児童生徒の性格や学習に対する意欲等を把握している。 学習集団の特性や、個と集団の関わりを把握している。 個々の児童生徒に対して、指導上配慮すべき事項を把握している。	児童生徒の既習事項の習得状況等、学習内容の理解度を把握している。 社会科に関する児童生徒の興味・関心、意欲等を把握している。	社会科各学年の目標及び内容 小P48～104、中P105～186 □その下に、学習指導要領解説に示された内容や事例の取扱い、主な学習内容を示している。 他教科等の学習内容との関連 P12～16 ○よ 静岡県が目指す教育 P2～3 ◇ 社会科指導案事例	社会科各学年の目標及び内容 小P48～104、中P105～186 「学習の手立ての例」に、学習の進め方や発展的な学習、静岡県内の事例を示している 問題解決的な学習のステップ P43～47 他教科等の学習内容との関連 P12～16 資料活用のポイント P17～P25 地図活用のステップ P26～P42 子どもの学びを支える教師の役割 P5～8 社会科授業実践事例 小P22～24、中P55～57 社会科指導案事例	評価規準の在り方について 小P3～6、中P3～6 評価規準の設定等について 小P7～10、中P7～10 内容のまとまりとこの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例 小P23～38、中P21～51 評価に関する事例 小P41～P68、中P55～P102 教科書の特長を踏まえた指導の充実及び留意事項<社会> 小P12、中P12 指導事例社会 小P63～90、中49～68 各授業の目標や児童生徒の実態に即して資料を選択し、活用方法や活用場面を吟味する	
授業の構成	学習方法・形態の選択・組織 目標を達成するために、児童生徒の実態を踏まえた適切な学習方法や学習形態を考えている。 新たな知識・技能、学び方を発見したり、習得したりする喜びを実感できる授業を行うために、学習方法を改良・開発している主体的な探究活動や問題解決を考慮して授業を組み立てている。 児童生徒が学習内容や学習の過程を振り返るための手立てを考えている。	学習内容の構成 単元の指導内容及び単元全体の構造を理解した上で、学習内容を構成している。 思考力・判断力・表現力等を育むために、「言語活動の充実」地図や統計など各種の資料から必要な情報を読み取ること、社会的現象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することなどを意識して、学習内容を構成している。 一貫・小集団、個で活動する場面の目的を明確に持ち、場面を設定している。 教材の選択・構成・開発 学習指導要領の目標及び単元の目標を達成するために適し、児童生徒の実態に合わせた教材を選択し構成している。 教材を児童生徒の実態に合わせて改良・開発している。 板書等の計画 授業展開に即し、学習内容が構造化された板書を計画している。 本時のねらいを達成するための有効な働き掛け(説明、資料提示、発問、指示)や個への支援を計画している。	社会科各学年の目標及び内容 小P48～104、中P105～186 「学習の手立ての例」に、学習の進め方や発展的な学習、静岡県内の事例を示している 問題解決的な学習のステップ P43～47 他教科等の学習内容との関連 P12～16 資料活用のポイント P17～P25 地図活用のステップ P26～P42 子どもの学びを支える教師の役割 P5～8 社会科授業実践事例 小P22～24、中P55～57 社会科指導案事例	学習評価の在り方について 小P3～6、中P3～6 評価規準の設定等について 小P7～10、中P7～10 内容のまとまりとこの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例 小P23～38、中P21～51 評価に関する事例 小P41～P68、中P55～P102 教科書の特長を踏まえた指導の充実及び留意事項<社会> 小P12、中P12 指導事例社会 小P63～90、中49～68 各授業の目標や児童生徒の実態に即して資料を選択し、活用方法や活用場面を吟味する			

【資料5】社会授業づくりPDCA(一部抜粋)

単元名：「武士による政治の始まり」

単元で捉え(考え)させたいこと

武士による政治が始まったことが分かるようにする

なぜ、天皇や貴族に代わり、武士による政治が始まったのか。
～4人の武士の活躍を通して考えよう～

主要内容

り上げて調べ、武士に よる政治が始まったこ とが分かるようにす	府が全国的に力を もってきたことが分 かるようにする。
---------------------------------------	-----------------------------------

事例・学習の仕方

源平の戦いにおける源義経の活躍の様子やエピソードを調べ、年表や地図にまとめる。

源頼朝の肖像や人物年表、鎌倉図から、都を離れた鎌倉に幕府を開いた業績を考える。

幕府の勢力が、承久の乱後に全国に広がったことを調べる。

元との戦いの様子から武士の戦いぶりを調べる。

子どものまとめ

平清盛を中心とする平氏が藤原氏にかわって朝廷と結び付き、武士として初めて政治の権力を行うようになったが、源氏権威にめざす源氏が平氏と戦って勝利した。その後、朝廷から近衛大將に任じられた頼朝が、都から離れた鎌倉を幕府を開き、東国を中心とした恩恵の関係を築くことで武士による新しい政治を始めた。頼朝の死後、朝廷が幕府をたもつ命令を出して承久の乱がおこるが、幕府側が勝利し、西国や朝廷への幕府の影響力を強める結果となった。つまりは、元が日本に攻め込めるときに軌軸であった北条時宗は、日本のリーダーとして全国の武士を動員し、元の軍隊を退ける活躍をするなど、武士による政治が本格的に始まったことを示すこととなった。

【資料6】 单元構造化図例

單元計畫

時	学 習 活 動	評価項目
1	○単元の学習計画を立てる。 なぜ、天皇や貴族に代わり武士による政治が始まったのか ～ 4人の武士の活躍を通して考えよう～	思・判・表 (予想・学習計画)
2	「なぜ、源氏は平氏を滅ぼしたのか。」 ・平清盛、源頼朝、源義経の活躍を調べる。 ・平合戦を調べ、平氏が滅亡するまでの過程を調べる。	関・意・態 (意欲的調査) 観察・資料活用 の技能 (表現)
3	「なぜ、源頼朝は京ではなく鎌倉に幕府を開いたのか。」 ・鎌倉幕府のしくみを調べる。 ・幕府が置かれた鎌倉の位置や地形、武士の勢力から考える。	観察・資料活用 の技能 (読み取り) 知識・理解 (事象の理解)
4 時	「天皇や将軍でもないのに、北条時宗は、なぜ日本のリーダーとなって元の攻撃を退けることができたか」 ・北条時宗が執権となる前後の動きを調べる。 ・元寇における時宗や御家人の活躍を調べる。	知識・理解 (事象の理解)
5	「単元課題に対する自分の考えをまとめよう」 ・これまでの学習を振り返り、自分の考えをまとめる。 ・交流を通して考えを深める。	思・判・表 (比較・関連・総合)
6	○武士による政治が始まった理由をまとめ、単元を振り返る。 平清盛を中心とする平氏が藤原氏にかわって朝廷と結び付き、武士として初めて政治を行うようになったが、源義経をはじめとする源氏が平氏と戦って勝利した。その後、朝廷から征夷大將軍に任じられた源頼朝が、都から離れた鎌倉に幕府を開き、東國を中心にご恩と奉公の関係に基づく武士による新しい政治を始めた。頼朝の死後、朝廷が幕府をたおす命令を出して承久の乱がおこるが、幕府側が勝利し、西國や朝廷への幕府の影響力を強める結果となった。ついに、元が日本に攻めてきたときに執権であった北条時宗は、日本のリーダーとして全国 の武士を動員し、元の軍隊を退ける活躍をするなど、武士による政治が本格的に始まったことを示すこととなった。 武士によって日本の新しい政治が始まり、元寇という危機も乗り越えることができ、今の日本にもつながった。そんな歴史を大切にしたい。	関・意・態 (歴史の尊重)

【資料7】 単元計画例

たい力を適切に評価できる計画となっているかを考えて作業を進めていく。

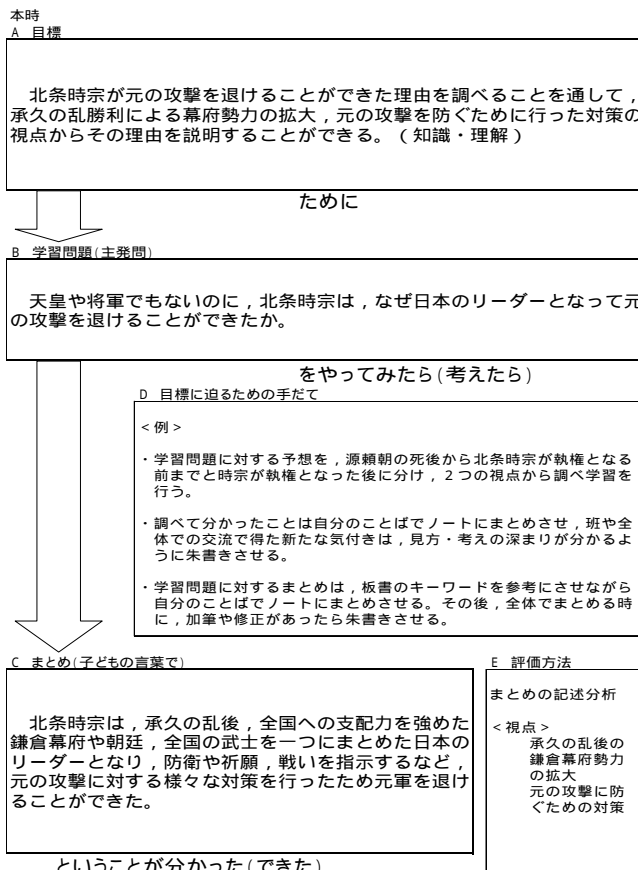
本時の構想段階では「本時の目標・学習問題・まとめ図」を活用する。【資料8】目的は、付けたい力を明確にして授業を仕組むことと、目標と学習問題、まとめに一貫性を持たせることである。

具体的には、最初に「指針」を活用して学習内容を押さえるとともに、学習の手立ての例を参考にしながら、学習問題を設定する。次に、学習問題を解決するための展開を、「指針」の資料活用のポイントや地図活用のステップ、問題解決的な学習のステップを参考にしながら考えていく。まとめには子どもの具体的な姿を想定し、併せて評価方法や視点を考え、記述していく。その際、指導の一貫性を確かめるために、目標と学習問題、まとめの関係が目標の「ために」、学習問題「をやってみたら」、まとめ「ということが分かった」というようにつながるかを確認していく。指導に一貫性がない場合は、どこに問題があるのかを突き止め、再構成していく。こうすることで、付けたい力を押さえた学習問題がより焦点化し、学習の展開もより構造的なものへと深まっていく。

実際の演習では、まず、それぞれの研修員が授業で扱う単元を決定するところから始める。学習指導案の作成では、子どもの実態を把握することも欠かせないが、何を授業で扱うかを決めなければ、子どものどのような実態をつかめばよいかは見えてこない。普段の子どもたちの様子を思い浮かべながら、学習指導案を作成する前段階として、「指針」を活用し単元構造化図や単元計画、本時の目標・学習問題・まとめ図を作成していく。

作成作業は、扱う単元が異なるため、基本的には個人作業を主とするが、初任者については、校種別・学年別のグループを編成し、協同的な作業を主としている。そのほかの研修員については、個人での作成が終わった時点で、グループでの検討へと発展させていく。目的は、作成した内容がよりよい授業につながるように深化させることにある。

悉皆・希望研修それぞれの演習場面においては、「指針」のそれぞれの項目をじっくりと読み込んだり、何度も見返したりする研修員が見られた。【資料9】また、グループでの検討では「付けたい力は何か」や「何を、どのように指導するのか」といったように、視点を明確にした話し合いが行われた。



【資料8】本時の目標・学習問題・まとめ図例



【資料9】演習の様子（社会科授業づくり基礎研修）

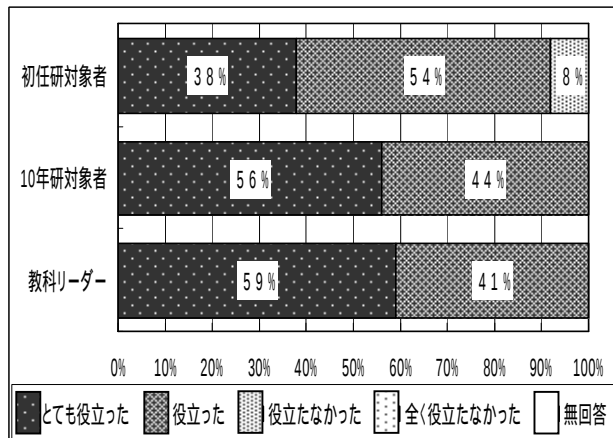
(イ) 初任者研修対象者、10 年経験者研修対象者、教科等指導リーダーへのアンケート調査から

授業実践後、各研修員に対してアンケート調査を行った。その結果「指針」の役立ち感については、全体的に「とても役立った」と「役立った」の割合が高い結果となった。【資料 10】「役立った理由」の共通意見として、付けたい力や学習の仕方を確認しやすい、具体例があるので実践に生かしやすいといったことが挙げられた。このことから、教員の経験や役割に関係なく、「指針」は授業づくりにおいて、実際の指導に生かしやすく扱いやすいことものであることが分かる。

「役立った理由」については、教員の経験や役割によって異なる意見もあった。経験の浅い初任者が、学習の手立て例など、「指針」が授業に直接役立つ点を評価する一方で、ミドルリーダーとして期待される 10 年研対象者は、「指針」を活用すると、異校種との系統性を踏まえながら単元構想ができることを評価している。また、指導的な役割の教科リーダーは、若手教員の指導において「指針」は様々な視点から指導をしていく上で役立つことを評価している。このことから、「指針」は、経験年数が増すほど活用の幅が広がるなど、教員それぞれの経験や役割に応じた内容となっており、多くの教員の社会科授業づくりに寄与していることが分かる。

アンケート調査では「指針」の内容項目別評価も 4 点満点で調査した。【資料 11-1】その結果、経験や役割を超えて、全項目が平均 3 点以上であった。3 点以上の主な評価理由を見ても、授業で活用できる具体例や裏付けとなる理論、単元構想における利用価値などが挙げられた。【資料 11-2】このことから「指針」が、授業づくりにおいて全体として利用価値が高いことが分かる。

「ア生きる力」や「イ系統」「エ問題解決的な学習」「クその他（授業づくり規準）」については、教員としての経験年数が増したり、指導的な役割へと変化したりするのに応じて、評価も高いという結果になった。このことは、3 点以上の評価理由例や「指針」の役立ち感の理



<役立った理由>

●共通する理由

- ・付けたい力や学習内容、学習の仕方を確認しやすい。
- ・具体例があるので分かりやすい。

●経験や役割別の異なる意見

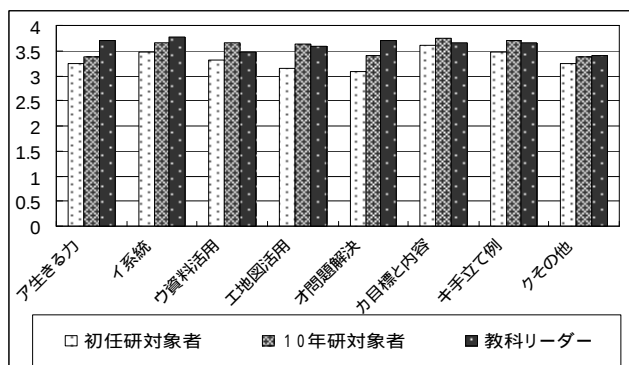
- ・今まで目標や内容を確認できて、それを実際の活動に生かすのが難しかったが、「指針」に学習の手立て例が書かれていたので参考にできた。（初任研対象者）
- ・小学校から高等学校までのつながりが分かりやすく記述されているので、学習内容が重複することなく単元構想をすることができた。（10 年研対象者）
- ・1冊に付けたい力や手立てがまとめられているので、若手の実践に理論的な裏付けをし、具体的方法を提案するのに活用しやすい。（教科リーダー）

<役立たなかった理由>

- ・読む時間を十分に確保できなかった。（初任研対象者）

【資料 10】「指針」の役立ち感(H25)

初任研、10 年研対象者、教科リーダーの比較



【資料 11-1】「指針」の内容項目別評価(H25 4点満点)

初任研、10 年研対象者、教科リーダーの比較

由からも明らかなように、教員としての経験や役割の違いが影響しているものと考えられる。すなわち、教員としての経験年数が増し、役割が指導的なものへと変化していくほど、授業づくりをする際に対象とする視点が広がり、「指針」がそれに応えていることが評価に違いをもたらしているものと考えられる。

そのほかとして「個人に1冊あると助かる」「必需品として手元に置いておきたい」といった意見が多数あった。このことから、多くの教師が「指針」冊子版の価値を感じ、より手軽に活用したいという願いを持っていることが分かる。

(ウ) 5年経験者研修対象者へのアンケート調査から

5年研対象者へのアンケートは、全体研修で単元構造化図等を活用しなかった平成24年度との比較調査を行った。その結果、「とても役立った」の割合が「役立った」を上回る結果となった。【資料12】

また、平成25年度研修員の授業実践における「とても役立った」理由を見ても「単元全体を見通すことができるようになった」「筋の通った単元構想となった」「単元のねらいや押さえない内容がより明確になった」「問題解決的な学習となる単元計画を作成できるようになってきた」「学習問題やまとめを作成するのに参考になった」といった意見があった。

このことから「単元構造化図」や「単元計画」「目標・学習問題・まとめ図」を活用した平成25年度は、活用しなかった平成24年度と比べて、「指針」をより具体的に活用することが可能となっている様子が分かる。また「指針」をより具体的に活用できたことが「役立った」よりも「とても役立った」の占める割合が大きいことにつながっているものと考えられる。「指針」をどのように活用するかをセンターでの研修等で具体的に示していくことは「指針」の授業づくりにおける役立ち感をより実感させ、授業改善にも寄与していくものと考えられる。

平成25年度の5年研対象者については、当センターでの全体研修の後、5月から9月までに行った授業実践（以

<3点以上の主な評価理由>

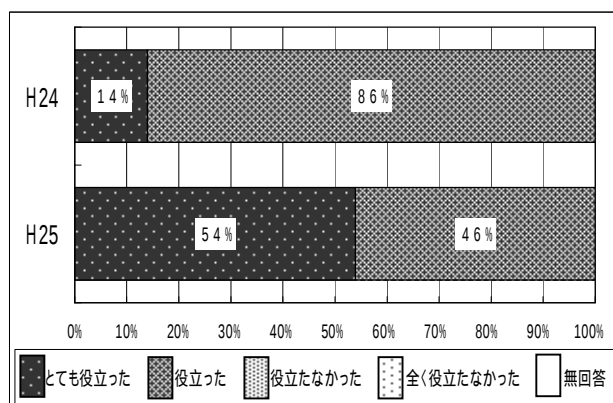
- ・指導要領をまとめてあり、例もあるので分かりやすい。具体的なものがあると、色々な思いが出て、よりよい授業にしていける。（初）
- ・具体例や理論が並び、確認がしやすいので助かる。この冊子のありがたさを感じた。（10）
- ・授業を考える上で、常に身近な所に置いておき、参考にするものにしたい。特に、単元構想を考える上では、非常に利用価値が高いと感じる。（リ）

<その他>

- ・学校ではなく個人に1冊あると助かる。（初・10）
- ・社会科指導の必需品として、手元に置いておきたい。（リ）

【資料11-2】「指針」の内容項目別評価(H25 4点満点)

初任研、10年研対象者、教科リーダーの比較



<H25 実践における「とても役立った」理由>

- ・単元構想をする際に、全体の流れの見通しが持ちやすく、主な学習内容のポイントも一目で分かるようになっていたので、単元構造化図を作成しやすく、単元全体を見通すこともできるようになった。
- ・これまで自分の解釈でつくっていた部分もあったが、指針を見ることによって付けたい力を押さえ、筋の通った単元構想になった。
- ・これまでほとんど考えたことがなかったが、小～高までのつながりを確認することができ、単元のねらいや押さえない内容がより明確になった。
- ・「指針」を活用しながら、単元構造化図で単元を貫く課題やゴールの姿をイメージできたので、問題解決的な学習となる単元計画を作成することができるようになってきた。
- ・授業における生徒への発問のカギとなるものが書かれており、学習問題やまとめの作成に大いに参考になった。

【資料12】「指針」の役立ち感

平成24年度と平成25年度との比較(5年研)

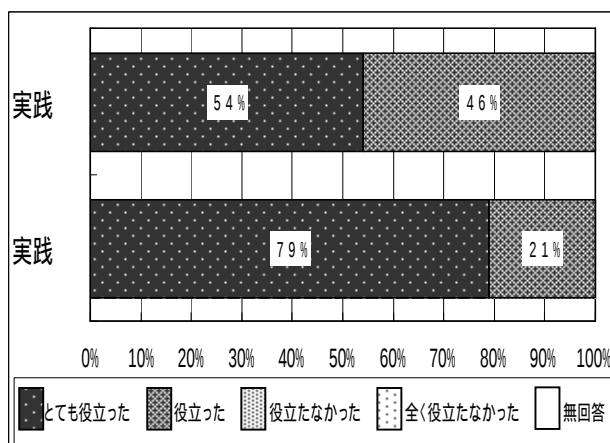
下「実践」)と、全体研修の後、10月から翌年2月までに行った授業実践(以下「実践」)におけるアンケートの比較調査を行った。その結果、実践に比べて実践における「とても役立った」の占める割合が上昇した。【資料13】

実践で初めて「とても役立った」と答えた研修員の理由に「実践と同じように目標や内容に間違いがないかを確認しながら単元構想をすることができた」「小学校から高校まで、他単元とのつながりも意識して単元構想することができた」「資料活用のポイントや地図活用のステップ、静岡県ならではの学習の手立ての例を効果的に役立てることができた」があった。

このことから「指針」を活用した授業づくりを繰り返すことが、付けたい力を確実に押さえるなど、授業づくりの質的向上につながり、役立ち感や手応えをより強くすることが分かる。また「指針」は、個々の教師が新たな課題を解決していくために必要な情報を提供していることも見えてきた。「指針」は、社会科の授業づくりでの活用を重ねることで、より授業改善に寄与し、授業者の役立ち感も向上していくことが考えられる。

5年研対象者へのアンケートでは「指針」の内容項目別評価も4点満点で比較調査を行った。【資料14-1】その結果、実践とともに、全項目が平均3点以上であった。実践とにおける3点以上の主な評価理由を見てみると「付けたい力が明確になった」「項目ごとに内容や手立てが書かれていて見やすく使いやすかった」などが挙げられた。【資料14-2】「指針」を活用することで、付けたい力を押さえられることに加え「指針」の見やすさや使いやすさが高評価につながっているものと考えられる。

調査結果全体の傾向として、実践に比べて実践の平均点がどの項目も向上している。平成25年度の実践で評価点が向上した理由を見てみると「学習がどのようにつながっているのかを把握するのにとても便利である」「授業後に押さえない目標や内容を再確認することができた」「もっと生かすことができそうなので、これからも活用したい」などが挙げられた。【資料14-2】このことから、資料13でも述べたように「指針」が、授業づくりにお

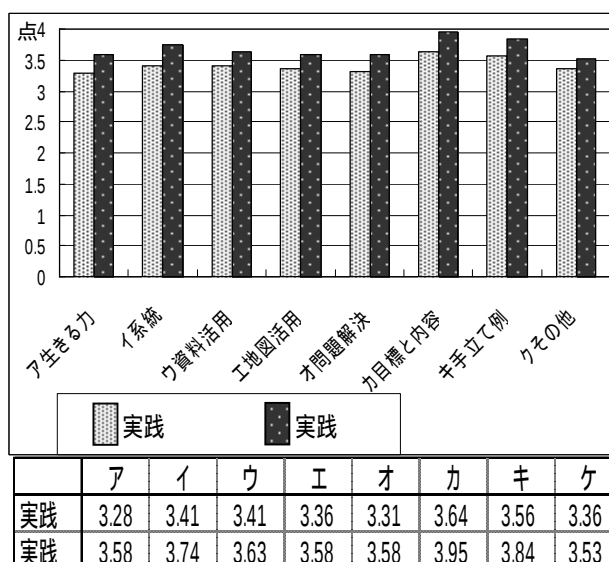


<H25 実践で初めて「とても役立った」と答えた理由>

- ・単元構想の際に活用できることを実践で学び、実践でも目標や内容に間違いがないか、確認しながら単元構想することができた。いろいろな場面で活用していきたい。
- ・実践では余裕がなかったが、実践では、小学校や高校とのつながりや他単元とのつながりも意識して単元構想することができた。
- ・実践では、指導方法を考えるときに、資料活用のポイントや地図活用のステップ、静岡県ならではの学習の手立ての例をより効果的に役立てることができた。

【資料13】「指針」の役立ち感

授業実践 と の比較 (H25 の5年研)



【資料14-1】「指針」の内容項目別評価(H25 4点満点)

授業実践 と授業実践 との比較(H25 の5年研)

ける個々の教師の新たな課題に対応していることが内容項目別の評価点の向上につながっているものと考えられる。また授業前だけでなく、授業後まで活用が広がっていることから「指針」の新たな利用価値に気付いたことが、評価点の向上につながっていることも分かる。さらに実践で「指針」の活用の幅が広がったことで今後の活用における「指針」活用の期待感も評価点の向上につながっているものと考えられる。「指針」が教師の授業づくりにおける新たな課題解決や授業の振り返りに役立ち、授業改善に寄与していることが分かる。

そのほかでは、5年研対象者からも他のアンケート結果と同様に「冊子版を一人1冊ずつ欲しい」といった意見が多数寄せられた。【資料14-2】学校1冊では使いたいときに使えない不便さや、ダウンロード版は一度に一部分しか見えないといった問題点も指摘された。「指針」をより多くの教員の授業改善に役立てていくための課題が明らかとなった。

ウ 大学における活用方法の検討

(ア) 教員養成課程における活用

教育実習を終えた静岡大学教育学部の4年生を対象とした「教職実践演習」において「指針」の活用を図った。【資料15】具体的には、8つの担当領域ごとに4・5人のグループで学習指導案作成から模擬授業、分析を行った。（【資料15】の網掛け部分）学習指導案の作成は、各グループごとに行い、その際、各グループに1冊ずつ「指針」を貸与する。【資料16】ここでは「主な学習内容」と「学習の手立ての例」を中心に「指針」の活用を図り、単元を構想することに対応できるかを検証した。学習指導案には、単元名単元目標、単元観、単元計画、本時の指導を記述し、模擬授業では、あらかじめ設定した分析の視点に沿ってデータを収集・整理・分析し、その後発表を行った。

(イ) 大学教員への聞き取り調査から

「指針」を活用した初めての取組であ

<実践・における3点以上の主な評価理由>

- ・付きたい力を明確にするために参考になった。
- ・項目ごとに内容や手立てが書かれていて見やすく、使いやすかった。

<H25 実践で評価点が向上した理由>

- ・社会科の学習の系統が、地理的内容と歴史的内容、公民的内容の3つに分けられ、学習がどのようにつながっているのかを把握するのにとても便利であることに気付いた。
- ・授業実践では、授業後に、指針をもう一度読み返すことで、押さえたい目標や内容を再確認することができた。
- ・実践では、資料活用のポイントや地図活用のステップの内容を参考に生かすことができた。もっと生かすことができそうなので、これからも活用したい。

<その他>

- ・学校に一冊なので、研修会等があると学校にないこともあり、常に手元に置けるとよかった。ダウンロード版は一度に一部分しか見えないので、冊子の方がよいと思う。

【資料14-2】「指針」の内容項目別評価(H25 4点満点)

授業実践と授業実践との比較(H25の5年研)

回	月日	内 容
第1回	10月3日	学習・学生生活のふり回り <オリエンテーション、振り返りシート他>
第2回	10月10日	学習・学生生活のふり回り <相互評価、発表、教員講評>
第3回	10月24日	学級経営 <現職教員講話、経営案(概略)の作成他>
第4回	10月31日	事例研究 <安全・健康・危機管理>
予備回	12月5日	<指導案作成他>
第5回	12月12日	指導技術 <指導案・単元構成のふりかえり・模擬授業>
第6回	12月19日	指導技術 <模擬授業>
学校回	1月下旬	訪問実習 <附属学校園訪問、アシスタントティーチャー他>
第7回	2月6日	まとめ <実践演習のふりかえり>

【資料15】教職実践演習の展開



【資料16】「指針」を活用している様子

り、当初はどのような展開になるかが心配されたが、教育実習を終えた4年生を対象としたこともあり、意識の高さを感じる積極的な取組が見られた。また、単元構想で「指針」を活用した成果として「学習課題をつかむことには有効であった」ことが挙げられた。「指針」を活用することで、約95%の学生が学習課題の意味を理解し、設定することができた。学生からは「「指針」を何度も見て活用した」「主な学習内容や学習の手立ての例を参考にした」などの声があった。一方で「『指針』は、単元を構想する力に焦点を当てて作成されたものでないため、目的に応じた冊子の使い方を示すことや、手立て等の記述を分かりやすくすることが必要である。」といった課題が挙げられた。

以上のことから、教員養成課程において「指針」を活用することは、学習指導案作成時における学習課題の設定には有効であるが、目的に応じた活用方法をより具体的に提案していくことで、より確かな効果が期待できることを確認できた。

(4) 研究のまとめ

ア 研究の成果

- (ア) 「指針」を用いて付けたい力を押さえ、授業を構想、実践するために、単元の構想段階において「単元構造化図」や「単元計画」「目標・学習問題・まとめ図」を活用することにより、教師の授業改善につながることを確認できた。
- (イ) 「指針」は、個々の教師の経験年数や役割に応じた幅広い活用や、単元構想以外での活用に対応しており、教員の資質向上に資することを確認できた。
- (ウ) 教員養成課程における「指針」の活用は、教育実習を終えた4年生が学習指導案を作成する段階では、学習課題の設定に有効であることが確認できた。

イ 今後の研究課題

- (ア) 個々の教師の経験年数や役割、活用の目的に応じた「指針」の活用方法を開発し、提案していく必要がある。
- (イ) 各学校1冊配布となっている「指針」の冊子版を、個々の教師がより活用しやすいように整えていく必要がある。
- (ウ) 教員養成課程における「指針」の活用にあたっては、活用目的を明確にするとともに、その目的に応じた具体的な活用方法を提案していく必要がある。

3 算数 / 数学科

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 算数・数学」(以下「指針」)を用いて「付けたい力を明確にする」ことの意義を理解することで、授業改善を図ることができる。

本研究では、仮説に用いた用語を次のように定義している。

「付けたい力」…学習指導要領及び同解説の目標や内容

「付けたい力を明確にする」…付けたい力を押さえた上で、単元や本時の目標を設定すること

「授業改善」…付けたい力を明確にした上で、付けたい力に沿った授業を展開すること

(2) 研究の方法

本県の授業の特徴として、「子ども主体の授業を行う意識が高い」ことや「関わり合いを大切にしたい活動がさかんに行われている」等のよさがある反面、「付けたい力の押さえが甘い」ことや「関わることや話し合うことが目的化している」等の課題が挙げられている。これは、全国学力・学習状況調査の結果からも明らかになった課題であり、算数・数学科においても改善すべき喫緊の課題であるといえる。(「H24全国学力・学習状況調査分析会議」より)

そうした課題への対応策として、学習指導要領及び同解説とともに、「指針」を積極的に活用していくことが効果的ではないかと考えた。それは、「指針」が現場の教員にとって日々の授業づくりの拠り所となるよう、学習指導要領及び同解説の趣旨や指導上のポイントを具体的な事例を通して分かりやすく説明したものであることや、「付けたい力」に迫る上で特に大切にしたい事柄を本県独自に「核となること」として設定してある点に起因する。

そこで、「指針」の効果を検証するために、学校訪問やセンターで行う種々の研修の中から、「5年経験者研修(研修員41人)」に焦点を当てて研究を行っていくことにした。その理由として、「5年経験者研修のシステム上、指導主事の手が入りやすく、PDCAサイクルに基づく研究が行いやすい。」「学校現場における若手教員の増加により、研修の面からも若手教員の育成が求められている。」「経験年数が浅く、吸収力や柔軟性に富んだ時期に授業づくりの基礎を学ぶことが、今後の教員生活において重要な意味をもつ。」ことが挙げられる。本研究では、5年経験者研修プログラムの中に「指針」の活用を位置付け、研修員の「意識の変容」「学習指導案の変容」「授業の変容」の3点について検証を行っていくことにした。

【5年経験者研修プログラムに基づく本研究の流れ】

(ア) 課題レポートや意識調査 を基に、これまでの授業実践を振り返る。 (イ) 講義の中で、「指針」の活用方法について紹介する。	【全体研修】 5月14日
(ア) 学習指導要領及び同解説とともに、「指針」を基に「付けたい力」を明確にして学習指導案を作成する。 (イ) 指導主事が授業を参観し、事後研修会で指導・助言を行うことで、授業実践 の成果と課題を明確にする。	【授業実践】 5月～9月
(ア) 講義の中で、授業実践 の表れを紹介し、成果と課題を共有する。また、「指針」を基に「付けたい力」を明確にするものの意義について周知する。 (イ) 授業実践 の授業構想を立てる。	【全体研修】 10月1日
(ア) 学習指導要領及び同解説とともに、「指針」を基に「付けたい力」を更に明確にして学習指導案を作成する。 (イ) 指導主事が授業を参観し、事後研修会で指導・助言を行うことで、授業実践 の成果と課題を明確にする。 (ウ) 意識調査 を基に、現在の授業実践を振り返る。	【授業実践】 10月～2月

(3) 研究の内容

ア 全体研修 (5月14日)

(7) 課題レポートや意識調査を基に、これまでの授業実践を振り返る。

自己の授業を見つめ直し、本研修プログラムにおける自己課題を明確にすることを目的として、これまでの5年間の授業実践を振り返る場を設けた。事前課題であるレポートを基に、自身がこれまでの授業で大切にしてきたことや課題として感じていること、悩んでいることについて、グループワーク形式で発表を行った。主な意見として次のことが挙げられた。

<大切にしてきたこと>

- ・子ども主体の授業を行うこと ・興味や関心を引きつける導入（課題提示）の工夫
- ・算数的活動や数学的活動を取り入れること ・関わり合う場や練り合う場の工夫
- ・聴き方や話し方の指導 ・基礎的・基本的事項の定着 ・個に応じた指導 etc.

<課題や悩み>

- ・導入（課題提示）がうまくいかない ・子どもの問いが生まれない
- ・話し合い活動がうまくいかない ・個に応じた指導がうまくできない
- ・習熟度の差にうまく対応できない ・教師が話しすぎてしまう（教え込みの授業に陥る）
- ・子どもに力が付いていない ・時間配分が難しい etc.

現行学習指導要領で重視されている算数的活動や数学的活動を大切にしていることや、校内研修と絡めて言語活動の充実に取り組んでいる様子が伝わってきた。また、子ども主体の授業を目指そうとしているものの、教師の目指す授業像と実際の子どもの表れにかい離が見られたり、習熟度の差への対応に苦慮したりしている声がたくさん聞かれた。一方、学習指導要領に則って「付けたい力」を大切にしようとする意識や、そこに課題や悩みを感じている声はほとんど聞かれなかった。つまり、本質的な部分よりも指導技術的な部分への意識が高いことが研修員の実態として明らかになった。

また、意識調査（センター指導主事作成）を実施し、意識の面からも授業実践の振り返りを行った。（調査人数41人）

【4 よくあてはまる 3 概ねあてはまる 2 あまりあてはまらない 1 全くあてはまらない】

段階	内 容	4	3	2	1	4・3 割合(%)
P	子ども一人一人の既習事項の習得状況や学習内容の理解度を把握している。	12	68	22	0	○ 80
	単元で「付けたい力」を押さえて、単元の指導計画を立てている。	5	24	61	10	29
	学習指導要領の「付けたい力」を押さえた上で、本時の目標を設定している。	7	17	71	5	24
	教科書の細部まで分析して教材研究を行っている。	2	44	42	12	46
	指針の「内容」「核となること」「主な学習内容」を押さえている。	0	10	56	34	10
	板書計画を立てて、授業に臨んでいる。	15	41	32	12	56
D	「目的意識をもった主体的な活動」になるよう課題提示を工夫している。	0	54	39	7	54
	思考力や表現力の育成を目指して、「かく」活動を大切にしている。	10	56	34	0	66
	思考力や表現力の育成を目指して、「話す」活動を大切にしている。	10	58	32	0	68
	数、式、図などを思考や説明の道具として用いることを大切にしている。	17	37	39	7	54
	子どもに任せるところと教師が教えるところのバランスを意識している。	5	46	49	0	51
	全体の前で発表させる際には、他者を意識した説明を大切にさせている。	7	42	49	2	49
	「できる」「身に付く」状態まで定着を図ることを大切にしている。	20	48	32	0	68
	「振り返りの場」を設定し、個に返すことを大切にしている。	20	24	39	17	44
	子どもの頑張りや努力を認め、励ますことを大切にしている。	39	56	5	0	95
C	子どもの姿を適切に見取り、指導と評価の一体化を図っている。	5	46	49	0	51
	「目標・学習活動・まとめ・評価」に一貫性があるように努めている。	5	24	61	10	29
A	授業後には自らの授業を振り返り、改善点を明確にしている。	5	59	34	2	64

「子ども一人一人の既習事項の習得状況や学習内容の理解度を把握している。」「子どもの頑張りや努力を認め、励ますことを大切にしている。」については、肯定的な割合がそれぞれ80%、95%と良好な結果が得られた。子ども理解を大切にしながら、子どもと共に授業をつくり上げようとする意識が高いことがうかがえた。

一方、「単元で『付けたい力』を押さえて、単元の指導計画を立てている。」「学習指導要領の『付けたい力』を押さえた上で、本時の目標を設定している。」「指針の『内容』『核となること』が『主な学習内容』を押さえている。」については、肯定的な割合が30%に満たず、意識の低さが顕著であった。また、「『目標・学習活動・まとめ・評価』に一貫性があるように努めている。」についても同様の結果であったことから、付けたい力の押さえの甘さが授業の道筋をぼやけたものにしているといえる。

以上、課題レポートや意識調査の結果から、研修員41人の実態として、子どもに寄り添った指導を大切にしようとするよさがある反面、学習指導要領の重要性に対する認識が低く、付けたい力からずれた授業に陥っている危険性があることが明らかとなった。

(イ) 講義の中で、「指針」の活用方法について紹介する。

「指針」の積極的な活用を促すためには、研修員に「指針」の特長や活用の仕方を理解してもらうことが不可欠であるため、講義の中で次のことを伝えた。

- ・「指針」は、学習指導要領及び同解説を更に分かりやすく具体にしたものであり、現場の先生方にとって授業づくりの拠り所になるものである。日々の教材研究において、「指針」の活用を習慣化する。
- ・1ページごとの構成は、学年別に単元(小単元)ごと「内容」「核となること」「主な学習内容」等から整理されていて、「付けたい力」「付けたい力に迫るためのポイント」「確実に押さえない内容」等が記載されている。中でも、「核となること」は、必ず押さえるようにする。
- ・巻末のページには、算数的活動や数学的活動の具体的な事例が学習指導案形式で掲載されている。また、小・中・高の系統表が領域別に細かく掲載されていて、教材の縦のつながりを把握する上でも役立つ。
- ・各校に配付された「指針」の冊子の構成は学年ごとのまとまりになっているが、WEB上では、それに加えて領域ごとのまとまりにしたものや学習内容ごと(例 分数)のまとまりにしたものも閲覧したりダウンロードしたりすることが可能である。

教職経験5年を過ぎると...

よい授業 ← 経験 → 自己流の授業

一つの区切りとして、**基本**に立ち返ってみましょう。

算数・数学で付けたい力は？

今、どんな授業が求められているのでしょうか？

「指針」の特長 例 P29

- ・内容 「**付けたい力**」
- ・核となること「**付けたい力に迫るためのポイント**」
- ・主な学習内容 「**確実に押さえない内容**」、○
- 「**黒い静岡県**」「**白い静岡県**」「**矢印**」
- ・その他 「**算数的活動 例**」
- 「**発展的な学習の内容 例**」

イ 授業実践 (5月～9月)

(ア) 学習指導要領及び同解説とともに、「指針」を基に「付けたい力」を明確にして学習指導案を作成する。

授業実践 に臨むに当たって、授業を行う1週間前に学習指導案を担当指導主事に提出させた。下表は、研修員41人の内、指導主事が訪問を行わない3市(富士・富士宮・沼津)の12人を除く29人の学習指導案を指導主事が評価(評価項目：センター指導主事作成)したものである。

【 : 十分満足できる ○ : 概ね満足できる : 改善したい】 (単位%)

【学習指導案から判断する】		○	
十分な教材研究がなされ、「付けたい力」が明確である。	34	38	28
単元(題材)における子どもの実態把握が適切に行われている。	28	52	20
本時の目標と学習活動がつながっている。	24	48	28

全体研修 を行ったことにより、「付けたい力」に対する意識は高まっているものの、十分に満足できるものは半数に満たなかった。また、前述の意識調査では、子ども一人一人の既習事項の習得状況や学習内容の理解度を把握しようとする意識は比較的良好であったものの、「単元」という大きな枠組みの中で子どもの実態を的確に捉えて学習指導案に記述することには物足りなさがあった。更に、本時の目標と学習活動や評価に一貫性のないものも少なからず見られ、「付けたい力」に沿って授業を構想することには大きな課題を残した。

(イ) 指導主事が授業を参観し、事後研修会で指導・助言を行うことで、授業実践 の成果と課題を明確にする。

下表は、29人の授業を参観した指導主事の評価(評価項目：センター指導主事作成)である。

【 : 十分満足できる ○ : 概ね満足できる : 改善したい】 (単位%)

【授業の様子から判断する】		○	
本時の目標に迫るための課題を設定し、問いをもたせている。	31	52	17
どの子どもも本時の目標に迫るための学習活動を行っている。	17	48	35
本時の目標を達成するための振り返りや定着を図る工夫を行っている。	14	69	17
子どもの学びに対する共感的な見取り・価値付け・支援ができています。	55	38	7
即時的対応や指導の修正等、子どもの学びに適切に対応している。	7	76	17

「付けたい力」を明確にした上で、更に課題提示や授業展開に工夫のある学習指導案の基で行われる授業では、子どもの知的好奇心を喚起し、「なぜだろう?」「考えてみたい!」といった問いや思いが生まれ、子どもが生き生きと授業に取り組んでいた。算数的活動や数学的活動の重要性が叫ばれているが、その定義が「児童・生徒が目的意識をもって主体的に取り組む算数・数学にかかわりのある様々な活動(営み)」であることから、子どもの問いや思いを大切にして授業を展開することは非常に重要である。また、「子どもの小1「繰り下がりのあるひき算」学びに対する共感的な見取り・価値付け・支援ができています。」の評価が高いことから、子どもに寄り添った子ども目線での授業が行われていることがうかがえた。



しかし、「付けたい力」の押さえが甘いためか、課題が子どもにとっての真の問いにならない授業や、本時の目標と学習活動やまとめが一体でない授業も少なからずあった。また、学習指導案通りに授業を展開しようとする意識が強すぎて、子どもの発言や反応に即時的な対応ができず、教師主導の授業に陥ってしまう授業もあった。

授業後には、研修員個々のよさや改善点を伝え、授業実践 の成果と課題を明確にした。そして、授業実践 に向けた自己課題を明確にするとともに、日々の授業実践への更なる意欲化を図ることを大切にした。

【授業実践 終了後の研修員の感想】

- ・子どもの予想外の発言や反応にうまく対応できず、本時の目標につながらない授業になってしまった。45分間の時間の使い方もうまくいかず、多様な考えを十分に生かしきれなかったし、予定していた振り返りや練習問題を扱うことができなかった。「付けたい力」の押さえがまだまだ甘いんだと実感した。2回目は、今回の反省を生かして授業を行えるように、明日からの授業を頑張っていきたい。(小学校教員)
- ・全体研修 で学んだ「付けたい力」を解説や指針で押さえることを大切にした。これまで、教科書や指導書を頼りに授業を行ってきたが、それだけでは「付けたい力」に迫る上で不十分であると感じた。自分は、解説を読んでもその趣旨が十分に理解できないこともあったので、指針の「核となることがら」を押さえることが役に立った。(中学校教員)

ウ 全体研修（10月1日）

(ア) 講義の中で、授業実践 の表れを紹介し、成果と課題を共有する。また、「指針」を基に「付けたい力」を明確にすることの意義について周知する。

授業実践 における最重要課題である「付けたい力を明確にすること」「本時の目標に沿った学習活動を行うこと」に焦点を当てて講義を行った。「指針」の「核となること」について具体例を交えて解説することで、「付けたい力」の捉え方がより鮮明になったと思われる。（下は講義の一部）

授業実践 を振り返って - 子どもに問いをもたせる課題提示の工夫 - 共感的な見取り、価値付け、支援 ▲「付けたい力」の押さえ（目標の妥当性） ▲目標・学習活動・評価の一貫性 ▲振り返りや定着を図る工夫 ↓ 学習指導要領・解説 授業づくり指針「核となること」	付けたい力 学習指導要領や同解説の目標及び内容 ↓ 付けたい力を明確にする ↓ 付けたい力を押さえた上で、 単元や本時の目標を設定すること	例 小5 C図形 C(2)立体図形の性質 【学習指導要領 内容】 図形についての観察や構成などの活動を通して、立体図形について理解できるようにする。 ア 角柱や円柱について知ること。 【授業づくり指針「核となること」】 見取り図や展開図をいかたり観察したりすることを通して、構成要素の個数や形状、位置関係に着目して、角柱や円柱の特徴を捉えること。 立体図形の構成、分解などの活動を通して、図形についての感覚を豊かにすること。
【例】小1「たしざん・ひきざん」 解説 算数編 p58 (2) 前略 イ 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること。 ウ 簡単な場合について、2位数などの加法及び減法の計算の仕方を考えること。 ↓ 付けたい力に 違いがありますね！	イ 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること。 ↓ 9 + 4、12 - 7のような計算は、 計算の仕方を考える力 正しく計算できる力 が求められている。	ウ 簡単な場合について、2位数などの加法及び減法の計算の仕方を考えること。 ↓ 20 + 40、70 - 30、13 + 4、15 - 2のような計算は、計算の仕方を考える力が求められている。 それにより、 1位数までの計算の理解を確実にしたり、 2位数までの数の理解もより確実にしていく。 また、2学年での学習にもつなげていく。
【例】中3「式の利用」 この学習で子どもに付けたい力は どんな力でしょうか？ 解説 数学編 p110 (2) 文字を用いた簡単な多項式について、式の展開や因数分解ができるようにするとともに、目的に応じて式を変形したりその意味を読み取ったりする能力を伸ばす。以下略 ↓ 目的に応じて式を変形する力 (式の)意味を読み取る力	「連続する2つの偶数の積に1を加えると奇数の2乗になること説明しなさい。」 $2 \times 4 + 1 = 9$ $4 \times 6 + 1 = 25$ $6 \times 8 + 1 = 49 \dots$ 連続する2つの偶数は、nを整数とすると、 $2n, 2n + 2$と表される。 $2n(2n + 2) + 1$ $= 4n^2 + 4n + 1$ $= (2n + 1)^2$ よって、... 最終的に、(奇数)²の形に変形すればいいんだ！ じゃあ、次の問題、こうか。	連続する2つの偶数は、nを整数とすると、 $2n, 2n + 2$と表される。 $2n(2n + 2) + 1$ $= 4n^2 + 4n + 1$ $= (2n + 1)^2$ よって、... よく眺めてみよう！ 何か気付くことはないかな？ $2n + 1$って、$2n$と $2n + 2$の間の数だね！ ということは、連続する2つの偶数の積に1を加えると、その間の奇数の2乗になることも分かるね！ (式の)意味を読み取る力

(イ) 授業実践 の授業構想を立てる。

授業実践 では、学習指導案の作成は所属校に戻ってから行ったが、今回は事前に素案を作成し、全体研修 に持参した。全体研修 の中で、持ち寄った学習指導案をグループワーク形式で検討する時間を取り、指導主事も積極的に介入して、アドバイスを送るようにした。詳細部分の作成は所属校に戻って行うことになったが、本研修の中で、単元で付けたい力、単元の構想、本時で付けたい力等、学習指導案の核となる部分を押さえることができ、授業実践 よりも質の高い学習指導案が完成する手応えを感じることができた。

エ 授業実践（10月～2月）

(ア) 学習指導要領及び同解説とともに、「指針」を基に「付けたい力」を更に明確にして学習指導案を作成する。

下表は、29人の学習指導案を指導主事が評価したものである。

【 : 十分満足できる ○ : 概ね満足できる : 改善したい】（単位%）

【学習指導案から判断する】				
			○	
十分な教材研究がなされ、「付けたい力」が明確である。	実践	34	38	28
	実践	62	35	3
単元（題材）における子どもの実態把握が適切に行われている。	実践	28	52	20
	実践	39	54	7
本時の目標と学習活動がつながっている。	実践	20	52	28
	実践	58	39	3

どの項目も「十分満足できる」の数値が向上しているが、特に「 十分な教材研究がなされ、『付けたい力』が明確である。」「 本時の目標と学習活動が繋がっている。」の数値が飛躍的に向上していることから、学習指導案の作成段階において、「付けたい力」を明確にする意識や本時の目標と学習活動に一貫性をもたせる意識が非常に高まったといえる。

授業実践 ・ における学習指導案の変容

単元目標 (中3 A 教諭)

実践 では、単元目標そのものの捉えが不十分で、指導要領に記載されている「内容」を4つの観点と勘違いして記述していた。実践 では、観点ごと付けたい力が適切に記述されていた。

4 題材目標

授業実践

具体的な事象の中から2つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、1次関数について理解するとともに、関数関係を見だし表現し考察することができる。

- ①【数学への関心・意欲・態度】 事象の中には1次関数としてとらえられるものがあることを理解することができる。
- ②【数学的な見方や考え方】 1次関数について、表、式、グラフを相互に関連づけて理解することができる。
- ③【数学的な技能】 2元1次方程式を関数を表す式とみることができる。
- ④【数量についての知識・理解】 1次関数を用いて具体的な事象をとらえ説明することができる。

4 題材目標

授業実践

観察、操作や実験などの活動を通して、性質を見だし、平行線の性質を基にしてそれらを確かめることができる。また、図形の合同について理解し図形の見方を深めるとともに、図形の性質を三角形の合同条件を基にして確かめ、論理的に考察し表現する能力を養う。

- ①【数学への関心・意欲・態度】 平面図形の基本的な性質や関係を見だし、様々な事象を数学的に考え、表現しようとする。
- ②【数学的な見方や考え方】 基礎的・基本的な知識及び技能を活用しながら、事象を数学的な推論の方法を用いて論理的に考察し表現することができる。
- ③【数学的な技能】 平行線の性質、三角形の角についての性質、三角形の合同条件などを数学的な用語や記号を用いて簡潔に表現することができる。
- ④【数量などについての知識・理解】 平行線の性質、三角形の角についての性質、三角形の合同条件、図形の証明の必要性と意味及び方法などを理解している。

単元計画 (小5 B 教諭)

実践 では、「付けたい力」に対する意識が低く、曖昧な単元計画であった。実践 では、「単元で付けたい力」が指針や学習指導要領解説を基に押さえてあり、子どもの活動目標が示されていた。また、単元前の子どもの実態や単元終了後の目指す子どもの姿が的確に押さえられていた。更に、目標達成のための手立ても明確であった。

単元でどんな力を付けたいか不明確である。

単元前の子どもの実態が的確に押さえられている。

本単元で大切にすべき子どもの活動が明確に示されている。

① どのように計算すればよいか考えよう。
・わり算のきまりを使って計算すれば、答えが出るよ。

② どのように商をたてたらいいか考えよう。
・ $80 \div 20$ で考えればできそうだね。

③ 仮の商が大きすぎた。どうすればいいのかな？
・商を1つ少なくして、計算すればいいんだね。

④ 仮の商が10になってしまう。どうしよう。
・商を9にして、計算してみよう。あまりがわる数。

⑤ 10の位に2がたつのか、ばらは何枚ずつ分けることができるのかを仮を使って表してみよう。
・10のたばは2ずつ分けることができた。ばらは、1人3枚ずつ分けるんだ。

⑥ $980 \div 28$ を筆算でしてみよう。
・今までと同じ考え方で計算できそうだね。

⑦ 一の位の商をどうすればいいだろうかな。
・前に勉強したように、一の位に0をたてればいいのか。

⑧ 今まで勉強してきたことを使って、考えてみよう。
・わられる数とわる数と同じ数でわっても、答えは同じだったね。

⑨ まとめ問題をやってみよう。

☆児童の活動目標
小数のかけ算、わり算の計算の仕方を説明しよう

《児童の実態》～学習前～
・わり算の筆算は、「たてて」「かける」「ひく」「おろす」の順で行うことを理解している。
・小数第3位までの読み方、書き方を知っている。
・筆算の計算は、なぜ整数と同じようにできるのか理解していない。

第1次 ～学習のめあてをつかむ～
① (小数) × (整数) の計算の仕方を考えよう。
小数の部分をどうすれば説明できるようになるかな。

第2次 ～小数のかけ算、わり算の計算方法を考え、説明する。
② 筆算の計算を完成にしよう。
③ 小数第2位までの数の計算にチャレンジしよう。
以前学習したことを使って考えると、2.35をどうすれば計算しやすいかな。

④ (小数) ÷ (整数) の計算の仕方を考えよう。(本時)
5.7をどうすれば計算しやすいかな。

⑤ 計算の仕方を考えよう。(1)
わられる数より、わる数が大きくなってしまった。どうすればいいかな。

⑥ 計算の仕方を考えよう。(2)
まだ、計算を進めることができそうだね。わり進めていようかな。

⑦ あまりのある小数のわり算にチャレンジしよう。
あまりがわられる数よりも大きくなってしまった。どうする？
6.75をどうすればいいかな。

⑧ わり切れない場合の計算の仕方を説明しよう。

《目指す児童の姿》～学習後～
・小数の計算でも、0.1が何個分か考えれば分かること、整数として計算することができるんだ。
・あまりを出す時にも、0.1が何個分か考えれば分かりやすいね。
・問題の意味がよく分からない。

算数的活動が位置付けられ、目標達成のための手立てが明確に押さえられている。

「核となること」が意識され、単元終了後の目指す子どもの姿が明確である。

本時の目標（小1 C教諭）

実践 ①の「式を立てて答えを求めることができる。」については、付けたい力との関連が曖昧であったが、実践 ②の「10のまとまりを作ればよいことを見いだす」については、指針や学習指導要領解説を基に付けたい力が明確になっていた。

(1) 本時の目標

全体と部分を知ってその...法を用いるのか、加法を用いるのか迷うであろう子どもたちが、ブロックを操作したり、自分の考えを言葉で伝えたりする活動を通して、減法の場面であることを理解し、式を立てて答えを求めることができる。

(1) 本時の目標

(1位数) + (1位数)で...、加数分解で計算するであろう子どもたちが、ブロックを操作したり、自分の考えを言葉で伝えたりする活動を通して、被加数分解や五・二進法などの計算の仕方があることに気付き、どの方法も10のまとまりを作ればよいことを見いだすことができる。

本時の目標（小1 D教諭）

実践・共に付けたい力は明確であったが、実践では、観点名を「知識・理解」とすべき所を「関心・意欲・態度」と表記していた。実践では、観点名が正しく表記されていた。

(1) 本時の目標 授業実践 絵をもとに「のこり」を求める場面（出て行った、取った）を、ブロックや言葉を使って表す活動を通して、<u>減法が用いられる場面を知る。</u>（算数への関心・意欲・態度）	(1) 本時の目標 授業実践 教室にあるいろいろなものの長さや紙テープの長さにかえて取り出す活動を通して、直接比較できないものの長さを比べることができる。（数量や図形についての技能）
---	---

本時の指導（小5 B教諭）

実践 は、「322枚の折り紙を14人に同じ数ずつ分ける」という「等分除」の考えによる場面であったが、学習指導案に示されている。囲みの図は「包含除」の考えに基づくものであり、わり算の意味理解の基盤となる考え方が間違っていた。実践 では、「既習事項を基に計算の仕方を考える」ことや、「0.1を基に数を相対的に見ることで整数の計算に帰着すればよいことを理解する」といったポイントが押さえられており、付けたい力が明確で、「目標・学習活動・まとめ・評価」に一貫性のある学習指導案となっていた。

5 本時の指導

(1) 目標

3位数÷2位数の計算の仕方を理解するために、図や絵を用いて計算方法を考え、それを伝え合う活動を通して、3位数÷2位数＝2位数の計算の仕方を理解することができる。

(3) 展開 (5/9)

段階	本時の活動
つかむ (5分)	○折り紙が32まいあります。14人で同じ数ずつ分けると、1人分は何まいになるでしょうか。
考える (15分)	・100のたば3たばを14人で分けることはできない。 100のたばを10のたばに換えて、計算しなければならぬ。 ・十の位は、2か3くらいになりそうだ。
限める (20分)	10の位に本当に2がたつのか、ばらは何まいずつ分けることができそうか、絵で考えてみよう。

・10のたばは2つずつ分けることができたね。
・10のたばが4つ残ったけど、ばらにしないと分けることができないよ。

○ 筆算で計算しよう。

等分除の考えではなく、包含除の考えになっていた。

4 本時の目標

(1) 目標

(小数)÷(整数)の立式の仕方を理解するために、図や絵を用いて計算方法を考え、それを伝え合う活動を通して、(小数)÷(整数)の筆算の仕方を理解できる。

5 展開 (4/10)

段階	本時の活動
つかむ (5分)	○5.7mのテープを3人で同じ長さずつ分けると、1人分は何mになるでしょうか。
考える (15分)	テープを切ってみれば、1人分の5.7mを6mと考えれば、式が長さが分りそうだね。 6÷3で、1人分は2mくらいになるね。
限める (20分)	○自分の考えを班のみんなに紹介しよう。 5.7÷3で筆算をしたら、1.9mになった。けど、なぜこの計算方法でいいのか説明できない。 ○なぜ5.7÷3で計算できるのか？ 5.7は0.1が57個分ということから、5.7で計算してもいいと思います。答えの1.9は、0.1が19個分という意味なので、答えは、1.9mになります。

なぜ整数と同じように計算できるのかを思考させ、0.1を基に数を相対的に見る考えを導いている。

付けたい力に沿って、一貫性のある展開となっている。

(イ) 指導主事が授業を参観し、事後研修会で指導・助言を行うことで、授業実践の成果と課題を明確にする。

下表は、29人の授業を実際に参観した指導主事の評価である。

【 : 十分満足できる ○ : 概ね満足できる : 改善したい】 (単位%)

【授業の様子から判断する】			○	
本時の目標に迫るための課題を設定し、問いをもたせている。	実践	31	52	17
	実践	55	38	7
どの子どもも本時の目標に迫るための学習活動を行っている。	実践	17	48	35
	実践	48	42	10
本時の目標を達成するための振り返りや定着を図る工夫を行っている。	実践	14	69	17
	実践	42	42	16
子どもの学びに対する共感的な見取り・価値付け・支援ができています。	実践	55	38	7
	実践	65	35	0
即時的対応や指導の修正等、子どもの学びに適切に対応している。	実践	7	76	17
	実践	28	65	7

「 本時の目標に迫るための課題を設定し、問いをもたせている。」については、「十分満足できる」が31%から55%に向上した。「算数的活動」や「数学的活動」を意識し、目的意識をもった主体的な活動となるよう、教材開発や課題提示を工夫した授業がたくさん見られた。小学5年生を担当するH教諭の「三角形の面積」の授業では、日常の事象との関連を図り、「活用」の視点から算数の有用性を子どもに実感させることを大切にされた授業が行われた。また、中学3年生を担当するK教諭の「相似な図形」の授業では、「平行線と比」の性質を学ぶ意義を実感させるために、「封筒に入れる便せんを3等分する方法」を題材として扱った。子どもから、「なぜこの方法で3等分できるんだろう？」という問いが自然に生まれ、その後の主体的な追究につながっていった。

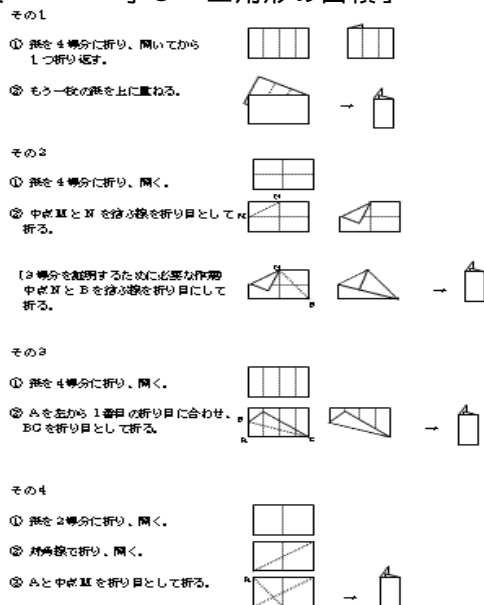
また、「 どの子どもも本時の目標に迫るための学習活動を行っている。」の「十分満足できる」が17%から48%に向上したことから、「付けたい力」に沿って展開される授業が増えたことが分かる。つまり、「授業改善」が進んだことを意味している。

更に、授業実践 では、授業の終末が中途半端で終わり、学習内容の定着が不十分な授業が多いことが大きな課題であったが、「 本時の目標を達成するための振り返りや定着を図る工夫を行っている。」の「十分満足できる」が14%から42%に向上したことから、授業の終末における振り返りや定着を図る工夫を大切にしようとする意識が高まってきたといえる。このことは、授業のタイムマネジメントを大切にする意識を高めることにも効果があった。

一方、「 即時的対応や指導の修正等、子どもの学びに適切に対応している。」については、「十分満足できる」が実践 でも28%に留まったことから、こうした指導技術を高めていくには今後、更に経験を積み重ねていくことが必要であると考えられる。



小5「三角形の面積」



中3「便箋を3等分する方法」

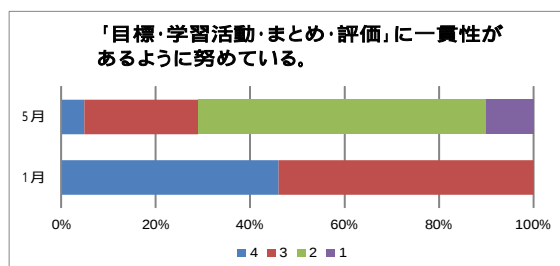
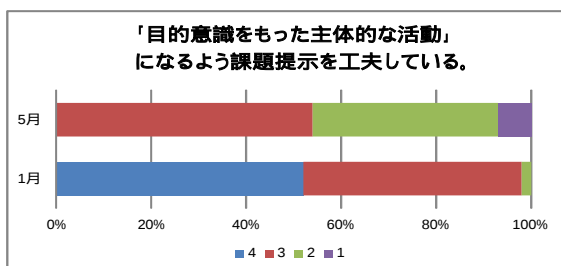
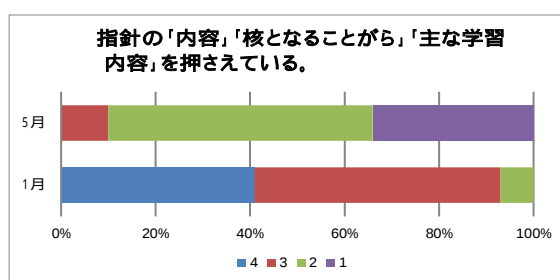
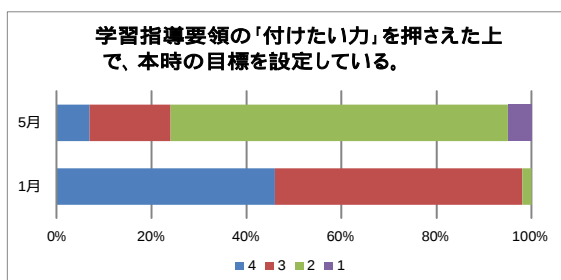
(ウ) 意識調査 を基に、現在の授業実践を振り返る。

2 回の授業実践を終えた後、再度意識調査を実施し、現在の授業実践を振り返る場を設けた。アンケート結果は次の通りである。(調査人数41人)

【 4 よくあてはまる 3 概ねあてはまる 2 あまりあてはまらない 1 全くあてはまらない】

段階	内 容		4	3	2	1	4・3 割合(%)
P	子ども一人一人の既習事項の習得状況や学習内容の理解度を把握している。	5月	12	68	20	0	○80
		1月	34	61	5	0	95
	単元で「付けたい力」を押さえて、単元の指導計画を立てている。	5月	5	24	61	10	29
		1月	29	64	7	0	93
	学習指導要領の「付けたい力」を押さえた上で、本時の目標を設定している。	5月	7	17	71	5	24
		1月	46	52	2	0	98
D	教科書の細部まで分析して教材研究を行っている。	5月	2	44	42	12	46
		1月	22	63	15	0	○85
	指針の「内容」「核となること」「主な学習内容」を押さえている。	5月	0	10	56	34	10
		1月	41	52	7	0	93
	板書計画を立てて、授業に臨んでいる。	5月	15	41	32	12	56
		1月	46	39	15	0	○85
D	「目的意識をもった主体的な活動」になるよう課題提示を工夫している。	5月	0	54	39	7	54
		1月	52	46	2	0	98
	思考力や表現力の育成を目指して、「かく」活動を大切にしている。	5月	10	56	34	0	66
		1月	34	56	10	0	90
	思考力や表現力の育成を目指して、「話す」活動を大切にしている。	5月	10	58	32	0	68
		1月	39	54	7	0	93
	数、式、図などを思考や説明の道具として用いることを大切にしている。	5月	17	37	39	7	54
		1月	51	37	12	0	○88
	子どもに任せるところと教師が教えるところのバランスを意識している。	5月	5	46	49	0	51
		1月	29	66	5	0	95
C・A	全体の前で発表させる際には、他者を意識した説明を大切にさせている。	5月	7	42	49	2	49
		1月	22	61	17	0	○83
	「できる」「身に付く」状態まで定着を図ることを大切にしている。	5月	20	48	32	0	68
		1月	39	54	7	0	93
	「振り返りの場」を設定し、個に返すことを大切にしている。	5月	20	24	39	17	44
		1月	41	39	18	2	○80
	子どもの頑張りや努力を認め、励ますことを大切にしている。	5月	39	56	5	0	95
		1月	61	39	0	0	100
	子どもの姿を適切に見取り、指導と評価の一体化を図っている。	5月	5	46	49	0	51
		1月	27	61	12	0	○88
C・A	「目標・学習活動・まとめ・評価」に一貫性があるように努めている。	5月	5	24	61	10	29
		1月	46	54	0	0	100
	授業後には自らの授業を振り返り、改善点を明確にしている。	5月	5	59	34	2	64
		1月	41	54	5	0	95

すべての項目で、肯定的な割合が増加したが、中でも5年経験者の大きな課題であった「学習指導要領の『付けたい力』を押さえた上で、本時の目標を設定している。」「指針の『内容』『核となること』『主な学習内容』を押さえている。」「『目標・学習活動・まとめ・評価』に一貫性があるように努めている。」の意識が高まったことは大きな成果である。また、そうした意識の向上が、課題提示の工夫をはじめ、他の意識の向上にも好影響を与えている。



(4) 研究のまとめ

ア 成果

学習指導要領及び同解説とともに、「指針」を5年経験者研修の中核に据えて研究を行ったことにより、本研究の成果として次のことが明らかになった。

- ・全体研修・や授業実践を通して、「付けたい力を明確にする」ことの意義が研修員に理解され、「付けたい力」が明確で、「目標・学習活動・まとめ・評価」が一体となった学習指導案を作成しようとする意識が高まった。また、相当数の研修員がそうした学習指導案を作成できるようになるとともに、「付けたい力」に沿って授業が展開できるようになり、「授業改善」を図ることができた。
- ・本研究における副産物として、算数的活動や数学的活動の重要性を認識し、課題提示や授業展開を工夫したり、適切な支援を行ったりするなど、教師の意図的な働き掛けができるようになった。また、定着を図るための振り返りの活動を大切にしたり、子どもの実態把握や見取りを今まで以上に大切にして授業が展開できるようになった。

イ 課題

- ・「単元」を大切にする意識は高まったものの、単元全体の構想を深く練ることや単元間のつながりを押さえることには課題が残った。系統性の強い教科であるため、学年間、異校種間における教材の縦のつながりを大切にする意識を高めていきたい。そのために、新たにWEB上に公開した資料（「指針」の内容を「領域」や「学習内容」ごとのまとまりに構成し直したもの）の活用や「指針」の巻末における系統表の活用など、「指針」の更なる活用を呼び掛けていきたい。
- ・目標と評価に一貫性をもたせる意識は高まったものの、具体的な評価方法については改善の余地が残った。「指針」には「評価の在り方」についての記載がない点や、「指導と評価の一体化」が叫ばれている点を踏まえ、国立教育政策研究所の資料を基に、「評価の在り方」についての県の指針となるものを、新たに作成していくことを検討したい。

【研修員の感想】～5年経験者研修を終えて～

- ・5年研を通して、初めてと言っても過言ではないほど、指導要領や指針をじっくり読んだ。5年研を通して、自分が目指す授業を指導要領に基づいて考えなければならないことを学んだことは大きな意義であり、これからも大切にしていきたい。子どもとの接し方や見取り方、授業の基盤となる学級経営については、指導主事からお褒めの言葉をいただき自信もついた。10年研に向け、更なる授業力向上を目指して日々の研鑽に努めていきたい。（小学校教諭）
- ・生徒の「考えたい!」「伝えたい!」を引き出す授業を目指して実践してきた。課題提示を工夫すること、個に応じた適切な支援を送ることなど、教師が意図的な働き掛けを行うことで、子どもの「何でだろう?」を引き出したり、子どもが考えたり他者と関わったりする必要感を生み出すことができると感じた。また、そうした授業も、学習指導要領の付けたい力に沿ったものでなければならない、ということを経験を通して学ぶことができた。自己流の授業に陥っていたことを反省し、学習指導要領や解説、授業づくり指針を常に拠り所にしながら、よりよい授業を目指してこれからも努力していきたい。（中学校教諭）

4 理科

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 理科」を用いて「単元構造図」及び「主な学習内容」を作成することで、授業改善を図ることができる。

(2) 研究の方法

ア 授業改善を促す取組

以下の取組を行うことにより授業改善を促した。

(ア) 訪問指導における活用及び活用方法の提案

初任者研修，5年経験者研修，10年経験者研修における研究授業，及び要請訪問における中心授業等の計画において，協働による単元構造図及び主な学習内容における学習過程（以下「単元構造図等」という。）の作成について促した。

(イ) 悉皆研修，希望研修，学校等支援研修における活用及び活用方法の提案

研修における演習等において，単元構造図等の作成について扱った。

(ロ) 高等学校理科担当教員との共同による効果的な活用事例の開発及び提案

高等学校理科における授業実践上必要な学習課題の設定に向けて，単元構造図等の作成に取り組み，その活用について検討した。

イ 高等学校における単元構造図等の作成について

高等学校において，単元構造図等を作成することにより，授業改善を図ることができるか，以下の対象，手順により研究を行った。

(ア) 対象

県立高等学校理科担当教諭

(イ) 手順

a 事例収集

単元構造図等の作成を依頼し，作成された事例のうち，問題解決的・探究的な学習活動，観察・実験を伴う学習活動等の構想に寄与する有効な事例について検討を行う。

b インタビュー

単元構造図等の作成に関する対象者へのインタビューにより，問題解決的・探究的な学習活動，観察・実験を伴う学習活動等の構想に寄与する有効な要因について分析・解釈を行う。

(3) 研究の内容

ここでは，特に高等学校理科担当教諭に単元構造図等の作成を通して得た感想や意見についてインタビューをした内容について報告する。なお，作成された単元構造図等のうちの一つを図1に示す。

ア はじめに

中央教育審議会は平成20年1月に答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」¹を行った。この答申では，「理数教育の充実」が2番目の柱として位置付けられ，学習指導要領改善の基本方針の一つとして「科学的な概念の理解など基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る観点」¹から，「小・中・高等学校を通じた理科の内容の構造化」¹が示された。このような中央審議会の答申の内容を踏まえて「小学校学習指導要領」²及び「中学校学習指導要領」³，「高等学校学習指導要領」⁴の改訂が行われ，小・中・高等学校を通じた理科の内容の構造化が行われた。それに伴い，「小学校学習指導要領解説理科編」⁵及び「中学校学習指導要領解説理科編」⁶，「高等学校学習指導要領解説理科編」⁷には，取り上げられる全ての単元の構成が「エネルギー」，「粒子」及び「生命」，「地球」という内容の柱ごとに一つの内容の構成図に示された。教科書においても，各単元の冒頭に，これまでに学んだことを踏まえてこれから学ぶ内容が記載されるなど構造化

を考え、系統性に配慮したと思われる記載⁸が見られる。

平成 24 年に静岡県教育委員会が作成した「静岡県の授業づくり指針 理科」⁹では、このような理科の内容の構造化を踏まえ、小・中・高の指導内容を体系的・系統的にとらえた資料として各単元ごとに、単元の構造を図で表す単元構造図の例を示している。単元構造図の例を示すことにより単元をふかんし、知識間の系統性を明らかにするとともに、教師自身が単元の全体像をつかむことができ、深みのある授業構想ができるようになることをねらっているものである。

単元の構造を図として表すことで、授業構想や単元構想に資することなどを目的とした取組をした例は理科以外の教科においてもいくつか報告されている。例えば中島¹⁰は中学校社会科における単元構造図の作成を通して単元の構造化を行い、単元構造図を作成することで指導の流れや、生徒が修得しなければならない知識などを明確に把握することができている。また、岐阜県教育委員会可茂教育事務所¹¹では、「各単位時間の役割や関連性が明確になるよう構造化された授業構想となる」などの視点を持って、各教科において単元構造図を作成する取組を行った。国立教育政策研究所「評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校社会科」においても単元構造図¹²が示されている。また、単元構造図を作成する意義としては澤井¹³が「学習内容を全体的、構造的に捉えることが大切である。こうした構造図等の作製は、評価に限らず、知識の習得と活用、児童の主体的な問題解決の道筋などを構想する教師の授業準備として大切である。」としている。これらのように小学校や中学校においては単元構造図を作成する取組の実践や研究がなされている。

そこで、単元構造図等の作成に関する活用として、高等学校における、単元構造図等の作成について調査・研究することとした。「静岡県の授業づくり指針 理科」では、小学校及び中学校の全ての単元について単元構造図の例を作成したが、小・中・高の指導内容を体系的・系統的に捉える活用として、高等学校の理科教諭に指導内容について単元構造図等の作成を依頼し、高等学校における単元構造図等の作成に伴う効果と活用について検討することとした。

イ 対象と方法

単元構造図等の作成者は静岡県立高等学校在勤の 7 名の理科教諭である。単元構造図等の作成者のうち、インタビューの対象は 4 名でありグループインタビューの形態で行った。対象者の属性は男性 3 名、女性 1 名であり、いずれも県立高等学校における経験年数が 10 年以上の理科教員である。2013 年 10 月に、本研究の趣旨について口頭で説明を行い同意の得られた上で、授業支援 班理科担当が司会を担い、他の理科担当 2 名と対象者 4 名の計 7 名にて 30 分間のグループインタビューを実施した。インタビュー項目として、何に役立つか、どこが困難か、どのようなことに活用できるかの 3 点について回答を得た。

得られたデータは小規模であり自由回答を分析するため、量的な分析に比べて効果的と考えられる質的研究法を用いた。特に小規模の質的データに有効であり手続きが明確で分析の経過が明示的に記述されるという特徴をもつ SCAT¹⁴を用いて分析を行った。

ウ 結果と考察

分析結果を表 1 と表 2 に示す。グループインタビュー時の発言内容をテキスト欄に記載して基本的に発言者別に行を分けて分類した。テキストである発言内容の中で注目すべき語句を記載した欄<1>では、発言者が異なっているが関連すると思われる語句が使われている場合が見られる。例えば授業についての「構成」や「構造」、「全体像」などは、作成者が単元構造図等の作成において単元全体を見渡そうとしていたことが推測される。その上で単元計画や授業構想を作成することにつなげていけるのではないかと考える。また「振り返り」という語句も複数回見ることができる。これら二つの例は単元構造図が単元全体に対するメタ認知を行うことに利用できたり、メタ認知を行うことの重要性を言っていると捉えることもで

きると考える。

テキスト中の注目すべき語句を並べ替え、言い換えて文にし、説明するような概念や言葉を加え、「テーマ・構成概念」の欄にまとめた。更に全体をまとめた「ストーリーライン」を以下に表した。

単元構造図を作成する時に把握しておく必要があることは次の点である。1点目は教える内容及びその順序、2点目は生徒の実態、3点目は、単元全体のイメージである。これらを基にして一つずつ作成するため、一つの単元を作成する時間が大変長くなる。

単元構造図を作成することによって教員は、単元に対する理解が深まり、単元構想が容易になる。また、単元の全体像をより明確に把握することができ、授業で教えるポイントが分かる。更に、授業の順序を考え直す機会となり、授業構想に活用できる。

単元構造図の特徴は次のような点が上げられる。同じ作成者であっても作成の途中で思考が変わると違う構造図になる。作成者の知識や考え方が反映され、個性が見られる。経験の浅い教員には作成は難しいと考えられる。

単元構造図の活用には授業における活用と授業以外の場面での活用の二つの側面が考えられる。授業における活用としては、「新しい概念や新しい物理量を説明するときに、構造図を示すことで生徒の理解を深めさせる。」「単元終了時に単元構造図を配り、単元全体を生徒に振り返らせる。」「単元構造図を穴埋め式にして学習させる。」などが挙げられる。授業以外の場面での活用では、授業に向けて内容を整理する。「授業後の振り返りとして利用し次の授業構想に役立てる。」「1年間の教師自身の振り返りとして利用し次年度の構想に役立てる。」

高校における単元構造図の作成の課題としては、一つの単元構造図を1枚にまとめることが難しい内容であるほど複雑になる可能性があり、作成するために必要な時間が大変長くなることである。また、科目「科学と人間生活」においては、小単位ごとに様々な異なった要素が含まれているため構造化が難しい。

インタビューにおける発言から得られた意見や感想から、上記のように効果的と思われる点や可能性、活用方法の案などが多く挙げられた。これらのことから、単元構造図等を作成することで得られる、単元構想や授業構想などに関する多くの可能性があることが分かり、各学校の実態に合わせて授業改善を図ることができるといえる。

さらにデータの個別性や具体性、多様性に意識して「理論記述」を次のように記載した。

高校の理科において単元構造図を作成することは、教師にとって有効な点をいくつか指摘することができる。

単元構造図は、単元構想以外においても活用できる場面がいくつか考えられる。

高校の単元構造図は大変複雑になる可能性があり、作成時間が大変長くかかることが考えられる。そのため、要素を削減して簡単な図になるように心掛けたり、単元をさらに細かく分けた小単位で構造図を作成するなどの工夫が必要になる。また、科目「科学と人間生活」においては一つの単元の中に大変多くの要素が含まれているため構造図の作成が困難である。

さらに追求すべき点や課題として、

科目「科学と人間生活」においては、その特徴的な単元構造により、他の科目に比べて単元構造図の作成が困難である。「科学と人間生活」における単元構造図の活用の可能性について、今後さらに検討を続けていきたい。

単元構造図の作成に大変長い時間がかかることが考えられる。現実的な時間で作成できる

方策について検討したい。

と挙げた。科目「科学と人間生活」については、単元構造図の作成や活用についての更なる検討が必要と考える。また、全体を通して、高校の学習内容における単元構造図が複雑で情報量の多いものになると考えられることから、作成にかかる時間が長くなる懸念がある。作成時間が長くなれば、実際に単元構造図等を作成することが現実的でない場合も考えられる。今後の検討課題としたい。

(4) 研究のまとめ

高等学校の理科における単元構造図の作成に伴って、様々な意見や感想を得た。これらのことから単元構造図等を作成することによる授業改善の多くの可能性を見て取ることができた。理科担当教員の方々に実際に作成していただきながら、活用に関する様々な案が出され、仮説である「静岡県の授業づくり指針 理科」を用いて「単元構造図」及び「主な学習内容」を作成することで、授業改善を図ることができるということがいえた。また、小・中学校の単元構造図に比べて情報量が多い図になることが考えられるが、高等学校においても、単元構造図を作成することによる意義を感じることができた。今後は、上記の課題を踏まえて、高等学校において、作成時間が現実的である単元構造図の構成や作成方法についての研究や、小・中学校における実践も含めて単元構造図による授業改善の具体例やその効果についての研究などが考えられる。静岡県の授業づくり指針の活用を更に推進し、今後の静岡県の理科の授業改善に資することを期待したい。

参考文献

- 1 中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」2008
- 2 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」(平成20年3月告示)
- 3 文部科学省(2008)「中学校学習指導要領」(平成20年3月告示)
- 4 文部科学省(2009)「高等学校学習指導要領」(平成21年3月告示)
- 5 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説理科編」
- 6 文部科学省(2008)「中学校学習指導要領解説理科編」
- 7 文部科学省(2009)「高等学校学習指導要領解説理科編」
- 8 例えば東京書籍(2011)「新しい科学 2年」p.46 など
- 9 静岡県教育委員会(2012)「静岡県の授業づくり指針 理科」
- 10 中島 一郎(2012)「中学校社会科における思考力・判断力・表現力等の育成をめざして - 言語活動を充実させるための単元・単位時間の構造化 - 」『平成24年度京都市総合教育センター紀要』
- 11 可茂教育事務所 教育支援課(2012)「指導改善サポートプラン IN KAMO 中学校版」平成24年3月
- 12 国立教育政策研究所「評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校社会科」 p.67
- 13 澤井陽介(2012)「授業づくりのポイント」『内外教育 第6160号』時事通信社 p.4
- 14 大谷尚(2008)「SCAT : Steps for Coding and Theorization - 明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 - 」『感性工学』10(3) p.155-160

生物基礎（3）生物の多様性と生態系

学習指導要領内容

生物の多様性と生態系について観察、実験などを通して探求し、生態系の成り立ちを理解させ、その保全の重要性について認識させる

- | | | |
|---------------|-----------------|----------------------|
| ア 植生の多様性と分布 | イ 生態系とその保全 | ウ 生物の多様性と生態系に関する探究活動 |
| (ア) 植生の多様性と分布 | (ア) 生態系と物質循環 | |
| (イ) 気候とバイオーム | (イ) 生態系のバランスと保全 | |

単元構造図

《中3》科学技術と人間 自然と人間

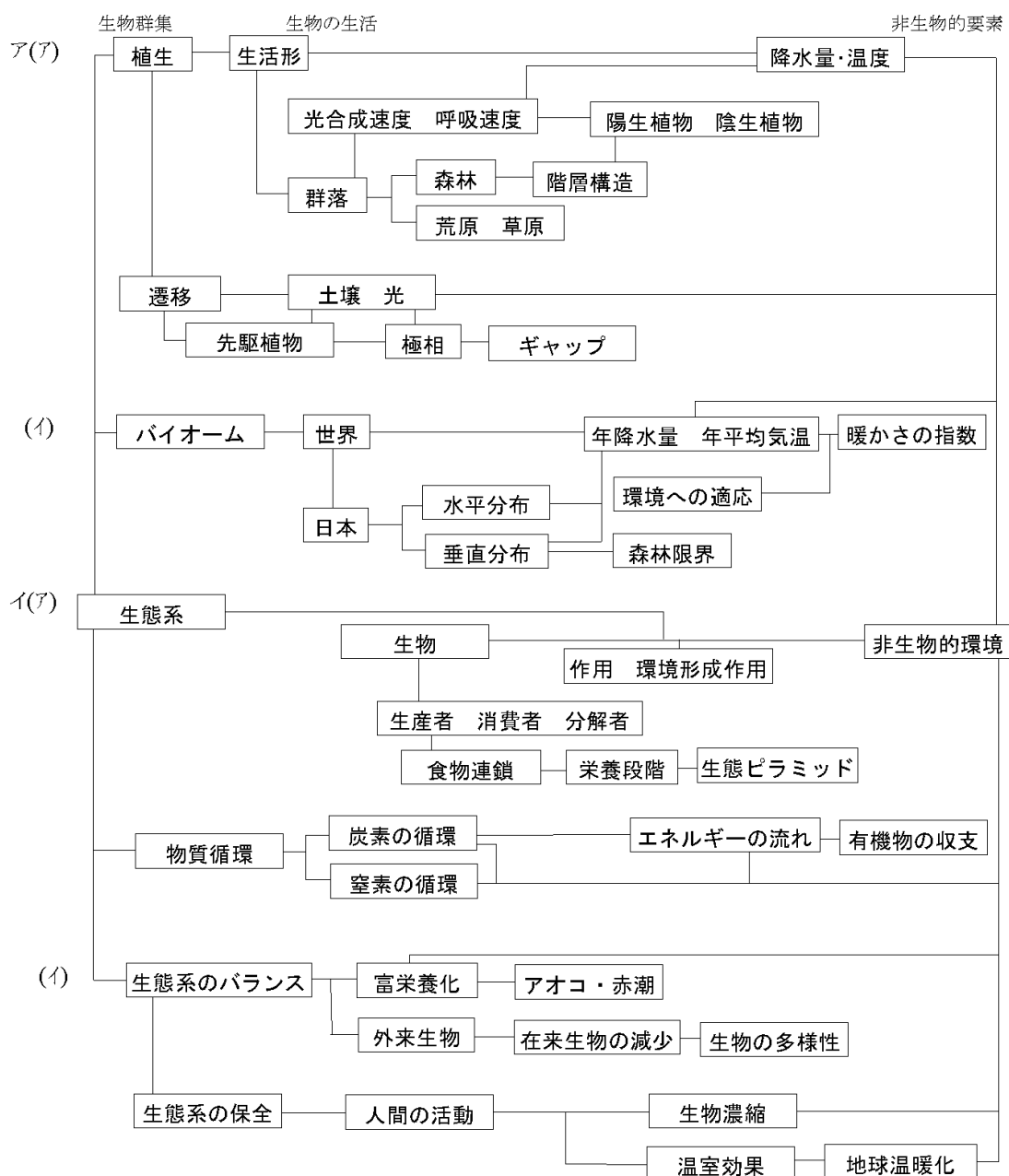


図 1

[illegible]

番 号	発 話 者	テク スト	(イ)テキスト中の注目すべき語句	(ロ)テキスト中の語句の言い換え	(ハ)ナカスト中の語句の言い換え	(ニ)左を説明するようなテクニク (前後や全体の文脈を考慮して)	(ヘ)テーマ構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	(コ)疑問・課題
13	A氏	単元の内容を全部覚えた後に生徒に対して聞きたいですね。これまでの学習でこのようにかたやつかないところがないかという点について、これから聞いてみたいのですが、生徒にとっても分かりやすいものではないでしょうか。逆に内容が重なりすぎてどこにどんなキーワードが入るのかわからないのか、学習活動に用いるというのはどうでしょうか。	生徒に対して配りたい、生徒にとってわかりやすい、学習活動に用いる	単元の終わりに生徒に振り返り自身の振り返りに利用する、構造図を利用して学習活動に用いる。	生徒に対する構造図の利用	生徒の利用として、単元終了時に配り、振り返りをさせる。六曜め式にして学習活動に用いる。		
14	司会	生徒にとっての学習の振り返りですね。						
15	B氏	生徒の振り返りとともに、教師自身が授業で扱った内容などを振り返る時に活用できると思っています。シラバスもそうなのですが、まずはつづいてみて、それから年通しをやってみて、教科書が終わった時にはこれはもう大丈夫だと思えるまでと書き込んでから単元構造図を再構築する。来年は授業でアラレンジしていくのか、次の授業を構築する際の教師自身の振り返りにも使えるのではないかと思います。	生徒の振り返り、教師自身の振り返り、単元構造図を再構築する	年間が終わった後の教師自身の振り返りに利用できる。構造図を再構築しPDCAに利用	教師に対する構造図の利用	教師が1年間を振り返る時に活用できる。次時の授業についての改善を考えやすい。		
16	司会	教師が自分の授業を振り返る時に活用できます。						
17	C氏	実際に授業をやってみて、これをもう少しうまく扱った方がいいな、授業構成の振り返りに役立てようよ。それと同時に、単元構造図の再構築によって、授業者の単元内容の統合的な見方も変わっていくと思います。	授業構成の振り返り、単元内容の統合的な見方も変わっていく	授業後の教師の授業構成に対する振り返りに役立つ、構造図を再構築することで単元の見方が変わる	教師に対する構造図の利用、構造図の性質	教師は授業の振り返りに利用できる。構造図を再構築することで単元の見方が変わる。		
18	司会	自分が見ているものはまた違う構造で与えてくるのもう一つこういう方がいっているのか、というように感じます。そのような振り返りに活用できる。自分の実践を振り返るだけでなく、自分の授業を再構築した後の構造につながらず、そのために有効なものであるということでしょう。さらに、教師に対してだけでなく、学習者の生徒に見せて、生徒に構造を振り返らせるというのが面白い視点でもあると思います。						
19	A氏	こういうのは、やっぱり1枚でまとまっていなければだめでしょう。この1枚にまとめるというのがほとんど難しいのですが、そこが単元構造図のポイントではないでしょうか。	1枚にまとまっていなければならないけれども、1枚にまとめるというのがほとんど難しい、単元構造図の水イント	1枚にまとめるべき、1枚にまとめるのは難しい。	構造図のレイアウト	構造図は1枚でまとめる方がいい。	1枚でまとめるには可能性があると いうことは、図は複雑なものになる か、情報量が少いものになるかなど、短時間で把握しやすいものに なることが考えられる。	
20	C氏	ただし、科学と人間生活については、単元構造図を構築する場合、内容にいろいろな要素が含まれていて構造化が難しい、マトリクスを構成するのに共通のキーワードを選びにくい、ということがやってきて分りました。	化学と人間生活については、構造化が難しい、共通のキーワード	科学と人間生活については科学的特性上、構造化が難しい	構造図の性質	科学と人間生活は、小単元に比べて、大きな要素が含まれていたため、構造図の作成は困難	科学と人間生活は、小単元と違って、大きな要素が含まれていたため、構造図の作成は困難	
21	司会	科学と人間生活は、単元ごとに構造化するのは困難で、中項目又は小項目ごとの構造化であれば、内容の関係性がつかみやすいく、というところでしようか。高等学校の場合は、科目によって構造化される事情があるというところでしょう。 今回は、単元構造図の作成について、高等学校の教科書の立場からいろいろな示唆をいただきました。ありがとうございました。						

ストーリーライン(現時点で言えること)	単元構述図を作成する時に把握しておく必要があることは次の点である。1点目は単元の生徒の実態、2点目は単元の生徒の属性、3点目は単元全体の実態である。これらを基にして一つ一つの単元を作成する期間が大変長くなる。単元構述図の作成は次のような手順で行われる。また、単元の全体像をより明確に把握することができ、授業で教えるポイントが分かる。更に、授業の順序を考え直す機会となり、授業構型に活用できる。単元構述図の作成者は次のような考えが挙げられる。同じ作成者であっても作成途中で思考が変化する。授業の知識や考え方が反転される。経験の浅い教員には作成は難しいと考えられる。単元構述図の活用には授業における時間と授業案の両面での活用が考えられる。授業における活用としては、「特に知識や新しい物理事を説明するとき、構述図を示すことで生徒の理解を深めさせる。」「単元終了時に単元構述図を配り、単元全体統観に活用される。」「単元構述図を代数的形式にて学習させる。」「授業後の振り返りに利用し次の授業構型に役立てる。」「1年間の教師自身の振り返りとして利用し次の生徒に役立てる。」 高校における単元構述図の作成の課題としては、一つの単元構述図は1枚にとまどめることが難しい内容であるほど複雑になる可能性がある。作成するために必要な時間がかかることである。また、科目「科学と人間生活」においては、小單元ごとに様々な要素が含まれているため構造化が難しい。
理論記述	高校の理科において単元構述図を作成できる場面がいくつか指摘することができる。 単元構述図は、単元構述以外においても活用できる可能性がある。そのため、要素を削減して簡単な図になるように心掛けた。単元をさらに細かく分けた小單元で構述図を作成する高校の単元構述図は大変複雑になる可能性がある。作成時間が大変長くなる可能性がある。そのため、要素を削減して簡単な図になるように心掛けた。単元をさらに細かく分けた小單元で構述図を作成するなどの工夫が必要になる。また、科目「科学と人間生活」においては一つの単元の中に大変多くの要素が含まれているため構述図の作成が困難である。
さらに追究すべき点	科目「科学と人間生活」においては、その特徴的な単元構述により、他の科目に比べて単元構述図の作成が困難である。「科学と人間生活」における単元構述図の活用の可能性について、今後さらに検討を続けていきたい。 単元構述図の作成に大変長い時間がかかることが考えられる。現実的な時間で作成できる方策について検討したい。

5 外国語科

(1) 研究の仮説

小学校外国語活動及び中学校外国語においては、「コミュニケーション能力の育成」という視点に、目標の一貫性がある。つまり、共通して、目標達成のために、人と関わることを大切にすること、自己や他者を大切にする姿勢を育てること、そして、異文化に対して寛容な態度をとったり、自国の文化を大切にしたりする等の態度を育成することに重要性を持っている。しかし、中学校外国語では学習型の授業が行われているのに対して、小学校外国語活動では体験型の授業が行われていることや、外国語活動で用いた表現や語彙は児童に定着させることを目指していないことなど、実際の授業を行うに当たって、小中学校間で異なる部分が多い。小学校で、活動を中心に外国語について楽しく学び、仲間の良さに気付いたり、様々な国の言語や文化に触れて、異なるものへの寛容な態度を育んだりしている。しかし、多くの子どもが、中学校に入学して文法中心の教え込みの授業に出会い、コミュニケーションツールとしての英語を学ぶことの意欲を失ってしまっていると言われている。

静岡県では、目指す子どもの姿を「人と関わることを魅力的だと感じる子ども」としており、「コミュニケーション能力の素地」を培った小学生が、円滑に中学校での外国語の授業になじみ、「コミュニケーション能力の基礎」を育成させていくことを目指している。このためには、目指す子どもの姿を共有した上で小中連携を図ることが重要であり、そのためには、小中一貫カリキュラムの作成は急務となる。

小中一貫カリキュラムについては、地区の児童生徒の実態に応じたカリキュラムを、各市町や各中学校区で作成することが望ましいため、静岡県内のいくつかの市町でも、市町教育委員会が主導してカリキュラムを作成している。しかし、現場で外国語活動や外国語の授業に携わっている教員が、多忙な毎日の合間を縫いながら作成しており、思うようなカリキュラムが作成できていないのが現状である。

そこで、静岡県総合教育センターでは、小中が連携した授業改善が図られるように、各市町で作成している小中一貫カリキュラムの改定に向けて「静岡県の授業づくり指針」を活用し、よりよいカリキュラムの作成に資するよう、研究を行うこととした。

研究仮説

各市町が作成する小中一貫カリキュラムの改定に向けて「静岡県の授業づくり指針」(以下「指針」)を活用し、よりよいカリキュラムの作成に資する研究を行うことを通して、小中が連携した授業改善が図られる。

(2) 研究の方法

ア 研究の進め方

- (ア) 小学校外国語活動モデルカリキュラムと、小中学校学習内容関連表の作成
- (イ) 磐田市教育委員会、掛川市教育委員会との連携による、モデルカリキュラムと関連表の周知活動
- (ウ) 市教育委員会主催研修会における、小中学校教員を対象とした授業づくり研修の実施
- (エ) 市教育委員会におけるカリキュラム改訂作業への参加と助言
- (オ) 改訂版カリキュラムについての周知活動
- (カ) 改訂版カリキュラムに基づいた授業公開(小中)と事後研修会のサポート
- (キ) 改訂版カリキュラムに関する学校現場からのフィードバックの分析と検証

小中一貫カリキュラムの作成には、目標の一貫性、学習内容の系統性、指導方法の継続性、の三つの要素を含む必要がある。の目標については、すでに学習指導要領で

一貫性が示されているため、 と について、中学校外国語担当が、小学校外国語活動の中でどのように授業が進められているかを把握し、中学校での学習にスムーズに移行させることができるようにする。さらに、小中間のギャップを埋めるための中学校外国語科における授業の充実を図る。

イ 検証計画

(ア) ねらい

市独自の小中一貫カリキュラムの改訂、改訂版カリキュラムの周知、カリキュラムに関する授業づくり研修の実施、の三つを行うことを通して、小中の外国語（活動）担当教員の意識が変容したか、また、その結果として、授業改善が図られたか検証する。

(イ) 検証を行う期間

平成 24 年度 4 月から平成 26 年度 1 月末まで

(ウ) 対象

磐田市・掛川市の全小・中学校の外国語（活動）担当教員各 1 名

(エ) 場面

カリキュラム改訂前後の意識調査と授業参観

(3) 研究の内容

ア 小学校外国語活動モデルカリキュラムと、小中学校学習内容関連表を、「授業づくり指針」の追記として作成

Hi, friends! 1 Lesson 3 How many? 「いろいろなものを数えよう」			
単元目標 1. 積極的に数を数えたり、尋ねたりしようとする。 2. 1～20 の数の言い方や数の尋ね方に慣れ親しむ。 3. 言語には、それぞれの特色があることを知る。			
単元の特徴と留意点 ○様々な国の数の数え方を後述している。 ○子どもの負担を考慮し、「How many?」の表現が短縮された形で扱われている。 ○日本と外国の数の数え方の違いに気付く。 → デジタル教材などを活用して、数の数え方の共通点や相違点に気付かせる。 → 英語や日本語で数を数える活動を通して、日本語では、ものの数を表すときに「〇個」「〇本」「〇匹」 「〇台」「〇枚」など、様々な助数詞がつくことを再確認できるようにする。 ○数を数えるだけでは、子どもたちにとって、自分の思いを入れた活動になりにくい。 → 子どもが、思わず数を数えたいくなるような場面や自分で選んで数を言うことができるような設定をする。			
時	授業目標 【評価の観点】	活 動 《活動の目的》	留意点等
1	英語でものの数の数え方の特色に気付く。1～10 の数の言い方に慣れ親しむ。【言語や文化に関する気付き】【外国語への慣れ親しみ】	・Let's Play 1 じゃんけんゲーム 《気付き》 指導者と英語でじゃんけんをし、貼面の表に勝ったら○、負けたら×、あいこなら△を書き、○の数を数える。 ・Let's Listen 《色々な国の数の数え方を知ろう》 《気付き》 音声教材で 1～10 の数を聞いて、それがどこの国の言葉かを考える。 ・Let's Play 2 《ものを数えよう》 《慣れ》 貼面の絵を見て、鉛筆、車、犬、猫、りんごなどの数を数える。	○じゃんけんゲームを通して、数を数える必然性を生む。 ○デジタル教材を有効活用する。 ○3を表す音が、日本、中国、韓国で似ていることに気付かせる。日本の中でも9などの読み方の違いがあることに気付かせる。 ○単元の最後に行うクイズの見直しを持たせるために、教師がクイズを出す。 ○日本語では、物によって単位（助数詞）が違うことに気付かせる。（鉛筆1本、

本センターでは、小学校における外国語活動の授業の充実を図るとともに、外国語活動の学習内容と指導方法について、中学校外国語科教員と共通理解できるようにするため、小学校外国語活動モデルカリキュラムを作成した。ほとんどの小学校で、文部科学省から配されている『Hi, friends!』を使用して業を行っていることを考え、本カリキュラムも、『Hi, friends!』をベースとして6年生分の全ての授業について作成した。リキュラムを作成する上で配慮したこと以下の3点である。

【資料 1】小学校外国語活動モデルカリキュラムの一部

(ア) 各単元の特徴と、単元全体の留意点を明記した

単元の特徴と留意点では、国際理解や異文化理解について、この単元が持っている価値を示したり、年間を通した活動の中での本単元の位置付け等を示したりした。

(イ) 各活動に関して、具体的な留意点を多く掲載した

外国語活動では、活動に必然性を生むための工夫や、言語や文化に関する効果的な気付きの場面の在り方、また、児童が単元の見通しを持って、生き生きと活動できるような工夫等、「活動をどのように行うか」が重要であるため、留意点を多く示した。

- (ウ) 活動の難易度やグループサイズに配慮し、スモールステップのある単元構成とした単元最後のコミュニケーション活動で、児童全員が自信を持って自らの思いを伝えることで、思いが伝わる喜びや、仲間との関わりを大切にできるように、表現や語彙が自然と口をついて出てくる聞き慣れや言い慣れの活動を行う必要がある。そのため、児童が楽しみながら、しかも無理なく表現に慣れるようなステップを示した。

小学校外国語活動・中学校外国語(英語)の内容の構成: 学校図書(TOTAL)				
中学校外国語(英語)		小学校外国語活動		
学年・単元名	主な内容	Hi, friends! 関連単元	使用する表現	使用する主な語彙
L e s s o n 6	▲6C 昼食とカフェテリア ○ Tell us about lunch time. ・「私たちに」「私たちを」と言う。	1-9 What would you like? ★ランチメニューを作ろう。 ★どこの国の給食か、口に番号を書こう。 ★オリジナルの給食を作り合おう。		・食べ物・料理 (hamburger, omelet, hamburger steak, salad, cake, spaghetti, hotdog, pizza, ice cream, yogurt, pudding, orange juice, parfait, sushi, sausages, fried chicken, green tea, natto, miso soup, rice, bread, French fries)
	▽Talking Time 校舎を案内しよう ○ Where's the library? Go straight. Go up the stairs. Go down the stairs. Turn left. Turn right.	2-4 Turn right. ★ペアで情報を伝え合いながら、同じ町を作ろう。	○ Where is the school? ○ Go straight. Turn right/left. ○ Stop. Excuse me. Sorry.	
	▲Reading 1 ホール先生の1日 ・朝起きてから寝るまで、どんな1日を過ごしているか、自分のことを言う。	2-6 What time do you get up? ★あなたの一日を紹介しよう。	○ What time do you get up? ○ I get up at seven.	・動作(get up, go to school/bed)

【資料2】小中学校学習内容関連表の一部

小中学校学習内容関連表には、左から 中学校外国語の単元名と中心となる言語材料、小学校外国語活動での単元名と、そこで行う主なコミュニケーション活動、該当する外国語活動で使用する主な表現や語彙、の3点を示した。小学校外国語活動では、単元の中心となるコミュニケーション活動で、全員が自信を持って人と関わり、思いが伝わった喜びや、相手の良さに気付くことができることを目指している。そのため、表現や語彙について聞き慣れや言い慣れの活動を十分に行っている。しかし、定着を求めているために、表現や語彙を忘れてしまうことが多い。そのため、小学校で体験した活動や使用した教材を中学校の授業で取り入れることが、生徒たちに小学校で学んだ内容を想起させ、中学校での英語学習に見通しを持たせることができるのではと考える。以上のことから、中学校の教科書で指導する内容が、小学校での外国語活動とどのような関連があるのかを示すための、小中関連表を「指針」の追記として作成した。この資料を作成する上で、配慮したことは以下の3点である。

- (ア) 学習内容の系統性だけに目を奪われないよう、外国語活動の中心活動を明記した
 小学校外国語活動の『Hi, friends!』関連単元の欄に、人と関わることの良さや、思いが伝わったという達成感を得るために、小学校でどのような活動を行ってきたかを示した。小中学校学習関連表を示すに当たっては、本センター主催の研修会を通して配布し、作成の意図と関連表の扱い方について必ず示すようにした。
- (イ) 県内で使用されている、中学校の教科書の単元ごとの順に配列した
 中学校外国語担当教員が、教科書を進めていく上で見やすくなるよう、県内で使用されている中学校の教科書別に、単元ごとの順に配列して示した。

このように、小学校外国語活動で体験した活動を中学校外国語でも取り入れたり、『Hi, friends!』の教材を使用したりすることで、「小学校の外国語活動で学んだことが、中学校で役に立っている」と、生徒が実感できるようになると考える。そこで、小中関連表を小中一貫カリキュラムの中学校部分を改訂する時の資料として示した。

イ 磐田市教育委員会、掛川市教育委員会との連携による、モデルカリキュラムと関連表の周知活動

(ア) 磐田市の現状と連携

磐田市では、平成 25 年度から市内全ての中学校区において、小中一貫教育を推進しており、各中学校区を「学府」と呼んでいる。それぞれの学府では、地区に合った小中一貫教育を推進しているが、全学府において、外国語教育に力を入れている。小学校 1, 2 年で年間 5 時間、3 年で 15 時間、4 年で 20 時間、5, 6 年は 35 時間分の外国語活動のカリキュラムが作成されており、小学校低学年段階から英語を使ったコミュニケーションに少しずつ慣れ親しむことで、中学校卒業時には、ゆっくりでよいので英語で会話ができることを目指している。

平成 24 年度末には、小中を貫くカリキュラムである、『磐田市「英語」ガイドライン』を作成した。このガイドラインは、小中の外国語活動・外国語担当教員が共同で作成したものであり、小学校 1 年生から中学校 3 年生までの 9 年間分のものである。以下は、小学校 5 年生のカリキュラムの一部である。

5 年生	Lesson 5	What do you like?	単元	年間
10月	【Hi friends!】	友だちにインタビューしよう	4/4	17/35
本時の目標	好きなものについて、積極的に尋ねたり答えたりしようとする。			
本時の表現	What do you like? What ~ do you like? Shapes, colors' vocabulary			
準備	教師 デジタルコンテンツ 教師用絵カード(色 形) ワークシート(Hi friends 付録)			
	児童 Hi, friends! 1 筆記用具 巻末児童用絵カード(P 45)			
時間	児童の活動		教師の活動(○担任、●ALT)	
Warm-up	1 挨拶をする。 ・全員で一斉に ・ALT の問い掛けに答える。		○Let's start.(begin) ●明るく児童全員に向かって「Hello」の声をかける。数人の児童に How are you? と問いかける。 ○必要に応じて児童の支援をする。	
5	2 P20 Let's Chant を行う。		○デジタルコンテンツを操作する。 「色」ページの「動物」ページを行う。	
Promises	サイレント E are e-e のルールを扱う。(参考ページ 20) ・ピクチャーカードで文字を見て発音をする。 ・ワークシート(文字を読む、書く)を行う。			
20				
Activity	4 P20 Let's Listen 3 を行う。 ・誌面の 8 種類の T シャツについて、ALT の問い掛けに答える。 ・音声教材を聞いて、さくらとたくの T シャツは何番か考える。		●誌面の 8 種類の T シャツについて何人かの児童に質問をする。 例 No.1 What color/shape does it have? Which T-shirt do you like? ○デジタルコンテンツを操作する。 ●さくらとたくの T シャツは何番か児童に尋ねる。	
30				
Main Activity	6 P21 Activity を行う。 ・最初に P21 の表の空欄に自分が友達に尋ねたい絵を一つ描く。 ・友達に「What ~ do you like?」を使ってインタビューをし、表に記入する。		●活動の説明をする。 例 First, draw one more picture in the blank on the page 21. Walk around the room, ask your friends "What ~ do you like?" and fill in the blanks. ○●活動のやり方をデモンストレーションする。 ○必ず一回は担任か ALT と会話をするように指示する。 ●何人かの児童に、表の中のひとりについて What-do you like? を用いて質問をする。 ○必要に応じて児童に補足説明をする。	
	・インタビューの後、表の中から友達を一人選びその子になりきって、ALT の質問に答える。他の子はそれが誰かを予想する。			
45	7 振り返りをする。		○振り返りカードに記入するように指示する。	
	8 挨拶をする。		○●一緒に挨拶をする。	

【資料 3】小学校 5 年生用カリキュラムの一部

これを見ると、文部科学省から配布されている教材、『Hi, friends!』に準拠したカリキュラムになっていることが分かる。現在、多くの学校でこの教材が使用されていることを考えると、この方向性は理解できる。しかし、内容は『Hi, friends!』のページごとの流れをそのまま掲載しただけのものになってしまっており、表現に聞き慣れたり、言い慣れたりする活動が不足している。聞き慣れや言い慣れの活動は、難易度等によってスモールステップを組んでいながら、様々なパターンで児童に取り組みさせることが重要である。楽しみながら活動に参加することで、児童は徐々に表現に慣れ、表現が自然に口から出てくるようになってくる。そして、単元最後のコミュニケーション活動では、学級の児童全員が自信を持って表現することができるようになる。思いをやり取りする中で、「伝わった」「相手の言いたいことがわかった」

と達成感や成功体験を味わったり、人と関わることの大切さや仲間の良さに気付いたりする体験が積み重なり、学習指導要領の目標にある、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことにつながっていく。

また、次頁にあるのが、中学校 1 年生のカリキュラムの一部である。磐田市内の中学校では、教科書として『New CROWN English Series』を使用していることから、現時点では Chapter Project のみの単元計画案を作成するにとどまっている。今後は、小学校と中学校の橋渡しとしての活動をどのように行っていくか、小学校外国語活動で体験した活動を、中学校ではどのように生かしていくか、といった内容を盛り込んでいく必

1年 Chapter 1 Project	
2/3時間	
目標 自己紹介文を完成させ、ペアで紹介し合うことができる。	
生徒の活動	教師の活動(○担任 ●ALT)
1 教科書 P.43 Step③のスピーチをCDで聴く。 ・わかったことを発表する。 ・もう一度スピーチを聞き、スピーチの最初、最後に言っているせりふを発表する。	○CDを流し、スピーチの内容やポイントとなるせりふを確認する。
2 スピーチを完成させ、教師に原稿のチェックをしてもらう。	○個々の原稿を添削する。
3 各自で暗唱に取り組む。	○個々に発音やイントネーションについて、アドバイスする。
4 ペアで自己紹介を行う。 ・聞き手を見て練習に取り組む。 ・お互いに良かった点と改善したい点を伝える。	○各ペアを回り、姿勢や視線、話し方などについて、具体的にアドバイスする。

要がある。この改訂作業を通して、小学校段階で育まれた「コミュニケーション能力の素地」を、どのようにして中学校でさらに「コミュニケーション能力の基礎」の育成につなげていけばよいか、具体的な方策を見出していく必要がある。

これらのことから、磐田市教育委員会の外国語／外国語活動担当者と連携し、(2)ア 研究の進め方で示したように、磐田市「英語」ガイドライン改訂作業に向けて、今後の道筋について確認した。そして、その第一段階として、本センターで作成したモデルカリキュラムを、教育委員

会を通して市内の全小・中学校に配布した。ただ配布しただけでは、活用されずに終わってしまうことが多いため、磐田市「英

【資料4】中学校1年生用カリキュラムの一部 語」ガイドラインに添った授業について構想する段階では、センターモデルカリキュラムも同時に参照し、指導を通して気付いたことをガイドラインに追記しながら活用してもらうようにすること、今後の磐田市「英語」授業づくり研修会では、センター指導主事がモデルカリキュラムを使いながら研修を行うこと、の二点を学校に伝えることを確認した。

(イ) 掛川市の現状と連携

掛川市では、保・幼・小・中学校が連携を強化し、共に子どもの教育に当たることを目指し、中学校区学園化に取り組んでいる。本市でも、外国語教育の充実を市の重要課題の一つに上げており、小・中学校の外国語（活動）の授業をよりよいものにしていくための取組がなされている。その取組の一つが、小中一貫カリキュラムである、『掛川スタンダード』の作成である。

この『掛川スタンダード』は、市内のALTが作成しているカリキュラムであり、カリキュラムの考え方、授業で用いる教材等についても併せて紹介されている。以下は、

5-28	Phonics cards V.3, What time is it? Numbers 1-60
5-29	Phonics cards V.3, What time do you get up?/Go to bed? Nun
5-30	Phonics cards V.3, What time do you eat breakfast/dinner? N
5-31	Phonics cards V.3, What time do you go to school/go home? I
5-32	Phonics cards V.3, What time do you take a bath/watch TV? Numbers 1-12, 10, 20, 30, 40, 50, 15, 45
5-33	Phonics cards V.3, What time do you ~? まとめ授業.

【資料5】小学校5年生用カリキュラム一覧表の一部

小学校5年生のカリキュラムの一覧表を一部拡大したものである。

『掛川スタンダード』は、文部科学省から配布された『Hi, friends!』を使用することを前提としていない。そのため、授業で用いるワークシ

ートや教材、ピクチャーカードに至るまで、全てこのカリキュラムとセットで盛り込まれている。また、年間の配列は前の単元で用いた表現に近いものを次の単元で用いるといった表現の類似性、発展性を第一に考慮した流れとなっている。例えば、第29週から第32週では、“What time do you ~?”という表現を用いる計画になっているが、これは、全単元で用いた“What time is it?”からの発展性を配慮したためである。そして、第29週から第32週まで毎週違う動詞句の表現を授業で扱い、まとめとなる第33週に

全ての表現を用いてコミュニケーションを行うという流れになっている。このように、4段階で新たな動詞句に触れるという流れは、一見すると児童の負担を小さくするための配慮のように見える。しかし、第29週から第33週までの間に約1か月の時間経過があることから、最初の週に触れた表現はすでに第33週には忘れてしまっている児童が多くいることが予想される。また、別の単元では、1対1の会話活動を行ってから、聞き慣れの活動であるキーワードゲームを行うなど、活動の難易度に対する配慮があまり見られない箇所も見られる。これは、カリキュラム作成に小学校教員（学級担任）が関わっていなかったことが大きな原因である。ALT主導でカリキュラムを作成したことにより、自他の良さに目を向けるなどの活動を通して、人との関わりを大切にしたり、異なるものへ寛容な態度をとったりするなどの学習指導要領で掲げられている「コミュニケーション能力の素地」を育成する視点に欠けてしまう。そして、コミュニケーションのツールであるはずの、「外国語としての英語の習得」に焦点が置かれてしまっていることが、今後の改訂の課題であると考ええる。

そこで、掛川市教育委員会の外国語（活動）担当者と連携し、(2)ア 研究の進め方で示したように、掛川スタンダード改訂作業に向けて、今後の道筋について検討した。掛川市とは、平成25年度から連携し始めたところであるため、具体的な取組については、今後も検討していくが、中学校段階のカリキュラムに関してはいまだ作成されていないため、ALT、小中学校外国語（活動）担当教員が関わって、改訂・作成作業を進めていく必要があることを提案した。また、磐田市と同様に、本センターで作成したモデルカリキュラムを、市内の全小・中学校に配布を依頼し、小学校外国語活動で大切にすべきことを押さえた上でのよりよい授業づくりに取り組んでもらうように確認した。

ウ 市教育委員会主催研修会における、小中学校教員を対象とした授業づくり研修の実施

磐田市では年間2回、磐田市「英語」授業づくり研修会を行っており、平成24年度第2回から本センター指導主事がこの研修会に講師として参加している。研修会に参加するに当たって、磐田市教育委員会の外国語／外国語活動担当者と情報交換を行い、市内の外国語（活動）の授業に関して、次のような課題があるということを確認した。

- ▲ 小学校外国語活動では、教材である『Hi, friends!』を順番どおりに行うだけで、コミュニケーション活動としての在り方や、外国語活動を通して育てたい子どもの姿が見えていない授業が多く見られる。自分の思いを伝えられた達成感が味わえるような単元計画がきちんと立てられていない授業も多い。
- ▲ 中学校外国語では、教科書をこなすことが中心となっている授業が多く見られる。小学校で人と関わることに魅力を感じている子どもたちを、中学校でどのように継続的に育てていくかという視点がないため、文法を習得させることが目標となっている授業が多い。コミュニケーション活動では、伝えたい思いなど、メッセージの価値を大切にできていない活動が多い。

そこで、これらの課題を解決するために、研修目的と授業づくり研修会で行う講義内容を明確にした上で、次頁のとおり研修会を実施した。

年度・回 日時 会場	○目 的 ・市教育委員会からの 依頼内容	研修内容	対象 参加人数
H24 第 2 回 H25. 2 . 1 磐田市役所	○ 小学校外国語活動を踏まえて、中学校外国語科における言語活動を充実させるための視点を持つ。 ・ コミュニケーション活動の在り方等、教科の本質に迫るための、言語活動の在り方について講義	・ 磐田第一中学校教諭授業のリフレクション（ビデオ視聴）による事後研修 ・ 指導主事講義 「外国語における小中の連携と中学校における言語活動の充実」	市内全小・中学校の外国語（活動）担当者各校 1 名悉皆 計 40 人
H25 第 1 回 H25.10.29 磐田南部 中学校	○ 小学校の外国語活動の学習経験を踏まえた中学校外国語科の授業の充実を図る ・ 中学校 1 年生の外国語科の公開授業を通して、小学校外国語活動との接続や魅力ある言語活動を展開する外国語の授業について講義	・ 1 年生授業参観 「Chapter2 Project ○○さんを紹介しよう」 ・ 指導主事講義 「中学校外国語科における授業改善と小中の連携の在り方」	市内全小・中学校の外国語（活動）担当者各校 1 名悉皆 計 41 人
H25 第 2 回 H26. 1 .16 磐田南 小学校	○ 外国語活動のねらいを踏まえた単元構想と授業展開、中学校との接続について理解を深める。 ・ 外国語活動のねらいを踏まえた単元構想と授業展開、中学校との接続について講義	・ 6 年生授業参観 「夢宣言をしよう(L8 What do you want to be?)」 ・ 指導主事講義 「小学校外国語活動における付けたい力を押さえた単元構想と授業展開～小中連携の在り方～」	市内全小・中学校の外国語（活動）担当者各校 1 名悉皆 計 40 人

また掛川市では、市主催研修会を希望参加制で実施しており、平成 25 年度より本センター指導主事が講師として研修に参加している。掛川市についても、担当者と情報交換を行い、以下の課題を確認した。

- ▲ 小学校外国語活動では、『掛川スタンダード』が『Hi, friends!』に準拠したものではないため、学級担任の先生方があまりこのカリキュラムを使用していない。ALT の中でも、掛川スタンダードの活用方法について不安を感じている方がいる。そのため、外国語活動に対する取組の差が小学校によって大きくなってしまっている。
- ▲ 中学校外国語では、単元の最後に付けたい力や、コミュニケーション活動で大切にしたいことの押さえが甘く、活動はたくさんあるが、文法を習得させることが目標となっている授業が見られる。

これらを踏まえた上で、次頁のように研修会を実施した。

年度・回 日時 会場	○目 的 ・市教育委員会からの 依頼内容	研修内容	対象 参加人数
H25 第 1 回 H25. 1 .24 掛川市 教育委員会	○今後の外国語教育の方向性を理解したうえで、小・中学校における外国語(活動)の充実を図る。 ・教科の本質に迫るための、言語活動の在り方、小中一貫カリキュラムについて、ワークショップと講義	・指導主事講義 「これからの外国語教育と、外国語における小中の連携の在り方」	希望制 市内全小・中学校の外国語(活動)担当者 計 34 人

いずれの市においても、それぞれが作成しているカリキュラムから見られる課題と、授業の中で見られる課題の間に関連がある。つまり、磐田市については、授業づくりに対する担当教員の意識が、そのままカリキュラムの形で現れてしまっている。また、掛川市については、カリキュラムが市内のどの学校でも共有できるものになり得ていないために、小学校で外国語活動への取組の差を生じる結果となっているのである。これらのことから、教科の本質に迫るための研修会を充実させることと、市で作成しているカリキュラムをよりよいものへと改訂し、周知していくことは重要であると感じた。

そこで、それぞれの研修会では、教科(領域)で目指す目標を再確認した上で、「指針」の追記として作成した、『小学校外国語活動モデルカリキュラム』を用いながら、単元計画の構想の仕方や、気付きの場面、聞き慣れや言い慣れの場面、コミュニケーション活動の在り方について講義を行った。中学校外国語に関しても、「指針」の小中関連表を用いながら、公開授業で参観した小学校外国語活動の単元と中学校の教科書の関連を確認し、中学校の授業でどのような配慮が必要であるか、また、どのような工夫が考えられるかについて研修を行った。

どちらの市に関しても、外国語(活動)に関わる全ての教員が参加しているわけではないため、研修を通して身に付けた授業に対する見方、考え方を今後、カリキュラムの形で示していきたい。それぞれの小・中学校の児童生徒の実態に応じてアレンジは必要ではあるが、必要最低限の見方、考え方が見えるものにしていきたいと考える。

(4) 研究のまとめ

ア 研究から見えてきたこと

本研究は、平成 25 年度末の時点では、ア 研究の進め方の(ウ)までとなっているが、磐田市教育委員会とは、(I) 市教育委員会におけるカリキュラム改訂作業への参加と助言を平成 26 年度当初に実施することが決まっている。掛川市については、これまでカリキュラム作成に関わってこなかった小・中学校外国語(活動)担当教員の参加を提案しているため、現在計画を調整中である。改訂を通しての本格的な授業改革と結果の分析は、平成 26 年度からになるが、これまで、市教育委員会と連携しながら授業づくりの研修を行ってきたことで、外国語(活動)を担当している教員の意識は確実に変わり始めている。

磐田市

A そう思う B ややそう思う C あまりそう思わない D そう思わない

アンケート実施人数 119 人(3 回合計)	A	B	C	D
Q 1 支援内容や講義は適切であった	82%	18%	1%	0%

Q 2 これからの実践に役立つ内容だった	80%	18%	3%	0%
----------------------	-----	-----	----	----

磐田市での研修会では、学習指導【資料6】研修会終了後の意識調査（磐田市）
『シジョン』をどのように捉えるべきか」というところからまずスタートし、授業に対する
見方・考え方の改革を図った。その結果、授業の中で行う活動の質を見直していく必要性
を感じた教員が多く見られた。以下は、感想の一部である。

- ・小学校外国語活動を行っていますが、ただのゲームで終わってしまうことも多かったと改めて反省しています。自分の思いと相手の思いのやりとりが大切だと分かり、今後は本物のコミュニケーション活動を取り入れていきたいです。
- ・小学校の外国語活動を行う上で、何を大切にしたらよいのか理解することができました。特に、「コミュニケーション活動で大切にしたいこと」の話が分かりやすかったです。
- ・コミュニケーションは大切と分かっていつつ、どんなコミュニケーションなのか、その質についてぼんやりしていたことが、明らかになってきました。
- ・「思いを伝えるための英語」という言葉を心にとめて実践していきたいと思います。
- ・日ごろの忙しさから単調な授業のみで、行ってもせいぜい伝達ニーズのあるコミュニケーション活動ぐらいまでしか行っていない自分を反省しました。これからはもっと工夫して生徒の思いを伝え合う活動を行っていけるようにしたいと決意しました。
- ・授業に生かせるもの、カリキュラム作りに生かせる内容を勉強できました。

掛川市

A そう思う B ややそう思う C あまりそう思わない D そう思わない

アンケート実施人数 19人	A	B	C	D
Q 1 支援内容や講義は適切であった	90%	10%	0%	0%
Q 2 これからの実践に役立つ内容だった	90%	10%	0%	0%

【資料7】研修会終了後の意識調査（掛川市）

掛川市では、教科の目標から、授業づくりでは目指す子どもの姿を明確にした上で、単元計画を明確に持つことが重要であることを確認した。また、『掛川スタンダード』のこれからのあるべき姿についても道筋を示すことで、参加者の小中一貫カリキュラムに対する意識は高まったと感じられた。以下は、感想の一部である。

- ・今まで疑問を抱いていた点を解決することができ、大変勉強になりました。目指す子どもの姿を考える視点をより大事にしたいと思います。
- ・普段行っている授業について考え直し、振り返る機会になりました。子どもたちの実態に合わせながら、何を身に付けさせたいかを考えながら単元構想をしていきたいと思いました。
- ・小学校では、どのような活動を行っているか理解していなかったので勉強になりました。（中略）小中のつながりが重要と分かったので、もっと小学校の先生と話す機会を作らないといけないと思いました。
- ・『掛川スタンダード』もいずれは教科化に向け内容を変化していく必要があると思うのですが、今のままの『掛川スタンダード』を広めていくことに少々不安もありました。また『掛川スタンダード』を使った授業の研修をお願いしたいです。
- ・小学校の現場では、『掛川スタンダード』を御存知の先生もまだ少ないのが現状です。もっと中学校区で集まり、話し合う機会が必要だと痛感しました。
- ・外国語教育の今後に不安がありましたが、今、外国語を教える私たちにとって何が大切で必要なかが分かり、身の引き締まる思いです。私自身、子どもと共に学びながらがんばっていききたいと思います。

以上の結果から、外国語（活動）の授業において大切なことは何なのか、研修に参加していただいた教員に関しては、理解を深めており、来年度以降のカリキュラム改訂作業を行う素地ができたと感じている。

イ 今後の課題

市教育委員会との連携では、短期間の改訂が難しく、カリキュラムの改訂作業一つとっても、作業開始まで1年の時間を要した。しかし現在、外国語教育をめぐる国の改革は、急速に動きつつある。平成28年度には新学習指導要領が示され、同時に小学校外国語活動の新教材が配布されることが予定されている。その3年後の平成30年度には、新学習指導要領先行実施に伴い、対応教材が新たに配布され、完全実施の平成32年度には小学校の英語教科化に伴って教科書が配布される。

このように、今後の6年間の中でめまぐるしく変化していく外国語教育にあっては、せっかく作成したカリキュラムも、物によってはすぐに陳腐化してしまうことが予想される。つまり、単に教材に示されている学習内容を順番に並べ、あたかもそれを順にこなせば目標が達成されるかのようなカリキュラムであってはならないということである。

すでに、新学習指導要領の外国語／外国語活動の目標案は公表されている。それを見る限り、これまでの学習指導要領に掲げられていた目標と比べ、その達成させるべき時期については早期化しているが、内容については一貫して「コミュニケーション能力」の育成を目指している。つまり、学習内容は教材や教科書が変わるごとに変化しても、人と関わることを大切にする子どもを育成するという目標の一貫性、そして、価値ある意味のやり取りを行う中で、相手に思いが伝わった喜びや達成感を感じることができるようにするという、指導方法の継続性は不変なのである。

以上のことから、来年度のカリキュラム改訂作業においては、授業の中で「何をやるか」はもちろん示さなければならないが、それ以上に、「どうやるか」を具体的に示していく必要があり、教師が授業を作る上で配慮すべきこと、工夫すべきこと、そして、どんな目的を持って活動を設定したらよいかなど、学習内容が変化しても、このカリキュラムを参考にすれば目指す授業像を描くことができるというものにしていかなければならないと考える。そのためにも、今後も外国語教育に関する研究をさらに進め、できるだけ多くの教員の授業づくりに資することができるよう、研鑽をしていきたいと考える。

6 音楽科

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 音楽」(以下「指針」)を用いて、「〔共通事項〕を手掛かりとした学習指導の在り方」を理解することで、授業改善を図ることができる。

(2) 研究の方法

ア 研究の進め方

(ア) 悉皆研修、希望研修、学校等支援研修における活用及び活用方法の提案

5年経験者研修において、授業支援訪問とも関連させ、学習指導案と授業実践の両面から関わっていく。

(イ) 大学における活用方法の検討及び活用

静岡大学における講義や演習等で「指針」を活用し、教員志望の学生の授業づくりに対する理解を深める。また、活用した結果から、さらに「指針」で修正・補充していく点を探る。

イ 検証の方法

(ア) 対象

5年経験者、大学生

(イ) 手順

a 5年経験者における研究

日 程	研究の対象となる活動	主な内容
平成 25 年 5 月 14 日	全体研修	・課題レポートより、今までの音楽科の授業実践を振り返る。 ・「指針」を基に〔共通事項〕を手掛かりとした「題材構想」の立案について講義する。 ・「指針」の実践事例を参考にして、題材構想を作成する。
平成 25 年 5 月 ～平成 25 年 9 月	授業実践	・学習指導要領解説、「指針」を基に、「付けたい力」を明確にして、指導案を作成する。 ・指導主事が授業を参観し、事後研修で指導・助言を行うことで、授業実践における成果と課題を明確にする。
平成 25 年 10 月 1 日	全体研修	・授業実践の成果と課題を共有する。 ・「指針」の実践事例を基にして、〔共通事項〕を手掛かりとした「題材の評価規準」を作成する。
平成 25 年 10 月 ～平成 26 年 2 月	授業実践	・学習指導要領解説、「指針」を基に、「付けたい力」を明確にして、指導案を作成する。 ・指導主事が授業を参観し、事後研修で指導・助言を行うことで、授業実践における成果と課題を明確にする。

b 大学の講義における「指針」の活用

大学の授業において「指針」を活用し、教員を志望する学生の授業づくりに対する知識や理解を深める。また、より求められている情報や資料等について検討し、修正・補充に生かす。

(3) 研究の内容

ア 研究の経過 ～「5年経験者研修」における研究～

(ア) 全体研修

a 音楽科授業の実践の振り返り

課題レポートを基に、「授業実践で大切にしていること」「授業実践で課題として
いること・悩んでいること」について、グループ内で発表し合い、協議した。主な
内容について、以下に示す。

<大切にしていること>

- ・子どもたちが「音楽が楽しい」と思えるような活動の工夫
- ・子どもたちの興味・関心・意欲を高めるような工夫
- ・子ども同士が関わり合いながら学べる工夫
- ・はじめのある授業態度
- ・目当てを持って、達成感を味わえる授業

<課題としてしていること・悩んでいること>

- ・子どもたちの見取りや正しく評価する方法
- ・〔共通事項〕アの内容を、表現や鑑賞の活動の中でどのように扱っていったらよいのか。
- ・音楽の専門的知識の不足や技能面の指導
- ・教師主導ではなく、子どもの思いから生まれる活動にするにはどうしたらよいのか。

全体として、子どもたちが意欲をもち「音楽が楽しい」と感じられる授業や子どもたちが関わり合い、互いに高め合って学べる授業づくりを目指し、日々努力していることがうかがえた。

しかし、小学校の研修員は、音楽を専門として学んできていない研修員がほとんどである。全般的に音楽の専門的知識の不足や音楽科の授業づくりに対する理解不足からくる指導への不安が、課題として多く挙げられた。

b 「指針」の実践事例を参考にしての題材構想づくり(講義・演習)

前述のような研修員の状況も踏まえ、「指針」を基に、〔共通事項〕を手掛かりとした「題材構想」の立案について、講義・演習を行った。

<講義より一部抜粋>

音楽科の目指す授業

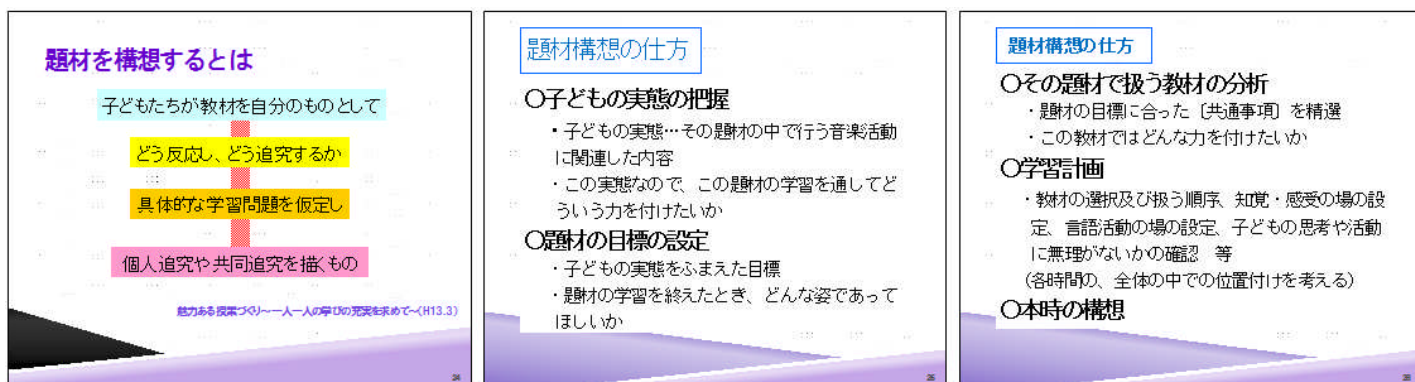
- ▶学習指導要領に沿ったものとする
- ▶題材構想をきちんと持つ
- ▶授業づくり指針、「よりよい自分をつくっていくために」の視点を生かす

内容の全体構成(小・中学校)

A 表現領域			B 鑑賞領域
(1) 歌唱	(2) 器楽	(3) 音楽づくり・創作	
共通事項			

バランスよく行うことが大事!!

〔共通事項〕とは？



講義の中で、「指針」の「参考事例の見方について」のページ（p.24～p.27）を紹介し、「題材構想の仕方」のスライドと対応させながら、学年の目標、学年の指導事項、題材で身に付けさせたい力を押さえた上で、「共通事項」を設定し、題材構想を作成することを伝えた。

また、指導事項を押さえる際「指針」の「学習指導要領における内容の系統」のページ（p.19～p.22）を紹介し、学年間のつながりを意識することも伝えた。その後、「指針」を参考にし、題材構想づくりの演習を行った。研修員は、自分の担当する学年、領域の事例を参考にし、演習シートに書き込んでいった。（資料１ 参照）

資料 1

参考事例の見方について【歌唱・器楽・鑑賞】

第3学年 A 表現 (1) 歌唱

題材名「曲の山を工夫しよう」

【第3学年及び第4学年の目標】

- (1) 進んで音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。
- (2) 基礎的な表現の能力を伸ばし、音楽表現の楽しさを感じ取るようにする。
- (3) 様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を育てる。

【第3学年及び第4学年の歌唱の指導事項】

- ア 範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌うこと。
イ 歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。
ウ 呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない声で歌うこと。
エ 互いの歌声や副次的な旋律、伴奏などに注意して歌うこと。

【身に付けさせたい力】

本題材で中心となる指導事項 → ア、イ
・楽譜に対する関心を高め、ハ長調の視唱に慣れ親しみ、旋律の表現を豊かにする。
・歌詞の内容や旋律の抑揚から雄大な曲想を感じ取る。

当該学年（ここでは小学校3年）で取り扱うことになっている「歌唱共通教材」です。

学習指導要領 第2「各学年の目標及び内容」のうち、ここでは第3学年及び第4学年の「目標」です。

学習指導要領 第2「各学年の目標及び内容」のうち、ここでは第3学年及び第4学年の歌唱の「内容」です。

題材全体を通して児童生徒に「確実に身に付けてほしい資質や能力」と中心となる「指導事項」です。

平成25年度 5年経験者研修 演習：題材構想づくり	
題材構想	小学校
メ モ	中学校
題材名	曲想を味わおう
取り扱う教材名	だれかが口笛ふいた カリマンジャロ
題材の目標（身に付けさせたい力）	

・学習指導要領＝指導事項と関連させる。
・題材全体を通して身に付けてほしい資質や能力を書く。

・学習指導要領にある指導事項につながる力（身に付けたい力）を子どもたちに図るための題材の価値を記す。
・「共通事項」に触れる。
等

<全体研修 のアンケートより>

- ・身に付けたい力をはっきりとさせて、題材全体を構成していくことは分かったものの、「共通事項」の取り扱いを考えると、悩むところがたくさんあった。これから、「授業づくり指針」を読み、理解していきたいと思う。
- ・「共通事項」に気を付けながら、題材の研究をきちんと行う必要性を感じた。
- ・題材計画を立てる上で、学習指導要領の指導事項をきちんと確認し、「共通事項」を明確にすることが大切であると感じた。
- ・題材構想、題材計画を立てることで、本時の授業の目標が見えてくるのだと分かった。指導案づくりでは、「授業づくり指針」を見て、「共通事項」を意識するようにしたい。

c 全体研修 についての考察

- ・「指針」を用いての演習は、題材構想における〔共通事項〕の意義・在り方について、研修員に考えさせる場となった。専門として学んできた教員はもちろんであるが、そうでない教員にとって「指針」は、教科の特性を生かしより効果的な題材構想を立てるために、大変有効なものになったことがうかがえる。
- ・学習指導要領にある指導事項の押さえを確かにするためには、「指針」にある「内容の系統」が大変役立つことに改めて気付く研修員もあった。これは、子どもたちに対して、付けたい力を保障していくことにつながると考える。

(1) 全体研修

授業実践 の授業支援訪問を行った中で感じた顕著な点は、次のとおりであった。

< 価値付け >

- ・学習指導要領の改訂の要点を意識し、言語活動を取り入れようと努力していた。
- ・学習指導要領の指導事項を意識し、教師の願いと絡ませて、題材を構想していた。
- ・題材で押さえる〔共通事項〕について、意識していた。
- ・本題材に至るまでの子どもの実態が書かれている。

< 課題 >

- ・題材を貫く〔共通事項〕ア（音楽を形づくっている要素）の数が多すぎる。
- ・題材で押さえる指導事項、そして教材に合った〔共通事項〕を設定したい。
- ・評価規準の書き方、評価の理解が今一步である。
- ・子どもの思い、子どもの思考に沿った題材構想を立てたい。

これを受け、全体研修 では、「指針」を基に、〔共通事項〕を手掛かりとした「題材の評価規準」について、講義・演習を行った。

a 「指針」の実践事例を参考にしたの、「題材の評価規準」づくり（講義・演習）

< 講義より一部抜粋 >

 1 学習評価の基本的な考え方 2 評価規準の設定 3 評価方法等の工夫改善	 1 学習評価の基本的な考え方 新学習指導要領の目にある学習評価 ○ 「生きる力」の育成 ○ 子ども一人一人の資質や能力のよき確かな育成 ・学習指導要領の目標に照らしてその実現状況を見る評価を重視し、実施し、一人一人の進捗の状況、教科の目標の実現状況を把握し、指導の改善を生かす ・学習指導要領に示す内容が確身に身に付いたかどうかの評価を行う	 2 評価規準の設定 評価の基となる資料とは… ・教科の目標だけでなく、領域や内容項目にそった指導のねらいを明確に ・子どもがどのような状態になっているか、具体的に想定 ↓ 評価規準
 評価規準の設定 ○ 学習状況を判断する際の目安が明確になり、指導と評価の適確な実施につながる。 ○ 学習評価の工夫改善を進めるに当たり、学習評価をその後の指導の改善に生かす。 (学習指導の過程や学習の成果を、総体的・総合的に把握する) ○ 年間指導計画との関連 評価の時期や方法を観点ごとに整理する → 評価すべき点の見過としないように → 必要以上に評価機会を設けないように 定期的 定期的	3 評価方法等の工夫改善 < 評価方法 > 観察、子どもとの対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接 etc. + 自己評価・相互評価 多様な評価方法も、多様な評価を しなさい。 評価に迷われると、思いやりに十分な指導を考えた い！！	< 評価時期等の工夫 > ・授業改善のための評価 → 日常随時実施 ・指導後の子どもの状況の評価 → 題材等のある程度長い区切りの中で設定 ・「関心・意欲・態度」 → 表面的な状況のみで着目することのないよう、長い区切りの中で適切に設定 年間指導計画作成時 各教科において観点別学習状況の区別に係る最適な時期や方法を整理

その後、授業実践 で行う予定の授業についての「題材の評価規準づくり」の演習を行った。(資料2 参照)

○ 曲の山（一番盛り上がるところ）を見付け、表現を工夫して歌う。 旋律
○ 旋律線を描いたり、旋律の音の高さを手の動きで表したりして、曲の山 強弱

「評価規準の作成のための参考資料」（平成22年国立教育政策研究所教育課程センター）の【評価規準の設定例】を参考に、中心となる指導事項に対応した【評価規準例】を示しています。※【学習活動例】に示したような学習活動を行った場合

評価規準から設定した学習目標、学習課題及び学習活動が見えてくること（整合性）が重要です。

【評価規準例】

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
・ 他者を聴いたり、伴奏の楽器を見たりして歌う学習活動に取り組もうとしている。	指導事項アの評価規準例	・ 他者を聴いたり、伴奏の楽器を見たりして歌う学習活動に取り組もうとしている。
・ 歌詞の内容や曲想にふさわし、旋律、リズム、強弱を臆き取り、その表現を工夫し、思いや感情を生かして歌う学習活動に取り組もうとしている。	指導事項イの評価規準例	・ 「ふじ山」の歌詞の内容や曲想にふさわしい表現をもって歌う学習活動に取り組もうとしている。

【身に付けさせたい力】の本題材で中心となる指導事項に即して評価規準例を示しています。

ここでは歌唱の指導事項がアとイなので、指導事項アに対応する「音楽表現の創意工夫」の評価規準例が参考資料に設定されていないため、上の部分が空白になっています。この場合、指導事項アの評価の観点は「音楽への関心・意欲・態度」と「音楽表現の技能」の二つの観点で評価することになります。指導事項イの評価の観点は三つの観点で評価するということを示しています。

ようにしていきます。

「指針」を活用しての演習

- ・評価は、児童の実態を把握し、教師が指導の改善に役立てることを意識したい。
- ・評価規準を明確にする活動は、今までやってこなかったので、大変勉強になった。
- ・題材構想においての評価規準設定例が「指針」にあることで、今後活用したい。
- ・「指針」をもとに評価規準の書き方を実際に演習したことにより、前よりも理解が深まった。
- ・付けたい力を明確にして、評価規準を考えていくことが大切であると知った。どの活動でどの〔共通事項〕を考えながら指導に生かしていきたい。
- ・付けたい力を意識して、〔共通事項〕を押さえた授業を目指したい。
- ・いつも悩んでいる評価の方法、目標からずれない評価の仕方について教えていただき、とても勉強になった。
- ・題材の目標、そして、〔共通事項〕等を意識しながら、評価規準を設定していくことの大切さが、「指針」を利用しての講義、演習を通して、改めてよく分かった。

- 55-

(り) 授業実践 で、授業実践 から顕著な変容が見られた授業実践

(S 小学校U教諭の実践から)

a 「題材構想」の変容

授業実践

小学校2年生 音楽「はくにとつて リズムをうとう」

(教材「いるかはざんぶらこ」)

〔共通事項〕リズム、拍の流れ、フレーズ、旋律

【題材構想（抜粋）】

この題材はリズムに重点を置いている。主に学習指導要領では、「A 表現（1）のイ 歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと。」、「（2）のア 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。」、「音楽づくり（3）のイ 音を音楽にしていこうと楽しむながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。」に関連している。

「いるかはざんぶらこ」は、いるかが泳いだり、ばったが跳んだりする様子を扱った楽しい歌詞である。子どもたちにとって親しみやすい内容の歌詞であり、軽快な速度の曲である。最初に4分休符が置かれ、「ウン」「タ」「タ」「タ」「タ」で始まる2小節単位のフレーズで構成されていて、歌ったりリズムを打ったりしながら、3拍子の特徴を感じ取りやすい。のリズムの上（「ウン」「タン」「タン」）と下（「タン」「ウン」「ウン」）のリズムを分担して手拍子や打楽器で打つ活動を通して、3拍子の拍の流れにのってリズムを打つことができるようにしていく。

では、学習指導要領の指導事項は押さえているが、それが、教材や〔共通事項〕とどう関連し、子どもの思考とどうつながっていくかについては書かれていない。また、主に技能的な指導の面にしか触れていない。

では、教材の価値の分析が、学習指導要領の指導事項、つまり、身に付けさせたい力に照らし、具体的になっている。それに伴い、明確になった〔共通事項〕と、子どもの思い、教師の願いとを絡ませながら、題材構想している。これは、全体研修 で「指針」の事例を参考にしながら、「評価」の研修を行ったことにより、評価を意識するようになったことにもよると思われる。

授業実践

小学校2年生 音楽「ようすをおもいうかべよう」

(教材「人形のゆめと目ざめ」「小ぎつね」「タやけこやけ」)

〔共通事項〕音色、旋律、強弱、速度

【題材構想（抜粋）】

本単元における歌唱表現の学習は、歌詞が表す情景や場面を想像し、楽曲全体のイメージを膨らませながら表現を工夫し、どのように歌うかについて自分の思いをもって歌うことがねらいである。これは、学習指導要領の指導事項の「A 表現（1）のイ 歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと。」と関連している。

本時の教材曲である「タやけこやけ」は、歌詞がタやけの場面をわかりやすく描写しており、お寺の鐘の音や家路につく子どもの様子、巣に帰るからすの様子など、児童が想像力を膨らませて情景を捉えやすい。また、1番から2番への時間の経過も捉えやすく、対比して表現しやすい教材である。「タやけこやけ」の学習では、歌詞が表している、1番の音のにぎやかさと2番の音の静けさの対比から情景の変化を捉え、音楽を形づくっている要素と結び付けて表現の工夫をすることによって、「こういうふうに歌いたい」という自分の考えや願いを具体的に持って歌えるようになってほしいと願っている。そのために、本時では、教科書の挿絵を見たり、情景を表す写真を見たり、歌詞を朗読したりしながら、「その情景からどんな音が聞こえてくるか」と投げ掛け、音に注目して、歌詞を読み込んでいくようにしていく。子どもたちは、聞こえてくるいろいろな音を、思い思いに発表するであろう。そこで、「音楽のまほうをかけて、自分たちの『タやけこやけ』をつくろう」という主発問を投げ掛ける。「音楽のまほう」、つまり、音楽を形づくっている要素の中から、強弱や音色、速度などを工夫のポイントとして挙げ、具体的にどのような工夫をしたいのかを、子どもたちが思い描いている情景と結び付けて考えていく。そして、考えた表現を、要素ごと色別にして付箋に書き込み、グループごとに拡大歌詞に貼り付けていくようにしたい。...

b「題材の評価規準」の変容

授業実践

4 題材の目標

- ・リズム譜に親しみ、拍子を感じ取りながら、簡単なリズムを演奏することができるようにする。
- ・リズム伴奏にのって、歌ったり楽器を演奏したりすることができるようにする。

ア リズム譜に興味をもって、歌ったりリズムを打ったりする学習に楽しんで取り組もうとしている。

(音楽への関心・意欲・態度)

イ 範唱やリズム伴奏などから拍子の感じを感じ取って、歌い方や演奏の仕方を工夫している。

(音楽表現の創意工夫)

ウ リズム譜を見て、拍の流れにのりながら楽器を演奏したり、音楽の仕組みを生かしながら、簡単なリズムで音楽をつくり出している。

(音楽表現の技能)

では、題材の目標に、題材の評価規準が混在しており、評価規準は漠然としている。

では、学習指導要領の指導事項に基づき、題材で扱う教材ごとの具体的な評価規準が設定された。題材を貫く〔共通事項〕も焦点化された。つまり、指導と評価の一体化が図られ、教材ごとの教師の指導の押さえ、子どもたちの学びの視点が明確になった。

実際の授業でも、共通の視点に基づいて自分の思いを喜々として仲間と伝え合い、実際に音で試行錯誤しながら、表現の工夫に主体的に取り組む子どもたちの姿が見られた。

授業実践

5 題材の評価規準

共通事項 (音色 旋律 速度 強弱)

音楽への関心・意欲態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
「人形のゆめと目ざめ」の楽曲全体にわたる気分を感じ取って聴く学習に進んで取り組もうとしている。 「小ぎつね」の気持ちを想像し、思いをもって歌う学習に進んで取り組もうとしている。 「タヤケコヤケ」の歌詞の表す情景を想像し、思いをもって学習に進んで取り組もうとしている。	問いと答えを聴き取り、それらの動きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら「小ぎつね」の気持ちを想像して歌い方を工夫し、どのように歌うかについて自分の考えや願いをもっている。 <u>音色、旋律、速度、強弱</u>を聴き取り、「タヤケコヤケ」の表す情景を想像しながら、歌い方を工夫し、どのように歌うかについて自分の考えや願いをもっている。	「小ぎつね」の気持ちや楽曲の気分にあった表現で歌っている。 声の出し方に気を付けて「タヤケコヤケ」の歌詞の表す情景にあった表現で歌っている。	<u>速度や強弱</u>などに気を付けて「人形のゆめと目ざめ」の楽曲全体にわたる気分を感じ取ったり、場面を想像豊かに思い浮かべたりしながら聴いている。



イ 研究の経過 ～大学の講義での「指針」活用における研究～

静岡大学教育学部北山敦康教授に、「音楽科教育法」(常葉大学短期大学部専攻科(音楽)「音楽科教育研究」兼任)を受講している学生たちの、学習指導案作成のための講義において、「指針」を活用していただいた。

以下に、主に取り上げていただいた五つの指針の項目に対しての教授の思いや学んだ学生たちの姿などをまとめた。

(ア) 学習指導要領(音楽科)の変遷(p.9～10)

学習指導要領の精神、意義、価値を学生たちに理解させる上で、大変役立った。学習指導要領の改訂で、学力の3要素が重視される中、音楽科の学習における基礎的、基本的内容の総体である学習指導要領の歴史を知る意義は大きい。学習指導要領の歴史の中で、今こそ「基礎」の教育の価値が見直されるべきであり、音楽科における基礎学力が子どもたちの成長に欠かせないことを学生たちが自覚できた。

(イ) 学習指導要領の音楽科の目標・学年の目標・指導内容の系統(p.18～22)

小学校、中学校及び高等学校での音楽科の学習全体を見通して、それぞれの校種や学年での学習内容がそれ以前の学習内容とどのように関連するかを、一覧にして見やすく示してあるので、系統性について大変理解しやすいものとなっていた。

(ウ) ハンドサインと移動ド唱法(p.85～86)

学生たちは、楽器の演奏に関しては、かなり高いレベルでの読譜ができるが、これは、ソルフェージュに裏付けられたものではない。小・中学校の段階で、楽器の音に頼って読譜をし、自分の身体で音をつくるという習慣が少なかったためと考えられる。移動ド唱法の最大のメリットは、「相対的な音感の獲得を通して良い耳をつくる」ことである。つまり、ある音を音楽的文脈の中で関係性をもって感じ取ることでできる能力を育成できることである。ハンドサインは、ドレミのシラブルとともに歌いながら用いられる。ハンドサインと「移動ド唱法」を学ぶことによって、そのプロセスの中で「読譜力」の獲得ができる。「指針」の具体的な図を用いての解説は、学生たちにとって大変有効なものとなった。「自分が小学生の時にもこうして歌いたかった。」と感想を漏らすことも少なくなかった。楽しい方法で学べるからこそが、楽譜を読めるようになりたいと思う心につながっている。学習指導要領の実施における小学校の読譜指導が、まず「移動ド唱法」の「ドレミで歌う」ことから行われることが望ましい。将来、教員となる学生たちにとって踏まえておきたい事柄である。

* 注釈 ソルフェージュ = 読譜唱法力、聴音能力などの音楽の基礎的な力
シラブル = 音節 音のまとまり

(I) 用語解説(p.118～121)

学習指導要領解説 音楽編に掲載されている用語を抜粋して示しているが、〔共通事項〕をはじめ、用語や文言の解説がわかりやすくまとめているので、学生からは好評である。

(オ) 授業づくり規準(音楽科)(p.122～123)

学習指導案作成時には、学習指導力と教科指導力におけるPDCAサイクルとその観点について意識化し、常にチームで検証する仕組みを講じている。授業づくりにおいて、十分でない学生にとっては、作成のための観点を示すものであり、どんな場においても、

この規準に立ち返る姿勢を心掛けることになった。初任者として教壇に立った時にも大切にしたいという願いにもつながっている。

今後に向けては、学習指導案を作成する際、学生は「教材」のみを意識してしまい、「題材」というまとまりとして捉えられない傾向があるので、「年間指導計画例」を「指針」に補充したい。

ウ 研究の経過 ～今後のさらなる「指針」活用に向けて～

教科等指導リーダー研修会での年間指導計画づくり（講義・演習）

イの「大学の講義での『指針』活用における研究」を通してだけでなく、各学校への訪問指導で学習指導案について指導をする際、多くの先生方が年間指導計画の中で題材を意識できる力をもつ必要性を強く感じた。そこで、教科等指導リーダー研修会で、各地区の核となる先生方に年間指導計画作成の講義を行い、それに基づいて自校の年間指導計画を見直し、修正及び作成をしていただいた。

以下に示した事例を参考に、「指針」に「年間指導計画例」の補充をしていきたいと考えている。

<「年間指導計画」の講義より一部抜粋>

平成25年度
第2回教科等指導リーダー研修会
～年間指導計画の在り方～

音楽科

平成26年1月28日（火）
福岡県立総合教育センター

2 年間指導計画作成の視点

音楽科の内容
各目標にそってバリエーションを工夫しなくてはならない。

A 表現領域			B 鑑賞領域
(1) 歌唱	(2) 器楽	(3) 音楽づくり・創作	
共通事項			

1 年間指導計画の意義

こんな授業ばかりだと・・・

- 歌唱領域を扱う題材が多かったり、創作活動が少なかったりする。
- 教材曲の完成度にこだわり、指導内容があまりにも限定しすぎてしまう。
- 取り扱う複数の題材や教材曲の関連付けが不明瞭である。
- 共通事項が同じものが多い。

1 年間指導計画の意義

「付けない力」
学習指導要領が掲げる学力は網羅できない！

- 様々な力を網羅するには見通した指導計画が必要となる。
- 子どもたちの学力を適切に見取るには、各単元の学習の位置付けや評価の観点を確認しなくてはならない。
- 指導者の共有化がなされ、誰もがよりよい指導を実施するために基本となる計画が必要となる。

平成25年度 1学年 音楽科 年間指導計画 通賢中学校 No.1

月	単元	小単元	時	学習内容	評価規準	評価の観点 (1)(2)(3)(4)
4	心をつなぐ音楽	校歌	1	オリエンテーション	音楽を学習することに対して興味関心をもっている。	○
			2	校歌の歌詞の意味を理解して歌唱する。	校歌全文の歌詞の意味を理解し、毎年の校歌に思いを込めて歌おうとしている。	○
			3	校歌を南無草で歌い、南無草やハートシンに慣れる。	校歌の歌詞と曲の雰囲気に合わせ、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			4	自分の持っている歌声をみつける。	自分の声の特徴を知ることができる。	○
5	My Voice①	Forever	5	曲の流れに沿って明るい歌声で歌う。	歌詞の内容や曲想を基にした音楽表現をするための必要な技能を身につけることができる。	○
			6	歌詞の内容を味わい、その言葉を聞き手に届けるような歌い方を工夫する。	歌詞が表す心情や曲の感情や味わいを意識し、自ら音楽表現を通して思いや表現をもつことができる。	○
			7	曲の内容と声の変化との関わりを感じ取る。	登場人物の心情の変化と旋律やリズムの変化との関わりを感じ取り、聴くことができる。	○
			8	曲の内容と曲想の変化との関わりを感じ取る。	歌詞に表れている場面や登場人物の心情の変化と伴奏の変化との関わりを感じ取り、聴くことができる。	○
6	My Voice②	Michael Row The Boat	9	自分の声の性質と歌い方の長所や短所などを見つけて歌う。	音楽表現を工夫し、どのような声でどのように歌うかに思いや表現をもつことができる。	○
			10	節名で歌って、ハーモニーを楽しむ。	節名の性質やハーモニーの性質を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			11	曲のまとまりやハーモニーの変化を感じ取り、歌う。	リズムやメロディの性質やハーモニーの性質を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			12	曲のまとまりやハーモニーの変化を感じ取り、歌う。	リズムやメロディの性質やハーモニーの性質を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
7	学校合唱曲選	エーデルワイス	13	楽曲の特徴を感じ取り、演奏や歌唱のよさを感知する。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			14	へ音階表を読んで演奏や歌唱を楽しむ。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			15	パートの役割や音の重なり方の特徴を感じ取り、歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			16	パートの役割や音の重なり方の特徴を感じ取り、歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
9	学校合唱曲選	エーデルワイス	17	パートの役割や音の重なり方の特徴を感じ取り、歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			18	パートの役割や音の重なり方の特徴を感じ取り、歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			19	パートの役割や音の重なり方の特徴を感じ取り、歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			20	曲想を感じ取り、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫して歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
10	日本の民謡	エーデルワイス	21	曲想を感じ取り、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫して歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			22	曲想を感じ取り、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫して歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			23	曲想を感じ取り、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫して歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
			24	曲想を感じ取り、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫して歌う。	楽曲の要素や特徴を認識し、それらが音楽的な要素として表現されていることを理解し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○
11	リズムのまじりと	ROCK TRAP	25	日本の民謡に親しみ、声や音楽の特徴を感じ取る。	音楽の特性とその要素との関わりを理解することができる。	○
			26	リズムや旋律のまとまり、強弱の働きに関心をもち、それらを認識するなど主体的に取り組もう。	リズムや旋律のまとまり、強弱の働きに関心をもち、それらを認識するなど主体的に取り組もう。	○
			27	リズムや旋律のまとまり、強弱の働きに関心をもち、それらを認識するなど主体的に取り組もう。	リズムや旋律のまとまり、強弱の働きに関心をもち、それらを認識するなど主体的に取り組もう。	○
			28	音楽を創り出している要素を知見し、それらの要素が生かす特徴や表現方法を認識し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	音楽を創り出している要素を知見し、それらの要素が生かす特徴や表現方法を認識し、必要に応じて練習を繰り返すことができる。	○

(4) 研究のまとめ

ア 成果

- (ア) 5年経験者研修の全体研修、のアンケート、また、授業支援訪問での研修者への指導の際の聞き取り等から、「題材構想」をする際、ほとんどの研修員が「指針」を活用したことがわかった。これは、「指針」を活用しての研修・演習の実施や訪問時での支援によるものと考ええる。また、すべての学年における各領域ごとの構想案を、提示したからとも思われる。
- (イ) 経年研修の学習指導案づくりの講義・演習で、「指針」を活用することにより、学習指導要領改訂で重視されている〔共通事項〕を手掛かりとした「題材構想」や「題材の評価規準」設定において、研修員に変容が見られた。授業実践では、押さえない〔共通事項〕に焦点が当てられず、結果的に付けたい力を培う指導には至らなかった。しかし、授業実践においては、〔共通事項〕を介しての題材の立案を見ることができた。そのため、子どもたちは自らこの視点を用いて学びを進めることができた。こんな学びが、ひいては付けたい力の定着を生むことにつながっている。授業改善の手応えを感じた。
- (ウ) 大学生や音楽の指導に不安を感じる先生方にとって、「指針」にある学習指導要領の変遷や小中高の系統をおった内容は、音楽科の土台を踏まえる上で大変効果的であった。また、用語や授業づくり規準は、一目で理解できるものであり、学習指導における基礎的知識が学べる有効な資料となっている。

イ 課題

- (ア) 5年経験者研修の在り方が変更され、実際の授業参観において変容を確かめることはできない。今後は他の経年研修において、講義・演習に活用することで、補充すべき点について把握していく。
- (イ) 「題材」をまとめりとして捉え、1年を通した中でそれぞれの「題材」を効果的に位置付けて、指導を考える必要がある。そのためには「年間指導計画例」を今後、補充していく。また、「評価と結びつけた年間指導計画例」の補充も模索していきたい。適切な評価こそ、子どもたち個々を確かに見取っていくことになり、これをもとに指導の在り方を見直すことが真の授業改善になるからである。
- (ウ) 「指針」は各校に1冊のみの配置であり、まだまだ周知されていない。今後、さらに周知していくための環境を整えていく必要がある。そのためには、各教育事務所における学校訪問や学校等支援研修において、授業づくりや校内研修などで活用するなど、何らかの形で声掛けしていくことで、より「指針」の活用の充実を図ることができると考える。

7 図画工作科 / 美術科

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 図画工作 / 美術」(以下「指針」)を用いて、図画工作科 / 美術科において、育成したい資質や能力を伸ばすための指導と評価についての理解を深めることで、授業改善や教員の資質向上を図ることができる。

(2) 研究の方法

ア 研究の進め方

図画工作科 / 美術科における育成したい資質や能力とは、学習指導要領及び同解説の目標や内容に示されたものを指す。具体的には「造形（美術）への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」の4点を指し、それぞれの観点の趣旨をしっかりと押さえた上で授業づくりを行うことが重要である。

本県における図画工作科 / 美術科の授業づくりの特徴として、地域の素材（自然環境や伝統工芸等）を生かした題材の設定や子どもの活動意欲を引き出すための導入の工夫などが挙げられる。本県の教員はこの点に力を入れ指導を重ねてきた結果、子どもが造形活動を楽しむ姿が多く見られるようになった。しかし、育成したい資質や能力への理解が十分でないために、作品を完成させることが授業の第一の目的となり、子どもは楽しく活動しているが、一体どのような力が身に付いたのか分からない、といった授業も見受けられる。そこで、授業の中で子どもたちが主体的に作品と向き合っている際に発揮している資質や能力をしっかりと捉え、指導や支援を行っていくことが授業改善につながると考えた。

そこで、研究の柱を以下の2点に設定し、研究を進めていくこととした。

1 本目の柱として、「5年経験者研修」の全体研修において、「指針」の内容を基に講義や演習を構成し、それらが授業実践へとどのように反映され、図画工作科 / 美術科の授業改善へとつながっていくのかを検証する。

2 本目の柱として、「大学での『指針』の有効な活用方法」について、静岡大学教育学部の学生に対して、「指針」の内容を基に講義や演習を行うことで、教員を志す学生の意識の変化について検証する。

イ 研究の計画

(ア) 「5年経験者研修」における研究の計画【対象者：平成25年度5年経験者24人】

日時	研究の対象となる活動	主な内容
平成25年 5月14日	全体研修	・図画工作科 / 美術科の授業実践の振り返り ・「指針」を基に育成したい資質や能力についての講義 ・「指針」の実践事例を基に、題材構想の作成
平成25年 5月～ 平成25年 9月	授業実践	・学習指導要領及び同解説と「指針」を基に育成したい資質や能力を明確にした学習指導案の作成 ・授業実践における成果と課題の明確化
平成25年 9月	「指針」の活用 アンケート	・「指針」の活用状況の把握
平成25年 10月1日	全体研修	・授業実践の成果と課題を共有 ・「指針」の実践事例を基に「鑑賞活動」「造形遊び」の実技演習

平成 25 年 10 月～ 平成 26 年 2 月	授業実践	・学習指導要領及び同解説と「指針」を基に育成したい資質や能力を明確にし、指導と評価の一体化が図られた学習指導案の作成（授業実践 の課題を基に授業改善を図る） ・授業実践 における成果と課題の明確化
------------------------------------	------	---

(1) 「大学での『指針』の有効な活用方法」における研究の計画

【対象者：平成 24 年度静岡大学教育学部 2 年生 24 人

（教員養成課程 美術専修 11 人 芸術文化課程 美術デザイン専攻 13 人）】

日時	研究の対象となる活動	主な内容
平成 24 年 11 月 1 日	* 美術科教科 内容指導論 第 1 回	・「指針」を基に、学習指導要領のポイント、育成したい資質や能力についての講義 ・「指針」の実践事例を基に「造形遊び」の体験
平成 24 年 12 月 13 日	* 美術科教科 内容指導論 第 2 回	・グループ内で「木切れや釘」を材料としてつくった試作品と題材構想の紹介 ・図画工作科 / 美術科の授業づくりにおいて大切にしたいことについての講義
平成 25 年 1 月 17 日	* 美術科教科 内容指導論 第 3 回	・作成した「木切れや釘」を材料とした題材構想の発表会
平成 25 年 2 月	「指針」の活用 アンケート	・「指針」の活用を通して、学んだことの把握

* 「美術科教科内容指導論」では、学習指導要領の内容を踏まえ、授業に必要な基礎的学習と題材開発の技術を体得し、実践につなげることを目的としている。

(3) 研究の内容

ア 研究の経過 ～「5 年経験者研修」における研究～

(ア) 全体研修（平成 25 年 5 月 1 日）

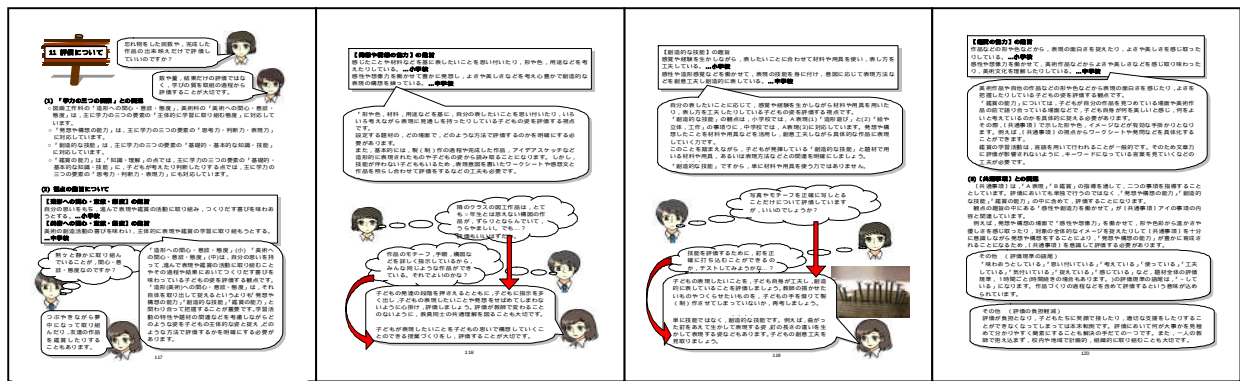
a 図画工作科 / 美術科の授業実践の振り返り

研修員が作成した課題レポートを基に、自身の授業実践を振り返り、今まで大切にしてきたことや現在抱えている課題・悩み等をグループ内で互いに発表した。主な内容について、以下に示す。

<大切にしてきたこと> ・子どもの作品への思いを大切にした、指導や支援を心掛けている。 ・子どものよさを認め、できるだけ具体的に褒めるようにしている。 <課題・悩んでいること> ・子どもの作品に対して教師がどのように関わっていけばよいのか、困っている。 ・評価の仕方に自信が持てず、作品の出来栄に頼ってしまっている。
--

b 育成したい資質や能力についての講義

研修員の実態としてほとんどが小学校の教員であること、また、図画工作科の学習指導案を今までに作成した経験がないことなどが挙げられる。そのため、まず授業を通して、子どもに身に付けさせたい資質や能力をきちんと理解することが必要だと考え、「指針」を活用して講義を行った。【資料 1】



【資料1】全体研修 の講義で使用した「指針」資料 p.117～p.120

c 「指針」の実践事例を参考にしての題材構想づくり

授業づくりで大切にしたいことは、題材を通して育成したい資質や能力を明確にすることである。そのため全体研修 の講義内容を受け、育成したい資質や能力を明確にした題材構想づくりの演習を取り入れた。「指針」には各学年や各領域に対応した実践事例が掲載されているために、それを参考にしながらグループで決めた題材について、学習指導要領との関連を確認しながら、題材目標を設定したり、評価規準の作成を行ったりした。

d 全体研修 のアンケートより

- ・図工について基礎知識があまり無かった私にとって、「指針」はとても参考になった。
- ・「図画工作科の目標と授業づくりの基本」では、図工で大切にすべきことを理解した。演習ではそれを踏まえて、具体的に題材構想を練ることができ勉強になった。
- ・まず子どもにどのような力を付けさせたいかをじっくり考える必要があると強く感じた。また、児童の見取り方、評価等についても「指針」から具体的に学ぶことができた。
- ・題材構想づくりでは評価規準、評価方法の設定の仕方を詳しく教えてもらい、コツをつかむことができた。具体例があったこともよかった。育成したい資質や能力を明確にして魅力ある授業を実践していきたい。

< 考察 >

全体研修 では、「指針」の内容を周知し、授業実践に向けて積極的な活用へとつなげることができた。また、下線部の記述からは、研修員の育てたい資質や能力を明確にした授業づくりへの意識の高まりが感じられる。

(1) 授業実践 (平成 25 年 5 月～9 月)

a 題材を通して育成したい資質や能力を明確にした学習指導案の作成

研修員各自が所属校において、学習指導案を作成した。小学校の研修員のほとんどが、今までに図画工作科の学習指導案を作成した経験がなく、目標や評価の設定、本時の子どもの表れや教師の具体的な支援など、研修員は子どもの実態や題材の特徴を生かして題材の構想を練ることの難しさを実感した。

b 授業実践 における共通する成果と課題(授業実践シートから指導主事が整理)

< 成果 >

- ・学習指導要領を基に、子どもたちの実態の把握や試作品づくりを通しての題材研究などに熱心に取り組み、題材を通して付けたい力をきちんと押さえるように心掛けていた。
- ・導入時に工夫を凝らして、子どもたちの活動への意欲を高めていた。
- ・友達同士の自然な対話から、新たな発想を引き出そうという手立てが見られた。

< 課題 >

- ・ 付けたい力に向かう有効な指導や支援の在り方について考えることが必要である。
- ・ グループ活動や言語活動を取り入れることが目的化され、子どもの思いとずれを感じる実践もあった。
- ・ 授業実践 に向けて、指導と評価の一体化が図られた授業づくりが求められる。

(ウ) 5年経験者による「指針」の活用アンケート

このアンケートを通して全体研修、授業実践を終えた段階での研修員の「指針」の活用状況を把握するとともに、全体研修、授業実践に向けてより有効な活用方法を見出すための資料として役立てた。【表1】

趣旨と内容	教科等の関連	各学年の目標	A 表現目標一覧	B 鑑賞目標一覧	(共通事項) 一覧	材料や用具について	鑑賞授業例(例)	年間計画(例)	子どもの実態	(例) 道徳との関連	ここに共通事項は？	A 表現事例	B 鑑賞事例	材料調達例	Q & A	評価について	美術館との連携例	高等学校指導要領	学習指導要領の変	術(図画工作/美術)	授業づくり規準
3人	0人	15人	8人	6人	6人	6人	5人	2人	7人	2人	4人	8人	2人	3人	6人	7人	2人	0人	0人	1人	
13%	0%	63%	33%	25%	25%	25%	21%	8%	29%	8%	17%	33%	8%	13%	25%	29%	8%	0%	0%	4%	

< どのような場面で「指針」を活用したか >

- ・ 学習指導案作成の際、目標や評価について考えるときに参考にした。
- ・ 評価について不安な点があったので、「評価について」を参考に授業を構想した。また、「Q & A」も同じく参考にした。
- ・ 具体的な事例が掲載されているので、授業の大まかな流れや注意点など授業づくりのイメージを広げる際に役立った。

< 授業づくりで大切だと思ったことや感想等 >

- ・ 題材研究や子ども理解も大切だが、まずは学習指導要領をよく読み、付けたい力を明確にして授業づくりをすることの大切さが分かった。
- ・ 事前に試作等を行い、何を指導し、それをどう評価するのか、教師がゆとりを持って指導や支援ができると子どもの活動が充実することが分かった。
- ・ 評価では、作品の結果だけを求めるのではなく、生き生きと取り組む子どもの姿をしっかり見取り評価していくことが大切だと感じた。

【表1】5年経験者による「指針」の活用状況

アンケート結果から、授業づくりにおいて、学習指導要領で示されている教科の目標や学年の目標、領域ごとの目標など(赤枠)を大切にしていることが分かった。この部分を大切にすることは、まさに付けたい力を教師が明確に持つことにつながり、授業づくりの要となる。また、事例や評価(赤枠)についても関心が高いことが明らかとなり、研修員がより具体的で、日々の授業にすぐに生かせる資料を求めていることが分かった。課題(青枠)としては、年間を通して指導を見直していくといった意識が低いこと、表現領域に比べ、鑑賞領域への関心が低いことの2点が挙げられる。

(I) 全体研修 (平成25年10月1日)

a 授業実践の成果と課題の共有

授業実践に対して、授業実践シートや「指針」の活用アンケートの記述から、研修員に共通する成果と課題についてまとめた。それらの内容と「指針」の巻末に資料として掲載されている「授業づくり規準(図画工作/美術/芸術(美術・工芸)科)」の項目(【P構想】【D展開】)とを照らし合わせて、講義を行った。【資料2】

「指針」
巻末資料
p.135

成果について【D展開】

- ①活動場所、材料や用具の設置や安全な扱い方等、安全面に配慮して授業を行っている。
- ②子どもたちの思いを大切にしようと、対話をしながら寄り添った支援を心掛けている。
- ③試作や演示を行い、子どもたちの活動意欲を喚起している。
- ④ICT等を有効に活用し、表現の見通しを持たせたり、評価に生かしたりしている。

課題について【D展開】

- ⑤子どもに分かりやすい発問や指示の内容を吟味したい。
- ⑥板書を整理し、活動のねらいや手順等が、子どもにも一目で分かるような板書を心掛けたい。
- ⑦本時における付けた力（目標）を常に意識し、そこに向かうような支援を子どもの状況によって、具体的に与えようにしたい。

【資料2】全体研修 で使用した講義資料（【D展開】）

b 「指針」の実践事例を基に、「鑑賞活動」及び「造形遊び」の実技演習

「指針」には、表現領域、鑑賞領域で取り上げられる主な題材の実践事例を紹介している。授業実践 の学習指導案や授業参観から、課題点について講義等で改善案を伝えるだけでなく「指針」の実践事例を実際に体験しながら、研修員自らが自己の課題点について考える方が授業実践 に向けてより効果的であると判断し、「鑑賞活動」及び「造形遊び」の実技演習を取り入れた。【資料3】【写真1】



【資料3】実践事例「新聞紙とともだち」

【写真1】造形遊び「新聞紙とともだち」の実技演習の様子

- ・実技演習では、子どもの気持ちになって楽しめた。「もっとやりたい」「一緒につくると楽しい」という思いを体感し、授業でもこんな図工の時間を大切にしていきたいと思った。
- ・「指針」の実践事例を基に具体的な活動を交えての研修だったので、より分かりやすかった。次の授業では今まで学んできたことを生かせるようにがんばりたい。
- ・演習で様々な体験ができ、鑑賞活動や造形遊びの楽しさがよく分かった。授業実践 の課題もはっきりして、授業実践 をがんばろうという気持ちがとてもわいてきた。
- ・課題が明確になり、どんなことを意識して実践していけばよいか分かった。「指針」を基に様々な事例について、具体的な資料や演習等で教えていただき参考になった。

考察

「指針」の実践事例を基に実技演習を行い、活動中に発揮されている資質や能力について自身で考えるよい機会となった。下線部の記述からは、授業実践 における成果と課題を明らかにしたことで授業実践 に向けての具体的な目標を持つことができたことが分かる。

(c) 授業実践 （平成 25 年 12 月 13 日）

- a 育成したい資質や能力を明確にし、指導と評価の一体化が図られた学習指導案の作成
- 授業実践 の課題や全体研修 の内容を受け、学習指導案を作成した。授業実践 の学習指導案と比べ、題材間のつながり、子どもの実態等の把握から、題材を通して育てたい資質や能力を明確にして、指導と評価の一体化が図られた学習指導案が作成された。特に、試作から具体的な子どもの表れを予想し付けた力に向かう支援を考えたり、美

術館との連携に目を向け実践につなげたりする等、授業改善への意識が強く感じられた。

b 授業実践 から顕著な変容が見られた授業実践

授業実践 の概要と課題

題材名 「アートたんけんたい」

毎日過ごしている身近な場所から形や色を捉え、よさや面白さを感じ取らせるために、デジタルカメラを用いて撮影し鑑賞につなげるという題材である。普段見ている何気ない景色を切り取る活動は、子どもたちにとってとても魅力的な題材であった。

課題

- ・題材を通して付けたい力を意識した構想となっていない。
- ・子どもの発達段階や興味・関心等を含め、子どもの実態を押さえた学習問題になっていない。
- ・鑑賞とはどのような学習活動かを理解し、子どもたちの表れをどのように価値付け評価していくのか明確ではない。

授業実践 の概要と成果

題材名 「クミクミだんだん広がれダンボール」

段ボールと段ボールカッターを使い、切っつなぐ活動を通して、イメージを広げていく題材である。扱う素材は段ボールのみという限られた条件の中での活動が、子どもの思考判断を促し、より主体的な表現につながっていった。

【写真2】

成果

- ・レディネス調査から子どもの実態を押さえ、本時で願う子どもの姿を作成し、授業に生かしていた。【資料4】
- ・付けたい力「創造的な技能」を押さえ、明確な意図を持った上での授業構想が立てられていた。そのため、子どもたちに寄り添い価値付けをすることができ、指導と評価の一体化が図られていた。

本時で願う子どもの姿

氏名	①	②	本時で願う子どもの姿
1		☆	自分の活動に自信がないが、良い発想ができるため良い現れを養い、自信を持って活動に取り組む。
2	☆		自分の思いを大切に、ダイナミックな作品づくりを行い、友達を巻き込んで活動する。
3			前時に、大きく、丈夫にしたいという思いを持っているため、友達と協力して、思いを実現する。
4			自分の思いや考えを友達に伝えながら活動し、発想や構想に広がりをもたせる。
5			体全体を使った活動を行い、友達の発想から刺激を受け、自らの発想を広げる。
6		☆	自分の活動に自信がない。活動を認めていくことで、自信をもって表現し、作り出す喜びを味わう。
7			イメージが先行してしまう。活動自体を全身で楽しみながら、友達とかわかることで発想の幅を広げる。

①「アイディアが浮かびますか。」が「いいえ」の児童

②「自分の作品のよさを見つけられますか。」が「いいえ」の児童

【資料4】レディネス調査から本時で願う子どもの姿（授業実践 学習指導案）



【写真2】授業実践 の様子

c 美術館との連携を図った授業実践

題材名 「美術館に行こう！」

「指針」には、静岡県内の美術館との連携例が紹介されている。右の連携例【資料5】を参考に、身近な地域の美術館であるベルナル・ビュフェ美術館と連携した小学校の鑑賞の授業実践が行われた。

様々なものに興味を示す、4年生の子どもたちの実態を捉え、ビュフェの独特な画風の絵の鑑賞から、子どもたちは想像力をふくらませながら、たくさんの気づきや感想等、根拠を示しながら伝え合い、目標へと迫っていった。また、鑑賞を独立して扱う題材として、育てたい資質や能力を「造形への関心・意欲・態度」と「鑑賞の能力」の2点に絞り込んで指導し評価につなげるなど、指導と評価の一体化が図られた授業実践となった。【資料6】

題材の目標

身近にある美術品に関心を持ち、作品のよさや面白さに触れ、見方や感じ方を深める。

【資料6】指導と評価の一体化が図られた題材の目標と評価規準

題材の評価規準

- ・ビュフェやヴァンジの作品に関心を持ち、作品のよさや面白さを自分の思いを持って味わっている。【造形への関心・意欲・態度】
- ・作品に対する見方を広げながら話し合い、作品の表現の面白さを捉え、よさを感じ取っている。【鑑賞の能力】

美術館との連携例

ベルナル・ビュフェ美術館との連携例



美術館と近隣の学校との連携によって「鑑賞キット」を開発。このキットは、3種類（自画像、静物画、風景画、ビュフェ、スローリー）あり、それぞれのテーマを通して、ベルナル・ビュフェの作品を様々な角度から鑑賞することができる。美術館を実際を訪ねることができない学校は、「鑑賞キット」を使うことによって、教室を美術館ギャラリーに変え、レプリカ作品の前で鑑賞授業を行うことができる。

【資料5】「指針」に掲載されている連携例

d 授業実践 における共通する成果と課題（授業実践シートから指導主事が整理）

< 成果 >

- ・活動の時間を十分に確保しながらも、「発想や構想の能力」「鑑賞の能力」を育成する手立てとしての言語活動を計画の中に意識して位置付けている。
- ・題材研究も兼ねて試作をすることで、子どものつまづきを事前に予測し、具体的な支援が構想されている。
- ・造形遊びや鑑賞の実践が増えるとともに、〔共通事項〕の視点を生かした授業が増えた。

< 課題 >

- ・指導と評価の一体化した授業づくりへの意識は高まったが、付けたい力につながる子どもの見取りや支援については十分でない。
- ・育成したい資質や能力がバランスよく配列されるように、年間指導計画の見直しが必要である。

イ 研究の経過 ～「大学での『指針』の有効な活用方法」における研究～

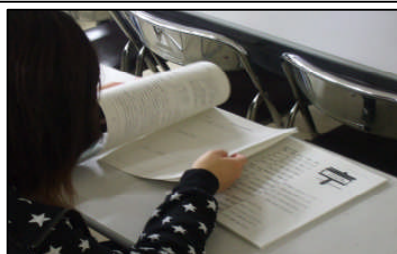
(ア) 美術科教科内容指導論（第1回）（平成24年11月1日）

a 「指針」を基に学習指導要領のポイント、図画工作科/美術科において「育成したい資質や能力」についての講義

学生たちに「指針」を紹介した。紹介した主な内容は以下の通りである。

- ・学習指導要領の内容を具体的に分かりやすく説明したものであること。
- ・学年ごとの目標や内容、材料や用具の系統性が一目で分かるように提示されていること。
- ・育成したい資質や能力についての趣旨が明記されていること。
- ・学年、領域ごとに授業の実践事例が紹介されていること。
- ・県内の美術館との連携例が紹介されていること。

これらの「指針」の関連するページを学生一人一人に配布して示し、学習指導要領の改訂のポイント等を指導主事が説明した。【写真3】子どもの活動の様子や作品等の映像を見せながらの講義ではあったが、大学2年生の現段階において、学習指導要領や授業づくりへの関心が十分に高まっていないという実態が明らかとなった。



【写真3】「指針」を開く学生

b 新聞紙を使った造形遊び「つなげて つなげて」の体験

先の講義の内容についての理解をより深めるための手立てとして、実際に新聞紙を使った造形遊び「つなげて つなげて」（「指針」の実践事例「新聞紙はともだち」を参考）を体験し、その中で学生たち自身が働かせている資質や能力について、指導主事が解説を加えながらの演習を行った。【写真4】

最初、学生は新聞紙の束を目の前にして「これで一体何をするのだろうか？」という思いを抱いていたが、屋外の活動場所で「この新聞紙を自由につないで、この場所を变身させよう。」との課題の投げ掛けに対して、新聞紙を帯状に裂いて長くつなげていく学生、壁面や柱にビニールのテープを渡し、そこに新聞



【写真4】造形遊びの演習の様子

紙の帯をつるす学生、新聞紙をねじってつないだり結んでつないだりする学生等、短時間の取組ではあったが、学生たちの活動は徐々に活発になっていった。目の前の新聞紙と活動場所から「ここは、どんなつなぎ方がいいかな」「この場所の特徴を生かしながらどう変身させようか」と考えたり、「絶対はずれないように2回結ぶ」「風で新聞紙がなびくようにビニールのテープにつるす」などの自分たちの思いの実現に向けて工夫をしたりして、「発想や構想の能力」や「創造的な技能」の資質や能力を十分に働かせながら夢中になって取り組む学生の姿が印象的であった。

(イ) 美術科教科内容指導論 (第2回) (平成24年12月13日)

a 「木切れや釘」を材料とした題材の構想案と試作品を紹介し合うグループワーク

第1回の講義と演習を受け、学生たちは持ち帰った木切れや釘を使って、自分が構想した授業の素案と試作品を互いに紹介し合った。それぞれが自分の思いを込めて試作品をつくってきたためにこの題材を通じて、子どもたちにどのような力を身につけさせることができるのか、イメージをふくらませてきていた。実際には、まだ子どもの前で授業を行った経験のない学生たちではあるが、試作品をつくることで様々な子どもの姿を思い浮かべながらの意見交換が行われていた。意見を交換する中で、学生たちは授業づくりのヒントを得たり、同じ悩みや不安に共感したりするなど、活発な協議から学んでいる様子が見られた。【写真5】



【写真5】グループワークの様子

b 図画工作科 / 美術科の授業づくりにおいて大切にしたいことについての講義

学生たちのグループワークでの協議内容を受けて、以下の2点について、「指針」や学校現場での実践事例などを基に講義を行い、今後の図画工作科 / 美術科の授業づくりの参考となるようにした。

- ・図画工作科 / 美術科において育成したい資質や能力(4つの観点)の趣旨
- ・子どもの作品の見方

図画工作科 / 美術科において育成したい資質や能力(4つの観点)の趣旨について学生たちのつくった試作品などを基に説明を行った。ここでは4つの観点の内の「創造的な技能」を例として紹介する。

【写真6】は、学生T・Gの試作品「おどけたウサギ」である。一見すると右側の目の釘打ちが失敗したかのように見えるが、題名から考えると、おどけたウサギの表情を表すために「創造的な技能」を働かせて、意図的に釘を曲げたことが分かる。このような具体物を使っ



【写真6】「おどけたウサギ」

て、意図的に釘を曲げたことが分かる。このような具体物を使っ

た説明は、学生たちにとっても実感を伴った理解へと通じたのではないと思われる。

子どもの作品の見方についても、実際に子どもが描いた作品から、その子がどのような思いを持って描いたのかを想像しながら、子どもの思いに寄り添って作品を見ていくことの大切さを伝えた。

(ウ) 美術科教科内容指導論 (第3回) (平成25年1月17日)

a 題材構想の発表会

学生が作成した題材構想(A3判資料、様式等は自由)のプレゼンテーションが行われた。資料には、題材名、題材の目標、学習活動の流れ、子どもの意欲を引き出す手立

てや安全指導のポイント、ワークシートの例などが盛り込まれていた。事後のアンケートからも分かるように「指針」の学年の目標の一覧や材料や用具の取扱い、授業の具体例などを参考にして、この題材を通して子どもたちに、どのような資質や能力を育てたいのかを意識して作成されていた。このような取組を経験した学生たちが、教員となり図画工作科／美術科の授業づくりを行う際には、ここで学んだことを生かすことができるだろうと感じた。【資料6】



【資料6】学生たちが作成した題材構想のプレゼンテーション資料

b 学生が作成したプレゼンテーション資料から見られたよさ

- ・題材の目標が、題材を通して身に付けさせたい資質や能力を意識して設定されている。
- ・子どもの実態を意識したり、評価のことも考えたりしながら題材の構想がなされている。
- ・題材を通して身に付けさせたい資質や能力に向けて、ワークシートの内容、言葉掛け、安全面での配慮などの手立てが考えられている。
- ・図画工作科／美術科の楽しさを子どもたちに伝えたいという思いが感じられる。

(I) 大学生による「指針」の活用に関するアンケート

「指針」を活用	新聞紙の造形遊び	試作品づくり	題材構想づくり	題材・構想の紹介作品	題材構想の発表会
11人 46%	6人 25%	16人 67%	14人 58%	9人 38%	16人 67%

【表2】参考となった講義や演習

各学年の目標一覧	A表現の目標一覧	B鑑賞の目標一覧	「共通事項」の内容一覧	材料や用具の取扱い	年間指導計画画例 中学1年	年間指導計画画例 中学2・3年	授業の具体例
20人 83%	20人 83%	18人 75%	14人 58%	13人 54%	2人 8%	3人 13%	15人 63%

【表3】「指針」の参考箇所

【講義や演習を通して図画工作科／美術科の授業づくりで大切だと思ったことや感想等】

- ・子どもの実態把握と、題材の明確な目標を持って授業をつくるということがいかに大切であるか、分かった。「指針」の授業の具体例を参考にしながらの題材構想づくりは大変勉強になった。
- ・まだまだ、授業づくりに関した考え方や知識が足りていないなと実感した。
- ・子どもが楽しめる授業づくりをするには、まず、試作を通して教師が楽しめなければいけないと思った。そうすることで、どのような支援が必要であるかという具体的な手立てが考えられるのではないかと感じた。
- ・実際の現場を経験している指導主事の話や、授業づくりへの理解や心構えなど、自分なりに得るものが多かった。
- ・一番大切なことは、美術の楽しさを自分自身で実感することだと思った。それができれば、子どもたちにも美術の楽しさを伝えることができるのかなと感じた。

美術科教科内容指導論（第1回～第3回）までの取組の効果を図るために、受講した学生たちに事後アンケートを実施した。アンケートの集計結果は次の通りである。

【表2】からは、大学生にとっては、「指針」が最も身近な授業づくりの参考書（赤枠）となったことが考えられる。また、受け身的に講義を聞くだけでなく、自分自身が実際に体験してみることで、講義内容の理解がより深まっていくこと（赤枠）が読み取れる。

【表3】では、学習指導要領に示されている身に付けたい資質や能力の基となる目標への関心が高いこと（青枠）が分かる。また、実際の題材構想づくりでは、多くの学生が同じ材料を扱っている題材の具体例を参考にした（青枠）ようである。

【図画工作科／美術科の授業づくりで大切だと思ったことや感想等】では、将来教師を志している学生の教師への思いがふくらんでいる様子が読み取れる。また、下線部の記述からは、学生の内に授業づくりの基本的な手順を学んだり、体験を通して図画工作科／美術科の授業づくりで大切なことを感じ取ったりしたことが今後、教員としての資質の向上に大きく影響していくのではないと思われる。学生たちが「指針」を参考にしながら授業づくりのコツをつかみ始めたのは確かである。

(4) 研究のまとめ

ア 成果

5年経験者研修において「指針」を基にした研修プログラムを構成したことにより、図画工作科／美術科における育成したい資質や能力（「造形（美術）への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」）をきちんと踏まえた上で、授業を構想することへの意識が高まった。また、講義だけでなく「指針」の実践事例を基にして実技演習を取り入れたことによって、研修員自身がその題材を通して育成したい資質や能力について考えることができた。「指針」を経年研修等で積極的に活用していくことは、県内の図画工作科／美術科の課題でもある、育成したい資質や能力の理解が不十分であるために、作品を完成させることが授業の第一の目的となっているという状況を打開していく有効な手立てとなることが検証された。育成したい資質や能力の趣旨を正しく捉え、題材を通してどのような資質や能力を育てていくのかを明確にした上で授業を構想していくことが、指導と評価の一体化が図られた授業づくりの第一歩となり、それが基になって授業改善へとつながっていくと思われる。

また、教員を志している大学生に対して「指針」の存在を明らかにし、ポイントを絞りながら、育成したい資質や能力について講義をしたり、「指針」の実践事例を基に試作品づくりや題材構想づくりに取り組んだりしたことは、大学生にとって図画工作科／美術科における魅力ある授業づくりについて、じっくり考える機会となった。この経験は、今後教員として教育現場に立ったときに生かされると同時に、教員としての資質の向上の一助になると思われる。

イ 課題

本研究の対象者が5年経験者と大学生ということで、「指針」の活用状況や有効な活用方法について、十分な検証が図られたとまでは言えない。初任者研修、5年経験者研修、10年経験者研修等の経年研修において今後、研修員の実態に合わせた「指針」の有効な活用方法について研究していく必要があると感じた。

また、5年経験者と大学生を対象に行った「指針」の活用に関するアンケートからは、「指針」への要望として、実践事例の充実や具体的な評価場面の解説、様々な材料や用具の紹介等が挙げられた。特に小学校では、図画工作科について校内研修の窓口教科として、じっくり研修する機会が少ないために、より実践的で具体的な資料を求める傾向がある。このことについては補足資料などを作成し、誰でも手軽に活用できる「指針」を目指して改善していきたい。

8 体育 / 保健体育科

【平成 24 年度の取組について】

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 体育 / 保健体育」(以下、「指針」)を用いて各分野や各領域の系統性を理解することで、授業改善を図ることができる。

平成 24 年度には「指針」を研修等で活用することにより、研修員が各運動領域の系統性を理解し、授業改善に役立てることができるように「指針」の紹介や発信を重点とした。

(2) 研究の方法

ア 研究の期間

平成 24 年 4 月から平成 25 年 3 月まで

イ 研究の概要

次の(ア)・(イ)の研修で「指針」を活用し、その成果や課題をアンケート調査や聞き取り等により検証する。

(ア) 教科等リーダー研修

(イ) 経年経験者研修(初任者研修・5 年経験者研修・10 年経験者研修)

ウ 研究の対象

(ア) 小中学校教科等指導リーダー 28 人

(イ) 小中学校経年経験者研修の対象者 60 人

(3) 研究の内容

ア 活用の仕方

(ア) 教科等指導リーダー研修

教科等指導リーダー研修において「指針」を活用し、各運動領域における指導内容の系統性に関する理解を深める。また、自己の授業研究及び校内研修、各地区の若手教員に対する指導助言の参考資料とするよう促す。

さらに、本県の児童生徒の体力の現状について、特に小学校児童の投力の低下が課題となっていることを踏まえ、「指針」にある「静岡県ならではの取組(投力向上に関する事例)」を紹介し、教科等指導リーダーの立場で積極的に活用するよう依頼する。

(イ) 経年経験者研修

経年経験者研修において「指針」を活用し、各運動領域における指導内容の系統性について解説をする。また、自己や共同での授業研究及び校内研修の際には、「指針」を参考にして事前協議会を持つよう働きかける。

さらに、本県の児童生徒の体力の現状を共有し、特に小学校児童の投力の低下が課題となっていることを踏まえ、「指針」にある「静岡県ならではの取組(投力向上に関する事例)」を紹介し、授業づくりの際には参考にするよう指導する。

イ 検証の方法

(ア) 教科等指導リーダー研修

研修中に「指針」に関する聞き取り調査を行うとともに、研修後にアンケート調査を行い、これらを基に活用の成果や課題を検証する。

(イ) 経年経験者研修

研修中に「指針」に関する聞き取り調査を行うとともに、学習指導案や研究授業の分析を行い、これらを基に活用の成果や課題を検証する。

ウ 検証の結果

(ア) 教科等指導リーダー研修

「指針」に関するアンケート調査や聞き取りを行い、結果は次の通りであった。

a 授業研究や研修会等での活用状況

活用した	どちらかという と活用した	どちらかという と活用しなかった	活用しなかった
16人(57.1%)	9人(32.1%)	3人(10.7%)	0人(0.0%)

b 「活用した」「どちらかというと活用した」という答えの感想・要望等

- ・地区での授業研究の際「静岡県ならではの取組」を意識し活用した。
- ・校内研修で、2年生の鬼遊びの学習活動例を参考にした。
- ・指導法やつまづきに対する支援の仕方等について、指針を見て確認した。
- ・指針には、指導する際の引き出しがたくさん詰まっている。
- ・イラストがとても分かりやすかった。1人一冊持ちたい。
- ・「身に付けさせたい内容」がはっきり示され、授業構想する場合にすぐに役立った。
- ・学習指導要領に沿った内容であり、系統性が押さえられていたので安心して使えた。

c 「どちらかというと活用しなかった」という答えの感想・要望等

- ・1時間の授業展開を考える際の資料があるとよい。
- ・体育の安全面の押さえや技の技術ポイントの基礎・基本など、経験の浅い教員に必要な情報があるとよい。
- ・冊子として手元にある方が、活用頻度は上がるのではないかな。

d 聞き取りより

- ・運動領域ごとにまとめて紹介されており、小中の系統性を意識した指導助言の際には、大変活用しやすかった。
- ・地区の教育研究会の会合で紹介をした。小学校の体育専科ではない先生方には、イラストで紹介されている学習内容が分かりやすいと話題になっていた。

(1) 経年経験者研修

対象者の指導案や研究授業を分析するとともに、聞き取りを行った。結果は次の通りである。

a 学習指導案や研究授業

学習指導案や研究授業の様子から、多くの対象者が「指針」に示された小中の系統性を意識していることがうかがえた。中には、「指針」にある「静岡県ならではの取組（投力向上に関する事例）」【資料1】を参考に単元計画を立てた対象者がいた。以下の事例は、その実践の様子である。

リレーのバトンを活用した「投げる」運動感覚を養う教具

静岡県ならではの！取組事例



「授業づくり指針」P151（下絵）を参考にした
2年生「ボール投げゲーム」の授業実践の一部です。

【資料1】「静岡県ならではの取組（投力向上に関する事例）」

b 聞き取り調査より

- ・毎時間の授業で、どのような学習活動を取り入れればよいのかが参考になった。
- ・児童のつまずきへの対処法が例示されていたので、あらかじめ確認しておくことで即時的に対応することができた。
- ・学習指導案を作成する際、学年部で共通の資料として活用することで、付けたい力を具体的に意識することができた。

(4) 研究のまとめ

教科等指導リーダーには、年度当初の研修会で「指針」に示された、各運動領域における指導内容の系統性を解説するとともに、自己の授業研究や地区の研修において活用するよう促した。アンケート調査の結果からは、約9割の教科等指導リーダーが自己の授業研究や地区の研修会、あるいは若手教員に対する指導・助言の参考資料として活用できていたと分かる。

経年経験者研修における研修の様子や授業実践から、「指針」は、小中の系統性を踏まえ、付けたい力を意識した単元構想や教材開発の面で参考になったと言える。特に、小学校の運動領域については、指導内容や予想されるつまずきへの支援等がイラストで示されているため、教科書のない体育の運動領域を指導する先生方にとっては、見やすく分かりやすい参考資料であると思われる。さらに、経験の浅い対象者には、「投力向上に関する事例」など、具体的な事例が貴重な資料となり、授業づくりの拠り所にもなっていた。

これらのことから、「指針」を研修等で活用することにより、研修者が各運動領域の系統性を理解し、授業改善に役立てることができていることが分かった。

【平成25年度の取組について】

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 体育／保健体育」(以下、「指針」)を用いて各分野や各領域の系統性を理解することで、授業改善を図ることができる。

平成25年度には、「指針」を「授業支援訪問プログラム」(5年経験者研修)で活用することにより、研修員が各運動領域の系統性等を理解し、自己の授業研究の参考にして、教科指導力の向上を図ることを重点とした。

(2) 研究の方法

ア 研究の期間

平成25年4月から平成26年2月まで

イ 研究の概要

「授業支援訪問プログラム」(5年経験者研修)で「指針」を活用し、その成果や課題を対象者による教科指導力の自己評価やアンケート調査等によって検証する。

ウ 研究の対象

小中学校5年経験者研修の対象者 28人

(3) 研究の内容

ア 活用の仕方

<授業支援訪問プログラム>

(ア) 全体研修

「指針」を活用し、各運動領域における指導内容の系統性を解説するとともに、単元構想や段階的な指導計画の作成について指導する。また、「指針」を自己の授業研究の参考にするよう指導する。

(イ) 授業実践

授業実践は「指針」を活用して作成した指導計画を踏まえて行うよう指導する。また、「指針」

を活用して指導助言を行う。

(ウ) 全体研修

「指針」を活用し、指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案作成について指導する。特に、「指針」の補足資料である「指導と評価の計画を盛り込んだ学習指導案」を参考にして作成するよう促す。

(I) 授業実践

授業実践は「指針」の補足資料「指導と評価の計画を盛り込んだ学習指導案」を参考にして作成した指導計画を踏まえて行うよう指導する。また、「指針」を活用して指導助言を行う。

イ 検証の方法

(ア) 対象者による教科指導力の自己評価

対象者に対し、「授業支援訪問プログラム」の前後に教科等指導力の自己評価を行い、これを基に「指針」の活用の成果や課題を検証する。

(イ) 対象者の授業実践

対象者の研究授業を基に活用の成果と課題を検証する。

(ウ) 対象者の授業を受けた児童生徒に対し形成的評価を行い、これを基に活用の成果や課題を検証する。

(I) 「指針」に関するアンケート調査

対象者に「指針」に関するアンケート調査を行い、これを基に活用の成果や課題を検証する。

ウ 検証の結果

(ア) 対象者による教科指導力の自己評価

a 「授業支援訪問プログラム」実施前（全体研修）

【資料2】の「授業づくり規準 体育／保健体育科」は、体育・保健体育の授業におけるP（構想）D（展開）C（評価）・A（改善）のそれぞれの場面において必要とされる「教科指導力」を整理したものがある。ここでの「教科指導力」は、P（構想）21項目、D（展開）20項目、C（評価）・A（改善）2項目で構成されている。対象者には「授業支援訪問プログラム」の実施にあたり、これまで5年間の授業実践について振り返る機会を設け、現在の授業力（教科指導力）について各項目の自己評価をするようにした。「とてもできている」は4点、「できている」は3点、「あまりできていない」は2点、「できていない」は1点とした。

P（構想）

実態把握	学習者の	1 体育・保健体育に関する児童生徒の既習事項の習得状況等、学習内容の理解度を把握している。
		2 体育・保健体育に関する児童生徒の興味・関心、意欲等を把握している。
		3 健康状態（病気・けが・体調等）や体力面の状況を把握している。（養護教諭・学校医などとの連携）
教科内容に関する知識技能	教科内容に関する	4 学習指導要領、教科書記述の内容分析を通して、教科内容の系統性や指導内容の体系化を理解している。
		5 各領域・単元・種目の特性や魅力を理解している。
		6 教材や指導方法の研究に対して意欲があり、常に新しい知識を身に付けている。
目標の設定	目標の	7 段階的な指導方法について理解し、児童生徒の状況に応じて指導できる技術を持っている。
		8 学習指導要領の目標及び単元の指導目標を観点別評価規準の評価の観点に照らして捉えている。
		9 各領域や単元の目標と児童生徒の実態とを考慮して、適切に目標を設定することができる。
授業計画（単元計画）	単元計画の作成	10 毎時間の授業の指導目標と単元の指導目標とを明確に関連付けている。
		11 学習指導要領の目標及び体育・保健体育の指導目標を達成でき、児童生徒に身に付けさせたい知識・技能が習得・活用できる単元計画を作成することができる。
		12 児童生徒の実態に合わせて、指導内容の明確化・重点化・具体化を図ったり、配列を工夫したりするなどした、単元計画を作成している。
		13 学習指導要領の目標を踏まえ、学年間や校種間の系統性を考慮した計画を立てている。

授業の構成	評価計画	14 指導目標と実際の学習活動と評価が、一体化した評価計画・評価規準を作成することができる。
		15 効果的・効率的な評価計画を作成している。
	学習内容の構成	16 元全体の構造及び指導内容を深く理解した上で、順序性や段階的指導を考慮した学習内容を構成している。
		17 言語活動の充実が図られるような思考・判断を要する場面を想定して学習内容を構成している。
	教材・教具の選択・開発	18 学習指導要領の目標及び単元の指導目標を達成するのに適し、児童生徒の実態に合わせた教材を選択している。
		19 児童生徒の実態に合わせた教材・教具の開発・工夫をしている。
	板書等の計画	20 本時のねらいに即し、授業展開を予測した板書を計画している。
		21 本時のねらいを達成するための有効な働き掛けや個への支援を計画している。

D (展開)

学習環境づくり	1 体育・保健体育の目標や学習内容に応じて、児童生徒が課題解決を図れるような場づくりや教具等を工夫することができる。	
	2 領域や単元の特性を理解し、より安全に楽しく運動が実施できるための施設・用具の管理、設営、準備等をしている。	
学習への指導	3 公正や協力、責任や参画といった態度面の育成や、安全や健康について常に意識させる指導をしている。	
	4 学習の見通しや、学習に関わり、思考・判断したことをまとめるための、ワークシート等の活用が積極的に行えるような指導をしている。	
個や集団への配慮	5 児童生徒個々の学習状況や習熟度、健康状態に応じた手だてを講じている。	
	6 安全面や学習効果に影響がある、個や集団への配慮やペア・グループ編成を工夫している。	
所作・表情・音声	7 安全の確保や学習効果に配慮し、場面に応じた話し方や声の大きさ、表情を工夫することができる。	
	8 運動や健康についての学習に対して、積極的な取組を促す肯定的な態度をとることができる。	
指導技術	言語	9 各領域の基本的な知識として必要な専門的な用語を使っている。
	説明	10 児童生徒のつまづきやすい点を推測し、言葉や図、実際の演技等で、「分かる」ように説明している。
	指示	11 集団を効率よく動かす技術、集中して聞かせる話し方、声の大きさや強弱などを工夫することができる。
	発問	12 ねらいを達成するために、児童生徒の思考を促したり、焦点化したりする発問をすることができる。
	板書	13 学習のねらいと内容が明確になり、児童生徒の思考を促す板書や掲示等を工夫することができる。
	演示	14 児童生徒が知識・技能を習得するために効果のある指導方法を身に付け、手本を示したり、視聴覚機器等を効果的に活用したりしている。
	教材・教具の活用・資料提示	15 児童生徒が知識・技能を習得するために、教材・教具を選択したり、有効な資料を活用したりしている。
	設定量の運動	16 児童生徒の活動の状況を把握しながら、適切な運動量を確保している。
	配慮安全	17 施設・用具や種目の特性による危険な場面を事前に予測し、回避している。
	見学者への配慮	18 可能な範囲で、審判や作戦係・得点係等の役割や、学習を支援するための役割（例・情報機器の使用）を与え、授業に参加させている。
即時的対応	学習活動における	19 児童生徒の発言や行動の意図を読み取り、体育・保健体育の内容や学習方法に照らして理由を付けて認めるなど、意図的に働き掛けている。
		20 授業目標に照らした理解状況や技の習得状況を捉え、目標・課題の設定や指導方法を修正することができる。

C・A（評価・改善）

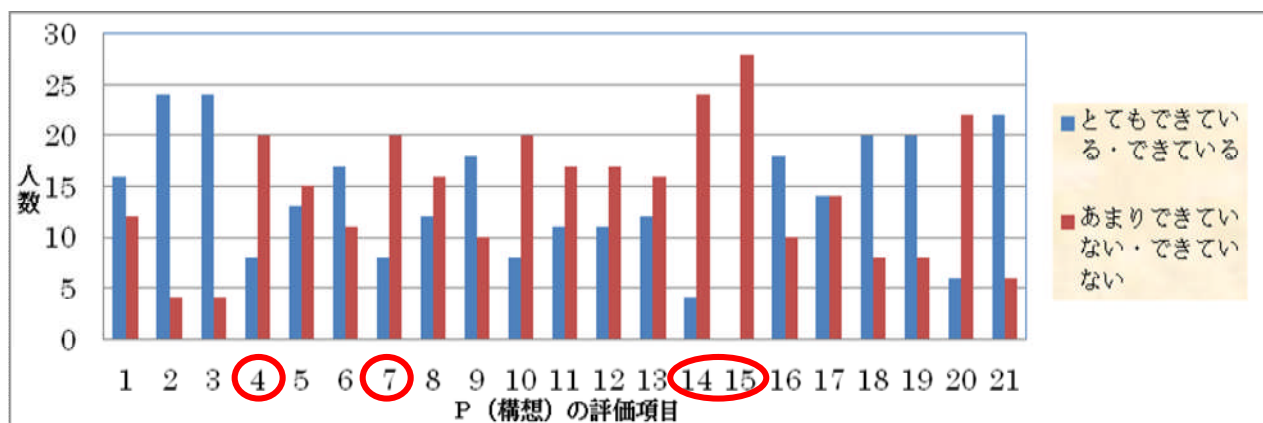
振り返り 分析	1 目標を達成するための指導が有効であったかを児童生徒の姿から振り返り、目標達成の可否の原因を明らかにすることができる。
改善 の手立	2 単元計画や授業構成、指導方法、評価計画等について常に検証し、改善点を明確にし、授業改善に生かしている。

【資料2】「授業づくり規準 体育/保健体育科」を基にした自己評価表

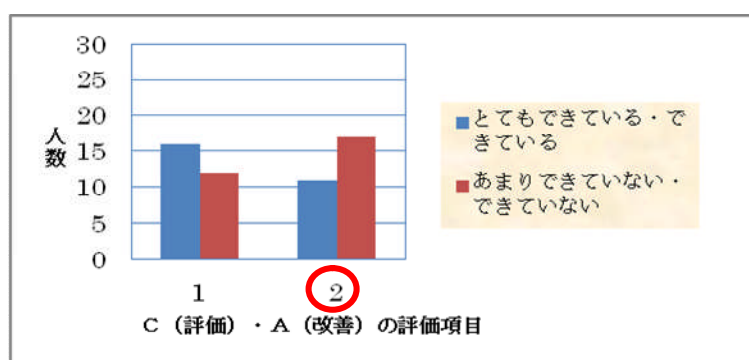
【表1】は、全ての対象者の自己評価をP（構想）、D（構想）、C・A（評価・改善）の各場面別に平均化したものである。これによると、D（展開）に比べ、P（構想）とC・A（評価・改善）の自己評価が低いことが分かる。自己評価が低い値であったP（構想）の項目別の数値は【資料3】、C・A（評価・改善）の項目別の数値は【資料4】の通りである。

要素	点数
P（構想）	2.48 点
D（展開）	2.76 点
C（評価） A（改善）	2.48 点

【表1】各場面の平均点



【資料3】P（構想）の項目別自己評価結果



【資料4】C・A（評価・改善）の項目別自己評価結果

の結果からは、自己の授業を検証し改善点を明確にする（項目2）について、自己評価が低い傾向が見られた。

b 全体研修

特に、指導案作成段階で必要となるP（構想）の力を向上させたいと考えた。「指針」では、各運動領域の系統性を発達の段階を押さえて具体的に示してあるため、対象者の評価が低かった教科内容の系統性や指導内容の体系化、段階的な指導方法・技術の習得についての知識や情報を得るには効果があると予想される。この段階で「指針」を重点的に活用させて

いくことが、研修員の教科指導力育成に効果があると思われる。全体研修 では写真(下)のように、「指針」を活用して単元を構想し、指導計画を立てる時間を設けた。



全体研修 では、P（構想）やC・A（評価・改善）の項目の中で、課題が見られた効果的な指導計画の作成や自己の授業の検証、改善策を見出すことに関する向上を図るための研修を重点とした。「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所）」の見方を解説し、学習活動に即した評価規準を作成した。その際、「指針」の補助資料として「指導と評価の計画を盛り込んだ学習指導案」を5例作成し、参考にした。

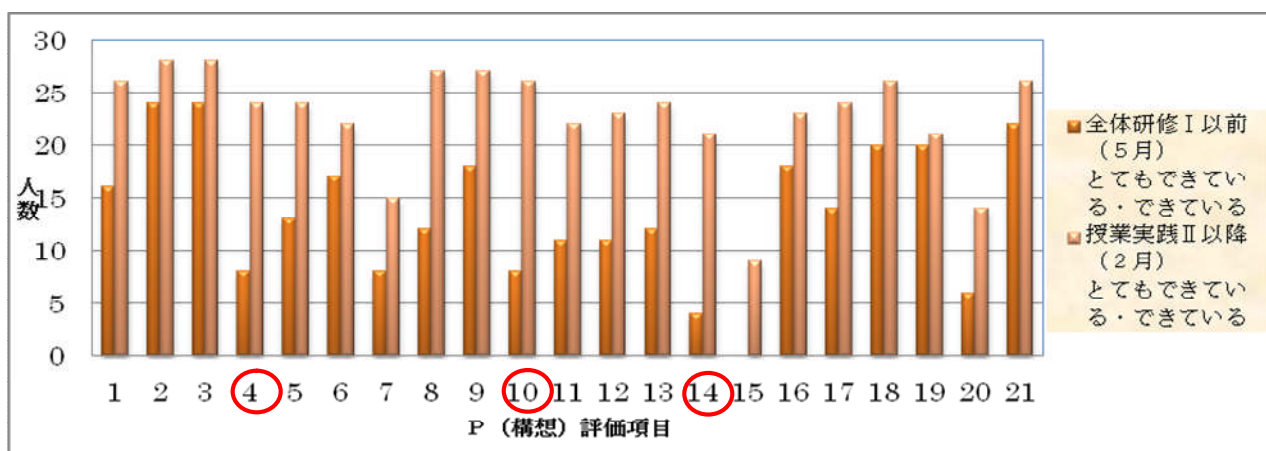
c 「授業支援訪問プログラム」実施後（授業実践 以降）

「授業支援訪問プログラム」の終了後、対象者には実施前と同様に「授業づくり規準 体育／保健体育科」による教科指導力の自己評価を行い、それを実施前の結果と比較した。【表2】は、「授業支援訪問プログラム」実施前と実施後の自己評価の平均点を比較したものである。

要素	実施前	実施後	比較
P（構想）	2.48 点	2.91 点	+0.43
D（展開）	2.76 点	3.1 点	+0.34
C（評価） A（改善）	2.48 点	2.88 点	+0.4

これによると、対象者にとって課題となっていたP（構想）の場面で最も自己評価が高まっていることが分かる。このP（構想）の場面の向上を各項目別に示したグラフが【資料5】である。

【表2】プログラム実施前と実施後の自己評価の平均点



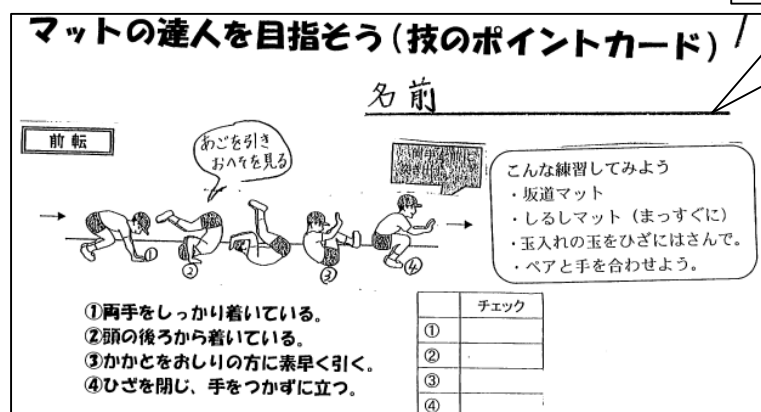
【資料5】プログラム実施前と実施後のP（構想）の項目別自己評価の変容

このグラフから、P（構想）について、いずれの項目とも自己評価の値が高くなっていることが分かる。特に、「項目4 学習指導要領、教科書記述の内容分析を通して、教科内容の系統性や指導内容の体系化を理解している。」や「項目10 毎時間の授業の指導目標と単元の指導目標とを明確に関連付けている。」「項目14 指導目標と実際の学習活動と評価が、一体化した評価計画・評価規準を作成することができる。」等の項目では、大きな伸びが見られる。同様に、D（展開）やC（評価）・A（改善）においても、向上傾向が見られた。

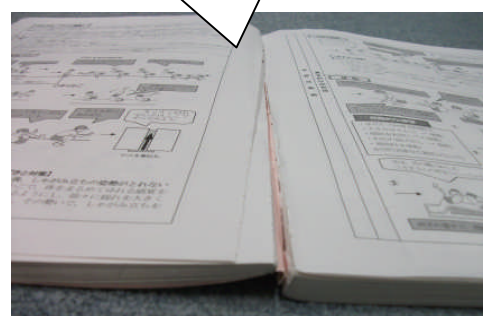
(イ) 対象者の授業実践

全体研修 ・ では、「指針」を活用し、単元構想や段階的な指導計画、指導と評価の一体

化を図った学習指導案を作成する研修を行った。対象者の中には、「指針」にある「マット運動の学習活動例」を活用し、児童の学習カードを作成した者もいた。【資料6】はその学習カードである。この学習カードは、対象者が「指針」のイラストに技のポイントを書き込み作成したものである。これは一例であるが、他の対象者においても「指針」を積極的に活用したことがうかがえる授業実践が行われた。



【資料6】対象者が作成した学習カード



この対象者のように「指針」を活用したことにより授業改善が進み、自己の教科指導力についても肯定的に受け止めるようになった対象者が多く見られた。

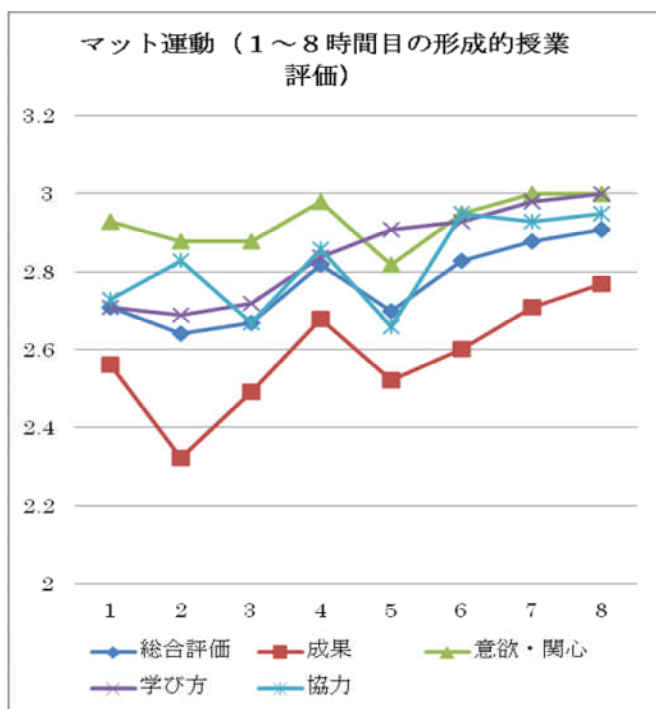
(ウ) 対象者の授業を受けた児童生徒による形成的授業評価

【表3】は「形成的授業評価表」である。今回、対象者の授業を受けた児童生徒に、毎時間これを用いた授業評価を行うよう依頼した。

体育授業についての調査		評価項目
1	深く心に残ること、感動することがありましたか。	はい どちらでもない いいえ
2	今までできなかったこと(動作や作戦)ができるようになりましたか。	はい どちらでもない いいえ
3	「あっ、わかった!」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。	はい どちらでもない いいえ
4	精いっぱい、全力をつくして運動することができましたか。	はい どちらでもない いいえ
5	楽しかったですか。	はい どちらでもない いいえ
6	自分から進んで学習することができましたか。	はい どちらでもない いいえ
7	自分のめあてにむかって何回も練習できましたか。	はい どちらでもない いいえ
8	友達と協力して、なかよく学習できましたか。	はい どちらでもない いいえ
9	友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか。	はい どちらでもない いいえ

【表3】「形成的授業評価表」

次ページの【資料7】は、イで紹介した対象者の授業を受けた児童(小学校第4学年)による形成的授業評価である。これによると、単元の終末に進むに従って「意欲・関心」や「協力」といった態度形成に関わる資質、「学び方」といった「思考・判断」の能力、「成果」といった児童が実感した「技能」の習得や向上という自己評価が高まっていることが分かる。また、【資料8】は、中学校第3学年「陸上競技 長距離走」の授業実践における生徒による形成的授業評価である。「指針」にある「静岡県ならではの」取組で紹介した課題解決学習の方法を参考にして、生徒の「思考・判断」の能力の育成に力を入れた実践の結果である。



【資料７】小学校第４学年

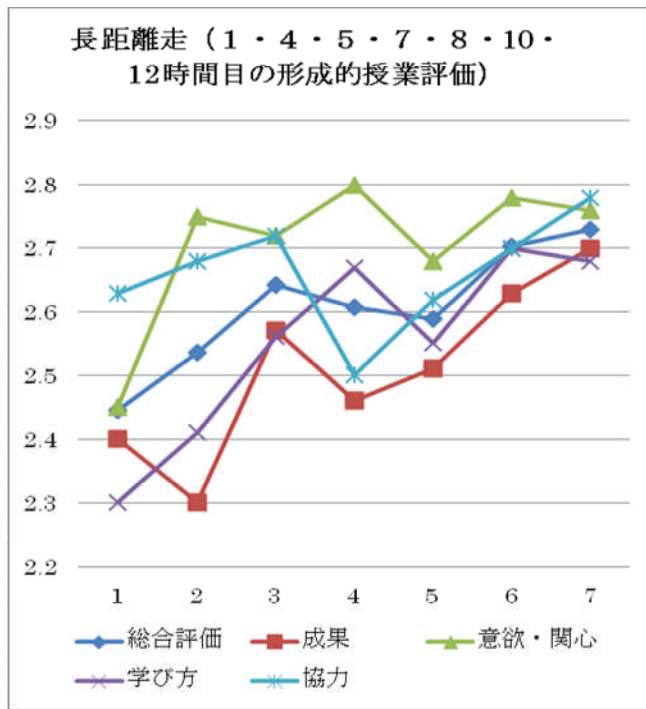
(I) 「指針」に関するアンケート調査

全体研修の終わりに対象者全員にアンケート調査を行った。アンケート調査の結果は次の通りである。

a 授業の構想時の「指針」の活用状況

あなたが、授業実践の準備で(P構想)活用した資料等に○を付けてください。(複数回答可)	
学習指導要領解説	27人
評価規準の作成・評価方法の工夫改善のための参考資料	8人
静岡県の授業づくり指針	28人
小学校まるわかりハンドブック	6人
その他	9人

【資料８】中学校第３学年

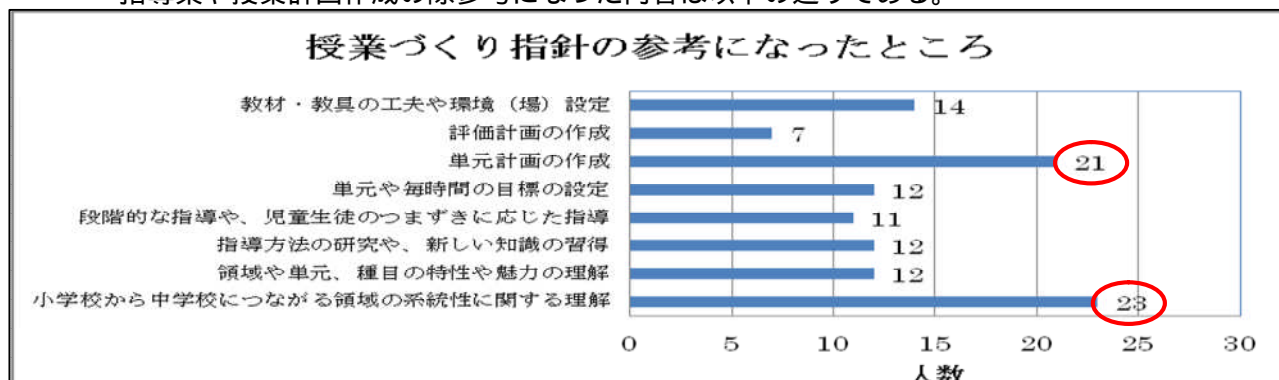


【表４】は、P（構想）時における「指針」の活用状況である。研修で「指針」を重点的に使用したことも影響していると思われるが、研修員それぞれが学習指導案作成時には「指針」を積極的に活用したことが分かる。

【表４】構想時における「指針」の活用状況

b 「指針」の活用にあたり、参考になった内容

指導案や授業計画作成の際参考になった内容は以下の通りである。



【資料９】「指針」の活用にあたり参考になった内容

【資料 9】より、活用にあたって参考になった内容は、多くが「小学校から中学校につながる領域の系統性に関する理解」、「単元計画の作成」であることが分かった。このことから、研修員にとって「指針」が、全体研修（「指針」活用前）での自己評価の値が低い、教科内容の系統性等に関する理解や段階的な指導方法等に関する知識を助ける資料となっていることが分かる。

(4) 研究のまとめ

ア 成果

「授業支援訪問プログラム」(5 年経験者研修)で「指針」を活用し、各運動領域における指導内容の系統性を解説するとともに、単元構想や学習指導案を作成する研修を行った。その結果、プログラム実施前後における対象者の「教科指導力」に関する自己評価に大きな変容が見られた。授業を構成する際の P D C A それぞれの場面において多少の程度の差はあるものの、どの場面でも実施前に比較して実施後の自己評価が高まった対象者が増加した。つまり、対象者が自己の「教科指導力」を肯定的に受け止めるようになったということである。この 5 年経験者研修では、2 回行う全体研修で「指針」を目的に応じて活用し、研修員にとって苦手意識の強かった項目の評価を向上させることができた。その苦手意識の強い項目は、「指針」で分かりやすく示した「小学校から中学校につながる領域の系統性に関する理解」の内容でもあったため、研修員にとって「指針」の活用は有効であったと考えられる。

小中のつながりを踏まえた領域や教材の系統性を理解し、単元で身に付けさせたい力を明確にして児童生徒の実態に即した単元を構想するという、P (構想) の場面での「指針」の活用が特に有効であり、結果として授業改善が図られたと考えられる。さらに、児童生徒の体育・保健体育の授業に関する授業評価の向上や技能の習得にもつながると思われる。

イ 課題

対象者の自己評価が低かった項目に「単元の評価計画」がある。全体的に、これまで 5 年間の経験の中で、評価規準作成の意義や価値への認識が薄く、本研修で初めて評価規準を盛り込んだ学習指導案を作成したという研修員が数多くいた。「指針」には、十分な評価計画作成のための資料が掲載されていないため、全体研修では補足資料として「指導と評価の計画を盛り込んだ学習指導案」を参考にして演習を行うこととした。この演習で、あらかじめ評価計画を立てて授業を展開することにより、対象者の「教科指導力」の評価は向上した。「指針の参考になったところ」のアンケート調査でも、評価計画の作成であまり活用されていない結果が出ている。今後、目標と評価の一体化を意識できるような指導と評価の計画を立てられるような手順や参考となる資料等を作成し広く発信していく必要がある。

また、「指針」の小学校の内容には具体的な学習活動を掲載しているが、初任者など経験の浅い教員や専門外の教員にとって、単元構想する際にそれらの材料をどのように組み立てれば確かな力の付く授業と評価の計画を作成できるのかが難しい。補足資料として作成した「指導と評価の計画を盛り込んだ学習指導案」に加え、今後は、毎時間の授業づくりの参考となるような「単元目標と毎時間の指導と評価の計画例」を補充していく予定である。

9 技術・家庭科（技術分野）

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針」（以下、「指針」と示す）を用いて学習指導要領の目標と内容を具体化したり明確化したりすることで、授業改善を図ることができる。

(2) 研究の方法

ア 研究の進め方

「悉皆研修、希望研修、学校等支援研修における活用及び活用方法の提案」及び「教科等指導リーダーと共同での効果的な活用事例の開発及び提案」として、以下の研修において「指針」を活用し、その有効性を探った。

- ・ 5年経験者研修（全体研修2回及び授業実践2回）
- ・ 希望研修『技術・家庭科（技術分野）の授業づくり研修』
- ・ 教科等指導リーダー研修会（2回）

イ 検証の方法

(ア) 調査対象者数 合計 17 人

- ・ 5年経験者研修（2人）
- ・ 希望研修『技術・家庭科（技術分野）の授業づくり研修』（5人）
5人の内、2人は5年経験者研修対象者。1人は免許外担当者。
- ・ 教科等指導リーダー研修会（静東6人、静西6人 計12人）

(イ) 手順

以下の手順・方法で検証する。

< 5年経験者研修 >

手順：全体研修（5月）にて、今までの授業実践の振り返るとともに、題材を見通した授業づくりのポイントを研修し、自己課題を明確化した。それらを踏まえ、授業実践（6月）を行った。全体研修（10月）において、授業実践での成果と課題を振り返り、授業実践の構想へとつなげ、その後、授業実践（11月）を行った。構想・展開・評価・改善というPDCAサイクルで研修を深めた。

方法：研修の始め・中・終わりの場面で3回アンケートを実施し、授業づくりに関する意識の変化や「指針」の活用状況の変化等を確認した。また、授業実践において作成した学習指導案等から、その変容を基に検証した。

< 希望研修 >

手順：技術分野における授業づくり（言語活動の充実）を主とする研修会を行った（8月）。研修で学んだことが、その後どのように生かされたかを追跡調査（12月）にて確認した。免許外担当者については、追跡調査の一環として、所属校へ訪問して授業参観（1月）を行った。

方法：研修内でアンケートを行い、「指針」の活用状況を確認するとともに、「指針」を用いて、具体的な解説やポイントを押さえた。追跡調査にて、研修後の授業づくりにおける「指針」の活用状況を把握するとともに、研修当日との変容を確認した。免許外担当者については、日頃の授業実践上の悩み等を聞きながら、「指針」を活用して、具体的な解決方法を示したり、授業づくりのポイントを説明したりした。後日、授業参観を行い、その有効性を検証した。

< 教科等指導リーダー研修会 >

手順：研修会（５月）にて、自校や各地区における現状や授業改善の方向性を確認した。それを受け、自校や各地区での実践等を経て、研修会（１月）で、その成果を検証した。

方法：研修会（５月）における協議等から、各地区の現状を把握した。研修後、自校や各地区において実践等を重ねた。研修会（１月）時に、その取組をアンケートで振り返り、実践した指導案等を基に、その有効性を検証した。

(3) 研究の内容

ア ５年経験者研修

(ア) 授業づくりに関する意識の変化

全体研修（５月）全体研修（１０月）全研修終了後（１２月）の３回、アンケートを実施した。アンケートは、【資料１】授業づくり規準を基に作成し、以前の回答が見られない状態にして、２・３回目のアンケートを実施した。

(6) 授業づくり規準(技術・家庭科:技術分野)

P (構想)		
要素	学習指導力 (授業における姿勢や指導方法等、 各教科等共通の授業づくりの力)	新科指導力 (技術分野の内容に関わる授業づくりの力)
学習者の 実態把握	学習者の発達段階を踏まえた上で、生活体験や学習経験は学習者によって異なることを意識している。 学習の方法や理解の仕方は学習者によって異なることを意識している。 学習者の性格や学習に対する意欲等を把握している。 学習集団の特質や、個と集団の関わりを把握している。 個々の学習者に対して、指導上配慮すべき事項を把握している。	技術分野に関する生徒の既習事項の習得状況等、学習内容の理解度を把握している。 技術分野に関する生徒の興味・関心、意欲等を把握している。 技術分野に関する生徒の特性や生活体験等を把握している。
教科内容に関する知識・技能		小学校における学習を踏まえ、他教科等との関連を明確にして、系統的・発見的に指導ができるよう配慮している。 題材の本質を理解している。 教科内容に関わる知識や技能、探究するための態度・技能を持っている。
目標への対応	学習は、学習者自身の主体的・探究的な活動によって成立することを理解している。 学校の教育目標や課題を踏まえ、育てたい力を捉えている。	学習指導要領の目標及び題材の指導目標を明確に把握し、観点別評価規準の評価観点に照らして捉えている。

場面	項目	研修員A			研修員B		
		全体研修Ⅰ	全体研修Ⅱ	最終	全体研修Ⅰ	全体研修Ⅱ	最終
P	学習者の実態把握	3	3	4	3	3	3
	教科内容に関する知識・技能	2	3	3	2	1	2
	目標の設定	2	2	3	2	2	3
	授業計画	3	3	2	1	2	2
	授業の構成	2	2	3	2	2	3
D	学習環境づくり	3	3	3	3	3	2
	学習への働きかけや学びの指導	2	2	3	3	3	3
	個や集団への配慮	2	2	2	2	3	3
	音声・表情・所作等	3	3	2	3	3	3
	指導技術	3	2	2	2	2	2
CA	学習活動における目的対応	3	3	3	3	2	2
	授業の振り返りと分析 改善に向けた手立て	2	3	3	2	2	2

【資料１】授業づくり規準（技術分野）の一部

【資料２】授業づくり規準を用いた授業づくりに関する意識の変化（PDCA別）

自分の授業実践を以下の４段階で評価した。

「４：よくできている。」「３：できている。」

「２：あまりできていない。」「１：ほとんどできていない。」

PDCA 別の平均	研修員 A 全体研修 → 最終	研修員 B 全体研修 → 最終
P (構想)	2.4 → 3.0	2.0 → 2.6
D (展開)	2.7 → 2.5	2.6 → 2.5
C・A (評価・改善)	2.5 → 3.0	2.0 → 2.0

【資料３】授業づくり規準を用いた授業づくりに関する意識の変化（PDCA別）

(イ)「指針」の具体的な活用状況と授業づくりにおける変化

第2章 技術・家庭科(技術分野)	研修員A			研修員B		
	よく使った	使った	あまり使わなかった	よく使った	使った	あまり使わなかった
1 改訂の趣旨と内容について		○			○	
2 評価の観点及びその趣旨	○				○	
3 技術の目標と内容						
A 材料と加工に関する技術	○			○		
B エネルギー・資源に関する技術	○			○		
C 生物育成に関する技術	○			○		
D 情報に関する技術	○			○		
4 3学年間を見通した指導計画の作成と内容の取扱い	○			○		
5 言語活動の充実	○			○		
6 安全に関する手引		○		○		
7 参考資料						
(1) 評価標準の設定例を基にした観点別評価一覧表	○				○	
(2) 小学校や中学校の他教科とのつながり		○			○	
(3) 「情報」に関わる小学校とのつながり	○				○	
(4) 身近にある「技術が生かされたもの」		○			○	
(5) 地域における素材探し					○	
(6) 授業づくり標準		○		○		

全研修終了後に、アンケートを実施し、技術分野に関わる内容で活用した部分を調べ、一覧とした。

【資料4】具体的な活用状況

項 目		研修員A			研修員B		
授業づくり指針活用		全体研修Ⅰ	全体研修Ⅱ	最終	全体研修Ⅰ	全体研修Ⅱ	最終
		あまり活用していない	よく活用する	よく活用する	あまり活用していない	時々活用する	時々活用する
授業構想での参考資料		他校教師の授業実践	○教材の付属資料 ○自分で調べた情報 ○授業づくり指針		他校教師の授業実践 地区研修	他校教師の授業実践 ○書籍 ○授業づくり指針	
困っていること・悩んでいること	授業づくり	・目的や目標が達成しているかの判断基準	・生物育成の時期	・3年生、内容のつながりを持たせにくい ・大型TVが少ない	・題材計画(目標設定) (題材の選定) ・教具のない時のやり方	・専門知識の少なさ	・専門知識がまだ不十分だと感じる。 ・題材を通しての計画 ・教科として押さえること ・生徒の創意工夫や技能を十分に引き出せているか ・技術の楽しさを伝えられているか
	時間		・教材研究の時間確保				
	管理上・ハード面	・技術室の設備不足 ・使いたいソフトを手軽にダウンロードできない	・管理教室の多さ ・工具が揃っていない	・管理教室の多さ ・使いたいソフトを手軽にダウンロードできない	・教室整備		

【資料5】活用状況の変化に伴う授業づくりの変容

- ・アンケートの回答をまとめたものが【資料2】である。継続的に研修を重ねる中で、P(構想)の項目において、研修員の意識が高まったことが分かる。「目標の設定」「授業の構成」については、両研修員とも変容が見られ、特に意識が高かった項目である。
- ・PDCA別における変容を【資料3】に示す。P(構想)において、大きな伸びが見られた。一方、D(展開)では、両研修員とも平均値が下がった。これは、5年経験者研修(授業支援訪問プログラム)として、授業実践を指導主事が学校訪問した場で行うことにより、直接指導を受ける機会があり、参観した授業における具体的な場面を捉えた実践的な研修となったため、実践上の課題をより明確に感じることができたためと考えられる。
- ・「指針」の具体的な活用状況を【資料4】に示す。「技術の目標と内容」や「3学年間を見通した指導計画の作成と内容の取扱い」「言語活動の充実」で使用が多かった。
- ・【資料5】から分かる活用状況の変化に伴う授業づくりの変容として、授業構想時の参考資料として、地区内や他校の先生方の実践をあげた研修員が、「指針」や自分で調べた資料・書籍等を参考にするようになった。生徒の実態を踏まえた授業構想となるよう教材研究の視野が広がったと考えられる。授業づくりの悩みについては、研修の最終段階では、題材を見通しての指導計画づくりや学習内容のつながり等が挙げられ、開始時と比べて変化が見られた。これは、5年経験者研修の目標でもある『題材を見通した授業づくり』に迫る内容であり、研修を通して、研修員の意識の高揚と教科の本質への着眼が図られたといえる。

以上のことより、5年経験者研修における「指針」活用の成果として、特にP（構想）における授業力向上の姿が見られた。課題としては、PDCAサイクルにおけるD（展開）やC・A（評価・改善）における授業実践と連動した授業力の向上があげられる。

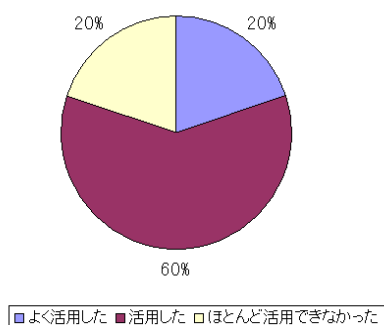
イ 希望研修

(ア) 研修当日のアンケートより

「技術分野における言語活動の充実」を目的とした研修会の講義や演習の場面で、「指針」を活用して説明したり、今後へ向けた授業構想を考える際に使用してみたりした。研修当日のアンケートでも、「言語活動について、指導の方向性が見えてきた。これからの授業が楽しみ。」「言語活動の視点から、日頃の授業を振り返ることができ、これからの授業に向けても、見通しを持つことができた。」「技術分野の言語活動について、具体的に何を示しているのかが分かり、スッキリした。」等の記述が見られ、「指針」を活用したことにより、研修内容の理解や定着において有効であったことが分かる。

(イ) 追跡調査によるアンケート結果

「授業づくり指針」の活用状況



希望研修終了後の日々の授業づくりにおける「指針」の活用状況を調査した。「よく活用した・活用した」を合わせて80%という結果であった。

【資料6】希望研修（研修員）における活用状況

内容や項目を考えて授業構成する際に、授業での評価項目がはっきりと分かるようになった。豊富な事例や授業構成の例も載っていたため、授業を考える上でとても役に立った。授業の組み立て方について、違うパターンの発想で展開を考えることができる。研修を通して、活用できそうな内容が分かったので、活用するために身近に置いておきたい。授業で押さえないポイントについて確認ができる。

【記述1】「指針」活用の成果＜追跡調査より＞

【D】「材料と加工（1年生）」の内容で、アイデア作品の設計図を描き、材料取り図を描く授業を行った。その設計図を見ながら、私と生徒が、考えを共有し、助言および改善をし、よりよい作品を作る学習となった。

【P】生徒同士が関わり、意見を出し合い一つのものを作っていくことも言語活動に当てはまると分かったため、いくつかのやってみたい題材が浮かびました。

- ・木工による棚製作の場面で、お互いの棚を評価したり、値段をつけあったりすることで、その価値が高まるのではないかと考えた。
- ・少人数で複数の時計ブロックを制御し、カラーLEDやサウンドを出力するタイミングを考えて、表現する活動をやってみたい。
- ・いちご栽培において、温度環境を考えて対策を施す時に、その方法を出し合い、グループで製作してみたい。

【P、D】製作計画書には、「他者からの意見」の欄を用意し、自分の思いだけでなく、実現可能かどうか意見を取り入れながら活動させた。活動後には「製作品の使用報告書」を提出させ、活用までの意識を高めさせた。

【P、D】「生物育成」の学習においては、二度のチンゲンサイの栽培において、評価・活用の場面を設定し、一度目の反省を二度目に生かすような活動を行った。設計（栽培計画）段階においては、ワークシート（栽培計画書）に一度目からの改善点と二回目の目標、達成に向けての具体的な活動等を書かせ、評価・活用の段階を具体的に示させた。

【P、D】プログラミングの授業において、生徒に相互評価させたりアドバイス交換をさせたりする授業構想を用い、生徒が互いをフォローしたり評価したりできた。

【記述2】授業づくりにおける具体的な実践事例＜追跡調査より＞

・追跡調査により、「指針」活用の成果として記述されたものを【記述1】に示す。「指針」を活用して深めた理解に加え、学習活動例等を参考に自校に合った構想につなげた様子がつかめた。

・具体的な実践事例が【記述2】である。「指針」を活用して研修を行った成果として「付けたい力」の定着に向けた活動を自分で構想し、それに合ったワークシート【資料7】の作成が行われた。具体的な言語活動の設定に関し、P（構想）のみならず、具体的なD（展開）までつながった事例である。定められた授業時数の中で、教科として「付けたい力」を生徒に定着させるために授業改善をいかに図っていくかという視点から、具体的な取組が変化した様子が明らかとなった。

栽培計画書

（ ）年（ ）組（ ）番 名前（ ）

作物名【 チンゲンサイ 】

○作物の生育条件・特徴	○栽培条件（場所、気温、作業可能日など）
○前回から改善すべき点	
○目標（できれば、大きさ、重さ、柔らかさ、葉や茎の様子など）	
○目標の達成に向けて（具体的な活動）	

【資料7】作成されたワークシート例

以上のことより、希望研修における「指針」活用の成果として、研修目的の「技術分野における言語活動の充実」の理解を促すだけでなく、研修を深めることになった。また、研修後の日々の授業づくりにおいても継続的に活用し、具体的な言語活動の場面設定に生かしたり、意欲的に構想・授業実践したりする姿につながっていた。研修会の中で、「指針」を活用する意図やそのよさをつかむことができたことが、自校に戻った後も継続的に活用できた要因と考える。

課題としては、今後も広く「指針」のよさを伝え、活用を推進していく体制を作っていくことである。

(り) 免許外担当者

希望研修に参加した免許外担当者に対して、日々の授業実践における課題等を聞きながら、「指針」を活用して演習を行った。

用具の安全指導

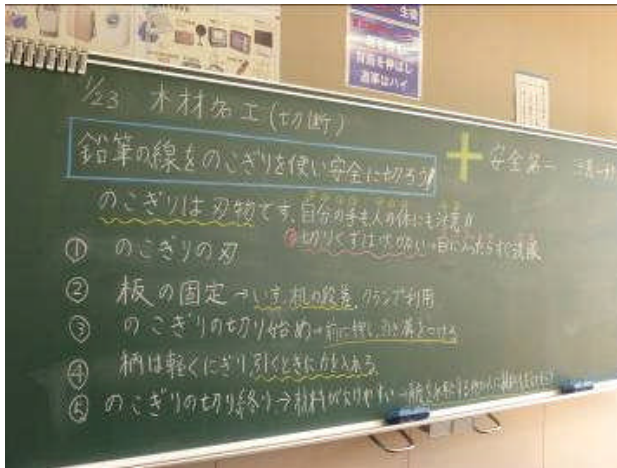
（指針 P.81 両刃のこぎり P.82 かんな P.83 げんのう P.84 釘ぬき、きり）
（P.85→はんだごての作業上の注意することを意識した授業が展開することができた）

健康（目の健康（ドライアイ対策）指針 P.88 コンピューター操作について）

→ 自分が気付かなかった健康面の注意が分かり、その後、注意することができた。

【記述3】「指針」活用の成果＜追跡調査より＞

< 参観した授業において >



【資料 8】「指針」を参考にした板書



【資料 9】整頓された工具類



【資料 10】安全に配慮した指導場面

「指針」に示されている工具を使う際のポイントを板書し、生徒の安全について配慮がされていた。【資料 8】

また、「指針」に示されている安全管理に関連し、日常的に工具の整頓がされている様子が見られ、実習時の作業スペースも確保されていた。生徒にとって、必要な工具が使いやすく揃っており、自然と工具を大事に扱うことやものを大切にする気持ちを育む環境として整えられていた。【資料 9】

工具や工作機械の使用上の注意事項を生徒に伝えるのみでなく、実際の作業場面では、必要に応じて生徒を支援することができていた。生徒自身にも安全に対する意識が育ってきており、丁寧に作業する姿が見られた。【資料 10】

以上のことより、免許外担当者における「指針」活用の成果として、生徒の作業における安全面の確保のための参考資料として、「指針」の安全に関する内容が役に立っていることが実証された。実際の指導場面において、何に注意し、何を指示すればよいか把握しやすく、実践に生かせたという感想をもらった。押さえる手の位置を確認して取り組む等、安全面への意識が高まるとともに、生徒自身が、正確な作業ができていた。

技術室の環境設定において、「指針」が、「工具をどのように整頓し使いやすい状態を維持していくか。」「生徒の作業場面での安全配慮をどのようにしていくか。」「学習指導要領の内容や工具・工作機械の正しい使い方等を確認する。」などの参考資料となった。

一方、課題としては、題材として何を扱い、どう学習を進めていくかが難しいという声を聞いた。より具体的な資料について情報提供できれば、更なる授業改善が図られる。

ウ 教科等指導リーダー研修会

<リーダーの研修（インプット）>

教科等指導リーダー研修会（５月）において、「指針」を配付した。協議「授業改善」において、活用の目的、地区研修や自己研修での活用方法について共有した後、「指針」の活用について意見交換した。

<リーダーの実践及びリーダーからの指導（アウトプット）>

教科等指導リーダー研修会 「顧問等の授業づくり指針」に関するアンケート

所属（ ） 学校（ ） 氏名（ ）

1 授業づくりにどのように活用するか。
 1 4 3 2 1
 ① 生徒の既習事項や学習内容の把握 4 3 2 1
 ② 小学校における学習を踏まえた系統的・発展的な指導 4 3 2 1
 ③ 学習指導要領の目標の把握 4 3 2 1
 ④ 3 学年間を見通した随時評価の作成 4 3 2 1
 ⑤ 随時評価に合った学習指導の作成 4 3 2 1
 ⑥ 生徒の理解に合わせた随時評価の作成 4 3 2 1
 ⑦ 「言語活動の充実」「量規の活用等との関連」「技術に関わる論理」を意識した授業づくり 4 3 2 1
 ⑧ 実践的・体系的な学習活動を取り入れた授業づくり 4 3 2 1
 ⑨ 問題解決的な学習を取り入れた授業づくり 4 3 2 1
 ⑩ 随時評価の活用・開発 4 3 2 1
 ⑪ 生徒の思考の深まりが明確になる随時評価 4 3 2 1
 ⑫ 生徒の行動や態度を評価し、安全や安心に配慮した学習環境の創造 4 3 2 1
 ⑬ 生徒の安全を最優先とした工具類の点検やメンテナンス 4 3 2 1
 ⑭ 安全管理への配慮、事故防止への指導 4 3 2 1
 ⑮ 技術分野での指導に適切な言語（言葉や図表、概念等）の使用 4 3 2 1
 ⑯ 生徒の思考を促したり活性化したりする発問 4 3 2 1
 ⑰ 授業を振り返り、目標の達成の可否の原因の追究 4 3 2 1
 ⑱ 教科指導について振り返り、改善策を具体的に話し、授業改善に生かす（全体を通して） 4 3 2 1

「自分自身の授業力向上に役立ったか（役立ったか）」
 4 授業力向上に大いに役立った 3 授業力向上にまあまあ役立った
 2 授業力向上にあまり役立たない 1 授業力向上に全く役立たない

2 相手の指導力向上に役立ったか、相手の指導力向上にどのように活用できるか。

教科等指導リーダー研修会（１月）において、年間の活用状況を授業づくりのPDCAサイクルに基づいた視点でアンケート調査【資料10】を行った。調査項目は、P（構想）に11項目、D（展開）に5項目、C・A（評価・改善）に2項目、合計18項目である。結果を以下に示す。

【資料10】PDCAサイクルに基づく年間の活用状況アンケート

(ア) PDCA別の活用状況

授業づくりにおけるPDCAの視点から検証した。それぞれの場面ごとの平均数値を示す。回答数値は「4 よく活用する」「3 時々活用する」「2 あまり活用しない」「1 全く活用しない」である。（回答人数12人）

P（構想）	D（展開）	C・A（評価・改善）
2.7	2.8	2.6

- ・授業を構想するときにはまず開く。学習指導要領解説の解説といった感じで分かりやすい。また、工作機械の安全に関しては、自らの取組の振り返りや安全点検に役立てている。
- ・小学校や他教科とのつながりを確認することで、授業づくりに役立つことが分かった。
- ・今後は、評価や改善にも活用していきたい。
- ・生徒の安全は、授業を行う上で最優先される事項であるので、その部分を活用している。
- ・題材を考えたり指導案を作成したりするときに、とても参考になった。イメージが明確になり展開や活動に幅ができた。

【記述4】教科等指導リーダーの振り返り

(イ) 自分自身の授業力向上への有効性

授業実践するに当たり、自身の授業力向上への有効性を客観的に判断したときの結果は以下の通りである。なお、回答数値は「4 大いに役立つ」「3 役立つ」「2 あまり役立たない」「1 全く役立たない」であり、ここでは平均値を示す。(回答人数 10 人)

3.5

(ウ) 若手の指導力育成への有効性

地区における活用の有効性について自由記述形式で回答した。教科等指導リーダー事業の目的の一つである若手育成に視点を絞っての回答を求めた。

- ・ 授業づくりの根拠となる学習指導要領を分かりやすく再構成している部分は若手にとって分かりやすく、自分たちリーダーが内容を伝えるときにも役立つ。
- ・ 学習指導要領を読み説く際に役に立つ。若手ばかりでなく、中堅教員や免許外で担当する先生にも有効に活用できる。
- ・ 授業で付けたい力は何かが確実にとなるとともに、指導の手立ても参考になる。
- ・ 学習指導要領のねらい、評価、安全面に関して大変有効であり役立つ。
- ・ 小学校や他教科とのつながり、学習活動例は特に熟読する必要がある。授業づくりに大いに活用できる。
- ・ 安全面の確認ができる。安全管理と安全指導の視点が持てる。
- ・ 本時の目標や指導の重点、観点別評価について実際に若手と確認する資料として活用した。
- ・ これから技術科教員を目指す若手にも活用できるとよい。

【記述 5】地区における活用の有効性

(I) まとめ

教科等指導リーダー研修会を通して、学習指導要領の目標と内容を具現化できる授業は、子どもが主体的に学習する授業につながっていることが分かった。

授業を P D C A サイクルで検証することによって、D (展開) が充実しているものは P (構想) が充実している。逆についてもいえる。さらに、C・A (評価・改善) とのつながりもある。それぞれの関連性が重要であることが明確になった。「指針」は、この関連性の基に作成されている。現場の先生方はそれを実感し、授業づくりにおいて有効な資料として評価している。

また、個人の授業力向上だけでなく、地区での授業力向上においても効果的な参考資料であることが明らかになった。「指針」の更なる活用を図っていくことが今後の課題である。

(4) 研究のまとめ

研修員の意識の変化や記述、研修会での協議等から、特に授業構想の場面において有効であることが明らかとなった。「指針」のよさや活用方法を研修の中で具体的に学び、それを意識的に日常の授業づくりへつなげる姿が見られた。授業者として、授業づくりのポイントを明確にできたことで、様々な授業構想アイデアも浮かび、授業力の質的向上が見られた。

地区における若手育成等の場面においては、「指針」がリーダーと若手をつなぐ資料となっていた。学習指導要領解説の内容を更に分かりやすく、具体的にした事例等の情報は、実際の授業をイメージすることを容易にし、地区における授業改善を支え、教師の授業力向上に寄与していた。

免許外担当者にとっては、正しい工具の使い方や安全面に関する不安が大きい。実際に様々

な工具や工作機械を使う場面があり、その不安を少なくする上で、「指針」に記述された内容が分かりやすく、実際の授業においても、すぐ生かせていた。

以上のことより、「指針」を用いて学習指導要領の目標と内容を具体化したり明確化したりすることで、授業改善の一助となっていることが確認できた。また課題としては、P（構想）における「指針」活用の成果を、D（展開）やC・A（評価・改善）へとつなげていくことが挙げられる。日々の授業づくりにおける参考資料として、更に多くの人に活用してもらえよう、継続的な働き掛けをしていく必要もある。

10 家庭 / 技術・家庭（家庭分野）

(1) 研究の仮説

「静岡県の授業づくり指針 家庭 / 技術・家庭（家庭分野）」（以下「指針」と示す）を用いて適切な評価の在り方について理解することで、授業改善を図ることができる。

(2) 研究の方法

ア 研究の進め方

(イ) 悉皆研修、希望研修、学校等支援研修における活用及び活用方法の提案

5、10 年経験者研修、教科等指導リーダー研修において、指針に掲載されている「評価の設定例」を取り上げ、適切な題材計画の在り方を理解する講義や演習を行い、研修員の授業力向上への有用性を探る。

イ 検証の方法

(ア) 対象

5 年経験者研修員、10 年経験者研修員、「家庭科の授業づくり研修」参加者、家庭科の教科指導リーダー、地区教科研修参加者（A 地区）

(イ) 手順

- ・対象者に対して、「家庭科の授業づくり」や「評価」に関するアンケート調査を行い、困り感や抱えている課題などの実態をつかむ。
- ・各研修において「指針」を活用した講義や演習を行う。
- ・研修後に「家庭科の授業づくり」に関するアンケートを実施し、研修員の授業改善に対する変容を捉える。
- ・「家庭科の授業づくり研修」への参加者には、追跡調査から授業改善に対する変容を捉える。
- ・研修を受けた後の指導案や授業実践の内容から授業改善に対する変容を捉える。

(3) 研究の内容

ア 研修前の研修員の実態調査

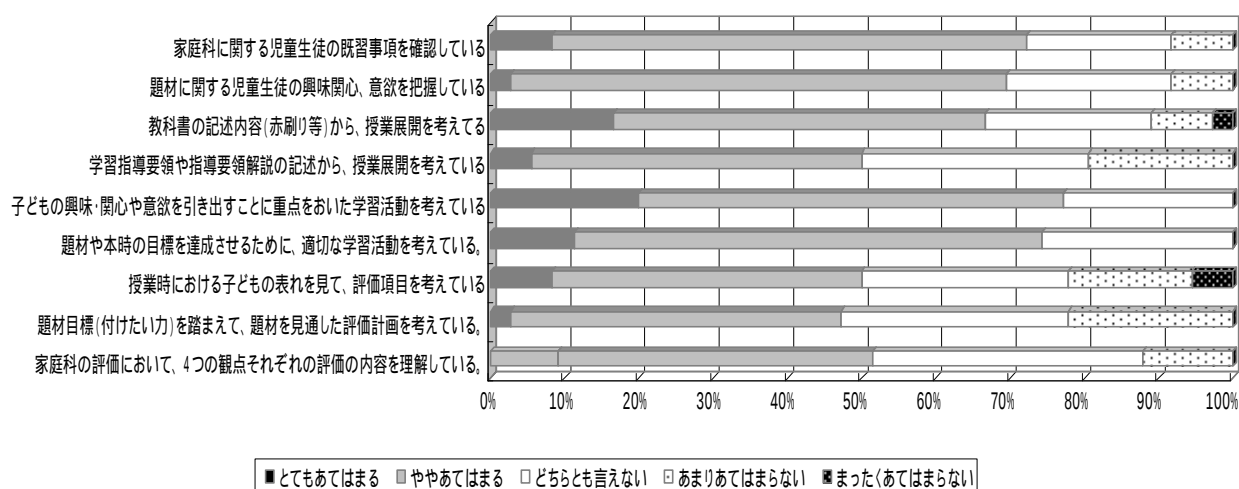
(ア) 「家庭科の授業づくり」に関するアンケート分析（研修前）

家庭科の指導に当たる教員の授業力の実態を把握するため、「指針」の活用状況調査を兼ねてアンケートを実施した。【資料 1】は、5 年研、10 年研、教科等指導リーダーの結果である。「家庭科に関する児童生徒の既習事項の確認をよくしている」では「とてもあてはまる」「あてはまる」が 72%、「子どもの興味・関心や意欲を引き出すことに重点をおき学習活動を考えている」では「とてもあてはまる」「あてはまる」が 76%であった。このことから、家庭科の指導に当たる教員は、子どもの実態把握に努め、子どもたちが主体的に取り組める授業づくりに力を入れていることが分かる。

しかし、「教科書の記述内容（赤刷り等）から授業展開を考えている」では「とてもあてはまる」「あてはまる」が 65%であるのに対して、「学習指導要領や指導要領解説の記述から、授業展開を考えている」では「とてもあてはまる」「あてはまる」が 50%と少なく、「あまりあてはまらない」が 20%と多かった。このことから、家庭科の指導に当たる教員は、教科書の内容に沿いながら授業の流れを考えるが、題材や各時間における付けたい力を解説で確認し、教材研究を十分に行って授業を実践するという点は、弱いのではないかと考えられる。

また、「題材目標（付けたい力）を踏まえて、題材を見通した評価計画を考えている」

家庭科の授業づくりに関するアンケート(研修前)



【資料1】家庭科の授業づくりに関するアンケート(研修前)対象数: 5年研・10年研・教科リーダー 36人

「家庭科の評価において、四つの観点それぞれの評価の内容を理解している」では、「どちらとも言えない」「あまりあてはまらない」が多い。このことから、評価の捉え方が曖昧なまま題材を計画し、適切な場面・内容で評価する力が弱いことが推察される。そのため、子どもたちの関心・意欲を引き出すことに重点が置かれた体験活動が中心となり、本来付けるべき家庭科の力が十分に付けられていないのではないかと懸念される。

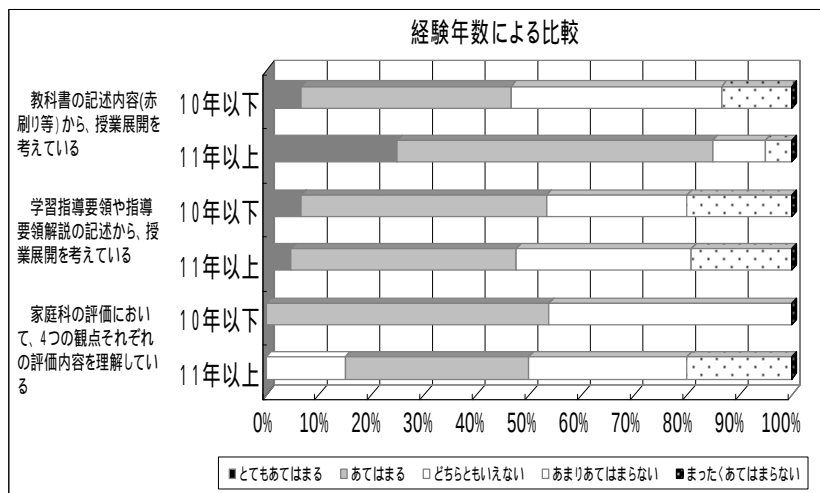
さらに、経験年数別で比較すると、【資料2】に示すような三つの点で顕著な差や特徴が見られた。

からは、経験年数が少ない教員のほうが、教科書の記述だけでなく、学習指導要領解説にも目を通して教材研究をしているということである傾向がうかがえた。

また、の結果を踏まえ、の結果から考察してみると、

経験年数の多いベテラン教員ほど、解説から付けたい力を捉えて授業展開を考えるのではなく、自分の経験や得意分野を重視して授業を展開しているのではないかと推測される。

からは、10年以下の教員に「どちらともいえない」の回答が多く見られ、経験年数の少ない教員ほど、評価に対する理解には自信がなく、ベテラン教員でも、「あまりあてはまらない」と回答していることから、評価に関する研修を深めていく必要があることが分かった。



【資料2】経験年数別によるアンケート分析(質問項目) 対象数: 10年以下 15人、11年以上 21人

(イ) 家庭科の授業づくりにおける困り感

【資料3】は、家庭科の授業づくりにおいて感じている困ったことをまとめたものである。社会の変化に伴う家庭環境の変化から、家庭科の授業づくりに難しさを感じている指導者が多いことや、特に「評価」に関して困り感を感じていることが分かる。

これらのアンケート結果から、家庭科の指導者が抱える課題を捉え、「家庭科の研修において培いたい力」を以下のように設定した。【資料4】

- ・生活を創意工夫する能力の評価が難しい。
- ・評価場面や評価材料がこれでよいのかと疑問を持ちながら授業を行っている。
- ・実習中の見取りや評価の方法、実習だけでなく、1時間の中で話し合ったり友達と関わったりする方法を学びたい。
- ・技能の実習中の評価が難しい。
- ・一人一人の表れを見取るのが難しい。
- ・実践を家庭ですることへの協力が難しい。
- ・家庭の事情を考えると家族との関わりなどを学習する際にどの程度まで授業で触れてよいのかいつも悩みます。

【資料3】家庭科の授業づくりにおける困り感(一部)

- ・解説をよく読み、付けたい力を明確にして展開を考えること。
- ・付けたい力を達成させるための学習活動を考えること。
- ・評価の方法や内容について理解を深めること。
- ・付けたい力と評価を関連させて、題材計画を立てることができること。

【資料4】家庭科の研修において培いたい力

これらの点に重点を置き、「指針」を活用した家庭科の授業力向上をねらいとするセンターにおける研修を構想することとした。

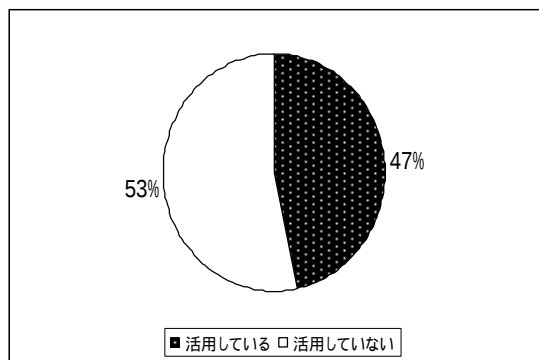
(ウ) 「指針」の活用状況に関するアンケート(対象数：74人)

【資料5】は、上記までのアンケート対象者に加え、地区教科研修会の参加者の研修前の「指針」の活用状況を示している。

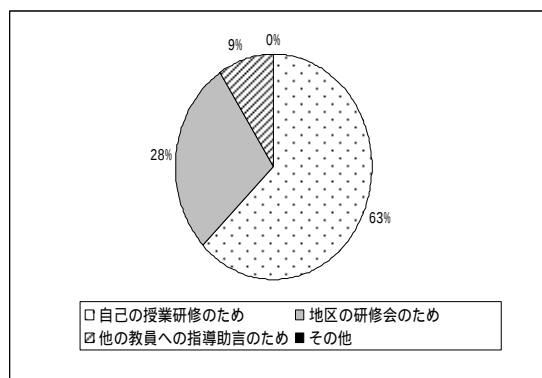
各学校に配布されてはいるが、内容を確認する機会は少ないようで、「指針」の配布2年目となるが、十分に活用されている状況とは言えない。指針の中身をよく知ってもらうとともに、具体的な活用方法についても、研修会で紹介していく必要性を感じた。

また、既に、活用している場面として、「自己の授業研修の場面」が一番多かった【資料6】。

具体的な活用内容としては、「地区で異校種の教員が研究授業を行うのでそのための教材研究として活用した」「中学校：食の内容で評価規準の設定例を読み合って指導案の作成をした」「静岡県の特産物を知る授業において指針にある地図を活用した」「内容B、Cにおける小中の違いを確認した」などがあり、「小中の系統性」「静岡県ならではのこの指針の構成上の特徴を生かした使い方」をしている研修員もいた。



【資料5】授業づくり指針活用状況(研修前)



【資料6】授業づくり指針活用内容(研修前)

イ 「指針」を活用した研修

前述の研修員の実態調査結果を踏まえ、経年経験者研修や教科等リーダー研修において、「指針」を活用した「家庭科の授業づくり」に関する講義や演習を行い、家庭科の授業力向上を目指した。

「指針」には、以下のような特徴があり、指導事項と「評価規準の設定例」の両方を見ることで各題材における付けたい力が明確となり、題材計画を構想しやすい内容になっている。



【資料 7】5 年経験者研修における活用

- ・小中の指導内容の違いとつながりを意識して授業展開を構想できるように、各内容で小学校に続けて中学校の指導計画例を掲載してある。
- ・各指導事項に合わせて、国立教育政策研究所が示している「評価規準の設定例」を示してある。

(7) 5年経験者研修における活用（研修員 静東地区：8人、静西地区：5人）

5年経験者研修では、付けたい力を明確に捉えた題材構想力を磨くことをねらいとした。5年経験者研修には、全体研修・がある。家庭科の教科部会の参加者には、小学校の場合、今年度初めて家庭科を担当するという教員もいる。そのため、全体研修では、教科理解を深めるため家庭科の教科のねらいと指導事項について「指針」を活用しながら、講義を行った【資料7・8】。そして、全体研修では、特に「家庭科における評価」に重点を置き、

評価のねらいとその在り方について講義と演習を行っ



【資料 8】5 年経験者研修における活用

＜題材計画＞

付けたい力を踏まえて

付けたい力を達成させる学習活動を！

付けたい力と関連させて

評価内容に合う方法で

時間	○学習のねらい ・ 学習活動	評価内容＜ ＞とその方法＜ ＞

【演習内容】

「指針」で指導事項と評価の設定例を調べ、題材における付けたい力を明確にしてから、題材計画を立てる。

【資料9】5年経験者研修全体研修 の演習用ワークシート

(1) 5年経験者研修員の指導案の変容

5年経験者研修のプログラムでは、センターにおける全体研修・の2回の研修の他、各学校において、2回の授業実践を行う。この2回の授業実践には、指導主事が訪問し授業改善に向けた指導を行う。全体研修・の講義や演習、1回目の授業実践から学んだことを生かし、2回目の授業実践では、家庭科の教科のねらいを理解し、付けたい力を明確



【資料 10】5 年経験者研修における活用

にした授業展開を考え実践していく研修員が多い。

こうした変容は、学習指導案の内容から見取ることができる。【資料 11・12】は、5 年生の家庭科を担当する教諭の指導案である。【資料 11】にあるように、1 回目の授業実践では、評価と学習内容

の関連が適切につかめておらず、何をどのような方法で評価するのか、不明確な題材計画であった。そのため、1 時間 1 時間のつながりが感じられず、題材を通して付けたい力に至るまでの見通しが不十分な授業展開になることが危惧された。

【資料 12】は、全体研修において評価に関する講義・演習を受けた後の、2 回目の授業実践の指導案である。題材の評価規準によってこの題材で子どもたちに付けたい力を明確に示し、1 時間ごとのねらいと学習活動とその評価の計画を盛り込んでいた。題材を通して付けたい力を確認し、題材のどの場面で、何を、どのような方法で評価するのか、見通しを持った指導案を立てることができていた。

全体研修では、全体研修に加え、【資料 9】で示したように「家庭科の評価と授業づくり」の講義や、「指針」「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」を活用した指導案作成の演習を行った。これらの演習により、評価に視点を置いて題材構想を見通す力をより高めることに有効であったと言える。

5 年家庭科 学習指導案				
1	題材名	元気な毎日と食べ物～バランスのよい食事を考えよう～		
2	題材の目標	・毎日の食事に関心をもち、栄養を考えた食事をしようとする。 ＜関心・意欲・態度＞ ・おいしいごはんの炊き方やみそ汁の作り方について工夫している。 ＜創意・工夫＞ ・ごはんのみそ汁の調理ができる。 ＜技能＞ ・五大栄養素の種類と働きについて理解し、栄養を考えて食事をとる大切さについて理解している。 ・ごはんのみそ汁の調理の仕方について理解している。＜知識・理解＞		
3	題材計画			
次	時	学習内容	評価	
1	1・2	・五大栄養素について知り、食品を 3 つのグループに分ける。	関・意・態、知・理	
	3（本時）	・バランスのよい食事の組み合わせ方が分かる。	知・理	
2	4・5	・だしの取り方、みその入れ方、材料の切り方、材料を入れる順序を調べ、みそ汁をおいしくつくるコツを知る。	知・理	
	6	・ごはんの炊き方や米の吸水、後片付け方が分かる。	知・理	
3	7～9	・ごはんのみそ汁の調理ができる。	技、関・意・態	
4	10・11	・バランスのよい食事を考え、実践し発表する。	創・工	

【資料 11】全体研修 後の 1 回目の公開授業実践指導案

5 年家庭科 学習指導案

1 題材名 じょうずに使おう ものやお金

2 題材の目標

物や金銭の使い方に関心をもち、金銭の大切さについて考え適切に買い物をしようとする態度を育てるとともに、目的に合った品物の選び方や買い方ができる。

3 題材の評価規準

家庭生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	家庭生活についての知識・理解
自分の生活とのかかわりから、物や金銭の大切さに気づき、その使い方に興味を持ち、その使い方に興味を持っている。	身近な物や金銭の使い方を直し、計画的な使い方を考えたり、工夫したりしている。	購入しようとする物の品質や価格などの情報を集め整理することができる。	目的や品質を考えた、物の選び方や適切な買い方について理解している。

4 指導と評価の計画

時間	○ねらい・活動	評価規準・評価方法			
		家庭生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	家庭生活についての知識・理解
1	○物や金銭の大切さに気づき、その使い方に興味を持つことができる。 ・身の回りの持ち物を見直し、お金の大切さや使い方を考える。	自分の生活とのかかわりから、物や金銭の大切さ、使い方に興味をもっている。 （ワークシート）			身近な物や金銭の使い方を直し、金銭の大切さについて理解している。 （ワークシート）
2	○目的に合った品物の選び方について考え、工夫ができる。 ・商品と比較し、品物の選び方について考える。		目的に合った品物の選び方について考える。 （発表・ワークシート）	目的や品質を考え、比較に必要な情報を集めて選ぶことができる。 （発表・ワークシート）	
3	○品物の品質や価格などの情報を集め整理することができる。 ・疑似買い物体験を通して、品物の選び方を考える。	品物の選び方に関心をもち、適切に購入しようとしている。 （観察・ワークシート）	品物の選び方や買い方について考え、工夫している。 （発表・ワークシート）	品物の比較に必要な情報を集め、整理することができる。 （ワークシート）	
4	○いろいろな支払い方と支払いの方法があることを知っている。 ・疑似買い物体験を通して、支払い方や支払い方について知る。	品物の支払い方、支払い方に関心をもち、適切に購入しようとしている。 （観察）			マークや品質表示の役割を知り、適切な支払い方、支払い方について理解している。 （ワークシート）

【資料 12】全体研修 後の 2 回目の公開授業実践指導案

このような方法で、10 年経験者研修においても、「指針」を活用した演習を行い、評価の在り方と題材計画の関連性に着目しながら、題材構想づくりの理解を深めることができるようにした。

(ウ) 教科等指導リーダー研修会での「評価方法工夫改善の演習」における活用（研修員 静岡県地区：12 人、静岡西部地区：8 人）

2 回目のリーダー研修会では、研修員に実際に授業で活用したワークシートなどの評価資料を持参してもらい、評価の演習を行った。【資料 13】のようなワークシートを使い、目標に準拠した評価項目の理解とその評価方法、おおむね満足できる状況・十分満足できる状況を考える演習を取り入れた。この演習は、評価の観点の趣旨とその内容が適切に結び付かず、本時のねらいがずれてしまう授業がしばしば見受けられるが、リーダーがこうしたずれに気付き、指導に当たる力を向上することをねらった。

評価方法等の工夫改善ワークシート						児童・生徒が実現している学習の状況が質的な高まりや深まりをもっているかと判断されるとき	
発表者	第何時	評価項目	本時の目標	評価方法	「おおむね満足できる」状況	「十分満足できる」状況とは	
1	/	関・意・態 創意工夫 工夫創造 技能 知・理		行動観察 学習カード 写真 製作などの計画表 実験・体験記録表 製作物 ペーパーテスト 相互評価 その他			

評価方法等の工夫改善ワークシート（小学校 事例 2 より）						
発表者	第何時	評価項目	本時の目標	評価方法	「おおむね満足できる」状況	「十分満足できる」状況とは
例	/	関・意・態 創意工夫 工夫創造 技能 知・理	家族のためのエコパーティーに用いる飲み物やお菓子の品質や価格などを調べ、選び方や買い方を工夫することができる。	行動観察 学習カード 写真 製作などの計画表 実験・体験記録表 製作物 ペーパーテスト 相互評価 その他	（原材料、値段、状態や内容量など）品質や価格を観点として選んでいる。	（原材料、値段、状態や内容量など）品質や価格を観点として選んでいる。 + ・ 家族の好み ・ 環境への配慮 他には？

< 演習の方法 >

事例から、ワークシートにどんな項目を記入すればよいか理解し、持参した資料について項目ごと記入していく。
評価規準の設定例から事例における「おおむね満足できる」状況、「十分満足できる」状況の判断基準を理解する。
各自の事例について、「指針」に掲載されている評価規準の設定例や指導事項から、「おおむね満足できる」状況、「十分満足できる」状況の判断基準について協議する。

【資料 13】評価方法工夫改善のための演習

【資料 14】は、参加したリーダーの感想である。「『十分満足できる状況』か『おおむね満足できる状況』の判断は難しく、リーダーとして自分の評価の捉え方について見つめ直し、さらに研究を深めていきたい」といった感想が多くあった。この演習を通して、「おおむね満足できる状況」とは、どのような子どもの姿であるのかを考えることや、付けたい力を身に付けた子どもの表れを具体的に予想して指導・支援することの重要性を理解できたと思われる。

リーダーには、このような「指針」を活用した演習を、指導者として各地区で実施し、

- ・ 本日の評価について勉強になりました。もう少し評価について学びたいです。また、各地区のリーダーとして学んだことを広めていきたいです。
- ・ 評価について理解が不十分であったと反省しています。実際の子どもの表れをもとにしてどう評価するか考えさせられました。
- ・ 評価についての認識の甘さを自覚した。自分の課題がはっきりしました。
- ・ 付けたい力を明確にすることが本当にできているか、不安な部分はあるが、題材計画をもう一度考えていきたい。

【資料 14】教科リーダーの感想

評価についての理解を深め、よりよい家庭科の授業づくりを推進していくように促した。

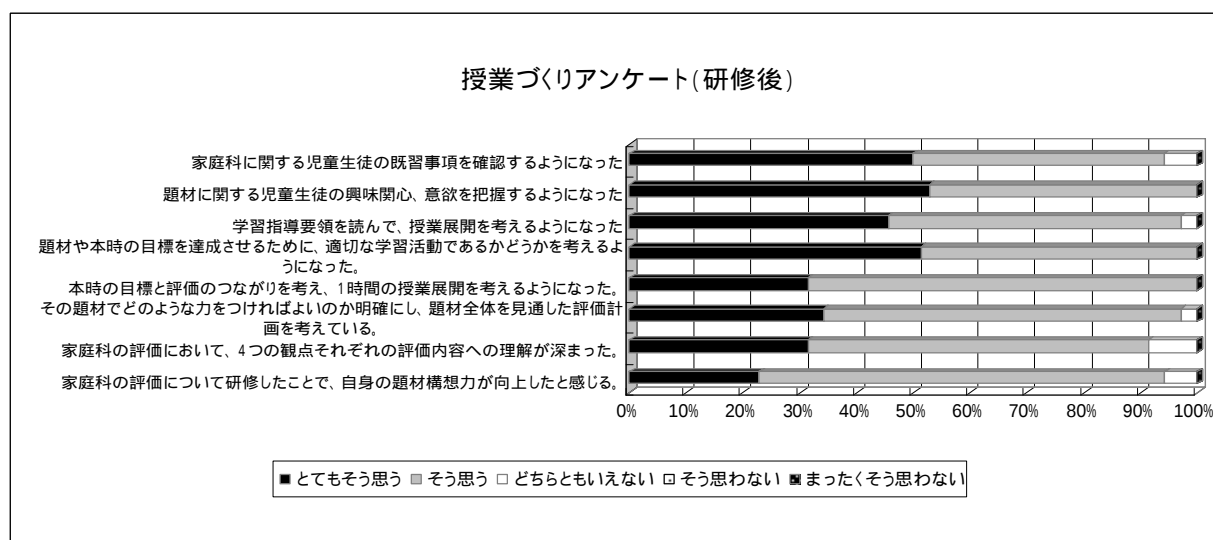
(I) 希望研修における活用

本年度より、当センターにおいて新規に開設した「家庭科の授業づくり研修」【資料15】において、家庭科における言語活動の充実、指導と評価について、「指針」を活用しながら講義を行った。この研修には、経験年数11年以上の参加者も多い。事前のアンケート調査から、ベテラン教員であるほど自分なりの授業スタイルが確立されている傾向があるという実態があった。この研修を通して、学習指導要領のねらいに沿った授業展開について、適切な評価のあり方の視点から理解を深め、専門性を高めるとともに、自身の授業スタイルを見つめ直す機会にしてもらうことをねらいとした。

【資料16】は、「研修で実施した講義『家庭科の評価』を通して、自身の評価に関する捉え方がどのように変容しましたか」という質問に対する追跡調査の回答である。調査結果からも、評価の在り方の視点から、題材を構想していくことで、1時間ごとの学習課題や目標を明確にすることで自身の題材構想力の高まりを感じていることが分かる。

ウ 研修後の研修員の実態調査

(ア) 「家庭科の授業づくり」に関するアンケート分析（研修後）



【資料17】家庭科の授業づくりに関するアンケート（研修前）対象数：5年研・10年研・教科リーダー 37人

平成25年度 家庭科の授業づくり研修 実施要項			
1	目的	実習などの体験を通して、授業に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を習得するとともに、指導の工夫や評価についての実践的指導力の向上を図る。	
2	目標	・家庭科の指導上の課題と、小中高の連携を踏まえた指導の重点について理解を深める。 ・家庭科の指導者としての専門的な知識や技術を習得する。 ・研修した内容を生かし、今後の授業を構想することができる。	
3	対象	小、中学校の家庭科を担当する教員（私立含む）	
4	研修日	平成25年8月7日（水）	
5	会場	静岡県総合教育センター	
6	主催	静岡県総合教育センター	
7	研修日程		

月日 (曜日)	時刻	内容	会場
8/7 (水)	9:00～ 9:15	受 付	研修室9前
	9:20～10:30	【講義】家庭科の授業づくりのポイント（センター指導主事） ・家庭科における言語活動の充実 ・指導と評価	研修室9
	10:30～12:00	【講演】「住生活の授業の在り方」 講師 静岡大学教育学部 教授 小川裕子 氏	
	12:00～13:00	昼食・休憩	食堂他
	13:00～13:50	【実習】「住生活の授業で使える実験実習」	研修室9
	14:00～15:00	【講義】「家庭内の防災教育」 講師 静岡県教育委員会教育総務課 危機管理担当 主査 田中理一	
	15:10～15:50	【協議】これからの家庭科の授業づくり	
	15:50～16:00	アンケート記入・諸連絡	

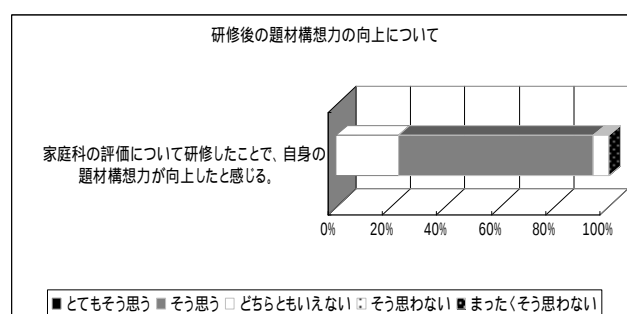
【資料15】家庭科の授業づくりの研修内容

- ・毎時間全ての項目について評価するのではなく、題材全体を見通し、どの場面で、何を評価していくかを計画的に考えるようになった。
- ・いくつかの題材で、1時間の授業での評価場面や評価方法、評価項目を整理した。題材によっては生徒にも授業での評価場面や評価方法を提示した。その結果、生徒は1時間の中での学習課題や目標が明確になり、少しずつではあるが、意欲的に取り組む生徒が増えた。

【資料16】研修後の追跡調査より

研修を受けた研修員を対象に、研修前に調査したアンケートの内容を踏まえて研修効果を考察するための「家庭科の授業づくりに関するアンケート」を実施した【資料 17】。「研修員の意識の変容」【資料 4】で示した「家庭科の研修において培いたい力」の向上を考察するために、質問内容や選択肢の言葉を事前のアンケートとは少し変えて実施した。

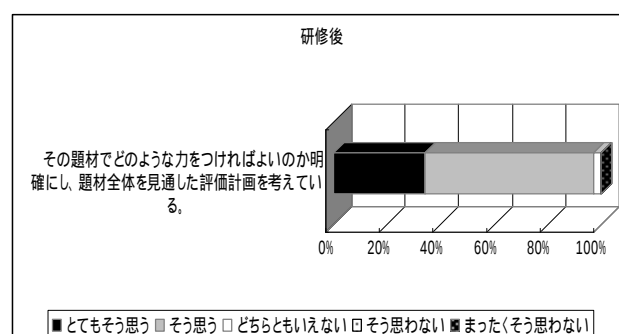
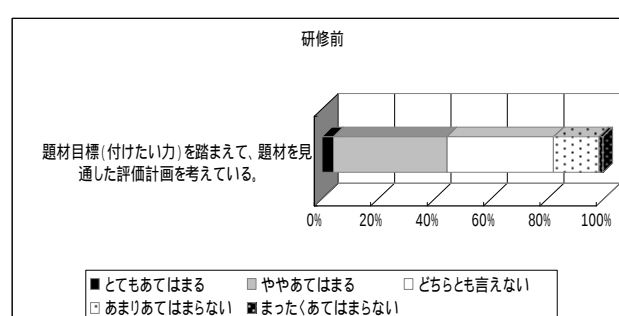
アンケート結果からは、評価を視点とした研修を受けたことで、「自身の題材構想力が向上した」について、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせると 94%であり、評価の在り方を中心に行った研修の効果がうかがえた【資料 18】。



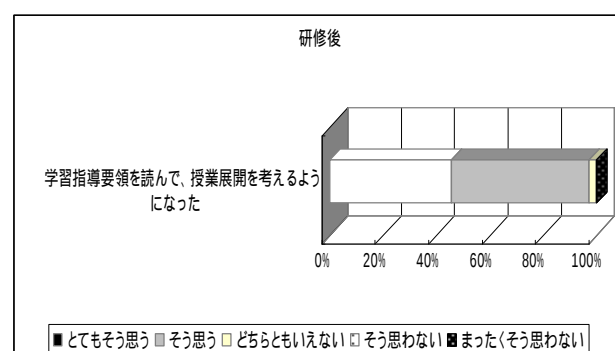
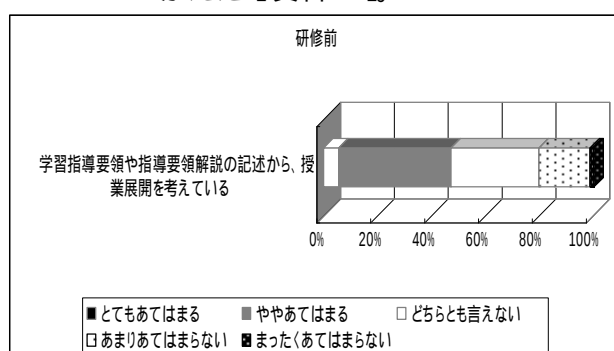
【資料 18】題材構想力の向上

また、研修前のアンケートの「題材目標(付けたい力)を踏まえて、題材を見通した評価計画を考えている」において、「どちらともいえない」または「あてはまらない」は 42%であったが、研修後の「その題材でどのような力を付ければよいのか明確にし、題材全体を見通した評価計画を考えている」の項目においては、96%が、「とてもそう思う」「そう思う」と回答しており、この違いからも題材構想力の向上を図ることができたと考えられる【資料 19】。

さらに、研修前のアンケートの「学習指導要領や指導要領解説の記述から、授業展開を考えている」の項目では、「あてはまる」と回答するのは 45%程度であったが、研修後のアンケートの「学習指導要領を読んで、授業展開を考えるようになった」の項目では、96%が、「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。改めて、自身の授業のやり方を見つめ直し、付けたい力に沿った授業づくりをしようとする研修員の変容がうかがえた【資料 20】。



【資料 19】題材を見通した評価計画力の変容



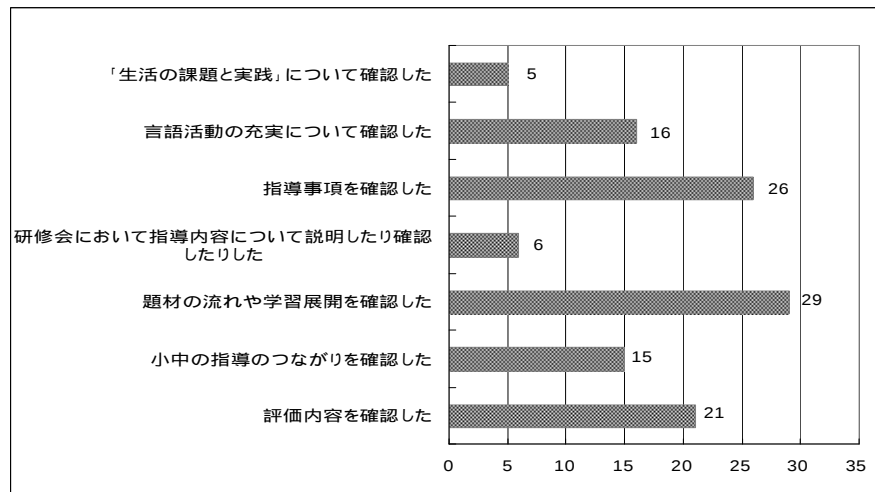
【資料 20】学習指導要領をもとにした授業構想力の変容

(イ) 「指針」の活用状況に関するアンケート

各研修において活用した「指針」を、その後自己の研修や地区の研修において、どのような場面で活用したかを調査した。研修前は、活用率は47%であったが、本アンケートでは、100%が活用したとの回答を得ることができた。結果からは、特に、指導事項や題材の流れ、評価内容を確認するための活用が多いことが分かる【資料21】。

研修前後の比較のアンケート結果からも、その題材でどのような力を付ければよいかを明確にし、題材を見通して指導計画を立てるようになった教員が増えているという調査結果が得られた。

「指針」は、内容別に指導事項と評価規準の設定例が掲載されている。このような「指針」の内容を確認、活用して、題材構想を考えることで、授業の構想力が高まり、授業改善につながっているのではないかと考えられる。



【資料21】研修以後の活用の様子 対象数：37 複数回答可

(4) 研究のまとめ

ア 研究から見てきたこと（成果）

研修前のアンケート結果から、家庭科の指導者における指導力の課題をつかみ、それを基に【資料4】に示したような培いたい力を明確にし、それらの力を育成するために「指針」を活用した研修内容を考案して、研修員や指導者の授業力の向上をねらった。成果としては次のようなことが挙げられる。

- ・研修において、「指針」を活用した演習を取り入れることで、適切な評価の在り方について理解を深め、個々の教員の指導力向上に役立てることができた。
- ・研修会において、「指針」を活用した演習を行い、「指針」の内容を紹介した。研修後は、「指針」の活用率が向上した。各自で「指針」を使用して授業改善に努めている先生方の様子をアンケート調査から得ることができた。

イ 今後の課題

- ・免許外や講師として、家庭科の指導に当たるものが多い。センターにおける悉皆研修だけでなく、より多くの対象者に、教科の指導方法の理解や指導力の向上を図ることができるよう、各地域へ「指針」を活用した研修を紹介するなど、「指針」活用の裾野を広げていく必要がある。地区の教科等指導リーダーの活用や、地区の研修会における活用を促進できるようその方法を探っていきたい。
- ・日々の授業で指針を活用しやすくするために、より具体的な授業展開例や参考資料など、補充内容について検討していきたい。評価については、具体例を示すことで理解が深まっ

ていくと考えられる。授業で活用できるワークシートの事例等を掲載していくことを通して、評価についての理解を深めるとともに、指導と評価の一体化を意識したP D C Aサイクルの授業づくりについて紹介していく場面を作りたい。

研究のまとめ

本研究では、学校における「静岡県の授業づくり指針」の活用を進めることをねらいとしてきた。その結果すべての教科で、研修・訪問業務を通して「指針」の活用について周知することができた。特に5年経験者研修では、すべての教科において「指針」を用いた講義や訪問時の指導助言を行い、その有効性について検証している。次に示すのは、5年経験者研修対象者の学校における「指針」の活用状況に対するアンケート結果である。

1 平成24年度5年経験者研修（小・中学校）追跡調査結果

(1) 「授業づくり指針」を活用したか

よく活用した	活用した	あまり活用していない	活用していない
44人	59人	14人*	2人*
37.0%	49.6%	11.8%	1.6%

*の人数には、「指針」を作成していない教科等（生活科・特別支援学級）を選択した研修員を含む。

(2) どのように活用したか

- ・学習指導案作成のときに、指導事項や言語活動を確認するために活用した。
- ・子どもに確実に身に付けさせたい内容や、他単元・他学年との系統性を確認した。
- ・学習指導案を作成する際、目標や評価規準を設定するために活用した。
- ・具体的な実践例を参考にしながら学習指導案づくりを進めた。
- ・「静岡県ならではの」部分を生かして授業づくりをした。

2 平成25年度5年経験者研修（小・中学校）追跡調査結果

(1) 「授業づくり指針」を活用したか

よく活用した	活用した	あまり活用していない	活用していない
41人	69人	7人*	2人*
34.5%	58.0%	5.9%	1.6%

*の人数には、「指針」を作成していない教科等（生活科・特別支援学級）を選択した研修員を含む。

(2) どのように活用したか

- ・単元計画を作成する上で、必ず参考にしている。
- ・単元を考える上で、子どもに身に付けさせたい力を具体的に知るために活用した。
- ・具体的な実践例や評価規準の書き方を参考に学習指導案を作成した。
- ・用語解説を参考にした。
- ・小学校での履修内容の把握に役立てた。（中学校教員）

このように、よく活用した、活用したという研修員が9割を占め、研修を通して「指針」の存在や見方、効果的な使い方を知ること、活用が促進されていることがわかる。また、自由記述の内容を分析すると、執筆側の意図が十分に理解された使い方がされており、授業改善に効果があったことが推察される。

授業改善や教員の授業力向上に対する有効性については、静岡県教育委員会が行った次のアンケート結果からも読み取れる。

1 学力検証委員会報告書 静岡県学力検証委員会（平成25年3月）

(1) 「授業づくり指針」は教員の学習指導力向上に有効か（小学校）

有効である	どちらかといえば有効である	どちらかといえば有効ではない	有効ではない
217	104	3	0
67%	32%	1%	0%

(2) 「授業づくり指針」は教員の教科指導力向上に有効か（小学校）

有効である	どちらかといえば有効である	どちらかといえば有効ではない	有効ではない
225	97	1	1
68%	30%	1%	1%

(3) 「授業づくり指針」は校内研修の充実に有効か（小学校）

有効である	どちらかといえば有効である	どちらかといえば有効ではない	有効ではない
100	124	0	0
62%	38%	0%	0%

(4) 「授業づくり指針」は教員の学習指導力向上に有効か（中学校）

有効である	どちらかといえば有効である	どちらかといえば有効ではない	有効ではない
114	60	0	1
65%	34%	0%	1%

(5) 「授業づくり指針」は教員の教科指導力向上に有効か（中学校）

有効である	どちらかといえば有効である	どちらかといえば有効ではない	有効ではない
120	55	0	0
69%	31%	0%	0%

(6) 「授業づくり指針」は校内研修の充実に有効か（中学校）

有効である	どちらかといえば有効である	どちらかといえば有効ではない	有効ではない
103	67	4	1
59%	38%	2%	1%

2 「『有徳の人』づくりアクションプラン」及び学校運営の改善状況に関する平成 24 年度末調査（学校対象）
結果 教育政策課（平成 25 年 5 月 13 日）

(1) 「授業づくり指針」を活用したか（小・中学校）

	学校全体で 計画的に活用した	教科担当等により 一部で活用した	活用しなかった
小学校	36.4%	63.6%	0%
中学校	23.7%	76.3%	0%

(2) 「授業づくり指針」を活用したか（小・中学校教員）

	活用した	活用しなかった
小学校	57.3%	42.7%
中学校	45.8%	54.2%

(3) 「授業づくり指針」は児童生徒の「確かな学力」の育成に役立ったか

（活用したと回答した小・中学校教員）

	役立った	どちらかといえ ば役立った	どちらかといえ ば役立たなかった	役立たなかった
小学校	45.1%	50.9%	3.6%	0.3%
中学校	40.8%	46.9%	11.6%	0.6%

以上のように、「静岡県の授業づくり指針」を活用した多くの学校・教員が、授業づくりや児童生徒の「確かな学力」育成に、有効である（役立った）、どちらかといえば有効である（役立った）と感じており、「指

針」の有効性については検証できたと考える。

反面、活用状況は、まだまだ満足のいく数値とは言えず、研修参加者以外での活用には課題が残る。このことから、今後も各教科において様々な機会を捉え、「静岡県の授業づくり指針」について周知を図っていくとともに、よりよい活用方法についても提案していく必要がある。その一助を担うものとして、平成 26 年度末には、総合教育センターホームページに、各教科が作成した「静岡県の授業づくり指針・補助資料(仮称)」を掲載する予定である。

また、今回の研究で特筆すべき点として挙げられる一つが、大学での活用である。(国語・社会・図工/美術・音楽)これは、教科指導者として、大学の教育学部で教鞭をとる教授を招聘したことから可能となった取組である。教科により、多少の違いはあるが、教員養成課程に学ぶ学生を対象に「指針」を用いて総合教育センターの指導主事や教科指導者が、授業づくりについて複数回の講義を行った。研究指導者や参加した学生からは、「指針」を利用したことで、実践に即した指導内容となり、教育実習や採用後の授業づくりに生きるものである、という声が聞かれたと報告されている。前述のアンケート結果と同様に、学生においても「指針」の活用が、個人の資質を向上させることに効果があったと言えるであろう。

教員にとって、早い時期に必要な授業づくりのスキルを正しく身に付けることは不可欠であり、正しい知識を有した教員が増えることは、学校全体の授業改善を進めることに繋がる。このことから、今後も教科指導者と連携を図り、大学における活用を推進し、学生自身が「指針」を活用する場面の提案などを積極的に行っていきたい。

これからも、各学校の「魅力ある授業づくり」のために、様々なアプローチを工夫しながら、「静岡県の授業づくり指針」の普及を進めていきたい。

「静岡県の授業づくり指針」の活用に係る研究 委員名簿

	氏 名	所 属・職 名	24	25
委員長	杉山 洋一	総合教育センター授業づくり支援課・学校支援担当参事兼授業づくり支援課長	○	
委員長	櫻井 宏明	総合教育センター授業づくり支援課・学校支援担当参事兼授業づくり支援課長		○
副委員長	渡邊 静也	総合教育センター東部支援班・東部支援担当参事	○	
副委員長	鈴木二三哉	総合教育センター東部支援班・東部支援担当参事		○
国語部会	江口 尚純	静岡大学教育学部・教授	○	○
	○竹下 敦子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	鈴木 泉	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	佐野 文子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	森谷 幹子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	中嶋記恵子	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
	伊藤 直美	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
社会部会	塩川 亮	静岡大学教育学部・教授	○	
	磯山 恭子	静岡大学教育学部・教授		○
	○岡本 裕之	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	
	○斉藤 勝	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	清水 達夫	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事		○
	小林 誠	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	
	小谷 和之	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	鈴木 孝明	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事		○
算数/数学部会	佐藤 正和	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
	國宗 進	静岡大学教育学部・教授	○	○
	○楠 富之	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	
	○藁科 昌樹	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	西川 正一	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事		○
	渥美 直久	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	草谷 篤	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
理科部会	前原 一徳	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
	丹沢 哲郎	静岡大学教育学部・教授	○	○
	鈴木 康浩	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	後藤 昌英	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	
	○飯田 寛志	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	○新林 章輝	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	中野 志保	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事		○
	三田 和弘	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	
英語部会	渡辺 健幸	総合教育センター東部支援班・指導主事		○
	白畑 知彦	静岡大学教育学部・教授	○	○
	○澤入 章	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	柳瀬 昭夫	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	○田淵 江美	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	
	山崎 裕子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	檜木小重美	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	
	大川 美紀	総合教育センター東部支援班・指導主事		○
	上野 朋子	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○

	氏 名	所 属・職 名	24	25
音楽部会	北山 敦康	静岡大学教育学部・教授	○	○
	○岡田 直子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	
	寺田 綾子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・主任指導主事		○
	山田 正訓	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	○勝又 理恵	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
図工/美術部会	登坂 秀雄	静岡大学教育学部・教授	○	○
	片瀬 恵子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・主任指導主事	○	
	○内山 春枝	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事		○
	○小越 隆則	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
体育/保健体育部会	伊藤 宏	常葉大学教育学部・教授	○	○
	○古田 友美	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	齋藤 篤	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	渡邊 康男	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
技術・家庭 技術部会	紅林 秀治	静岡大学教育学部・教授	○	○
	○佐貴 正明	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	宮崎 克久	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○
家庭/技術・家庭 家庭部会	新井 映子	静岡県立大学食品栄養科学部・教授	○	○
	○増田 裕子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	堀之内育子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
	秋岡 智子	総合教育センター東部支援班・指導主事	○	○

印は事務局 ○印は教科代表

事務局

	氏 名	所 属・職 名	24	25
事務局長	神田不二彦	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・班長兼主任指導主事	○	○
	鈴木 憲	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・班長兼主任指導主事	○	
	操上 俊樹	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・班長兼主任指導主事		○
	藤本 眞二	総合教育センター東部支援班・班長兼主任指導主事	○	○
研究主任	佐野 文子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・指導主事	○	○
研究副主任	片瀬 恵子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・主任指導主事	○	
研究副主任	寺田 綾子	総合教育センター授業づくり支援課授業支援 班・主任指導主事		○